
バカヤロー！ 小父さんたちは怒っているんだよ

一二三四

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

バカヤロー！ 小父さんたちは怒っているんだよ

【Nコード】

N 1 2 2 3 Y

【作者名】

一二三四

【あらすじ】

小父さん……、他所^{よそ}の年配の男性を親しんで呼ぶ語。

だから、小父さんたちは憎くて怒っているわけじゃないんだ。いいかい、小父さんはね、みんなに良い人になって欲しいから、日本の国をもう一度昔のように良くしたいから、敢えて厳しい意見を言っただよ。

そのところを勘違いしないでね。

ねっ、みんな。

両親を大切にする、お年寄りを大切にする、身体障害の方が

いたら進んで手助けをする、困っている人がいたら自分から手助けを申し出る、喧嘩をしない、暴力を振るわない、他人を妬まない、挨拶をする、どれも当たり前のことだよ。当たり前前のことを当たり前にする、そんな日本に戻そうよ。そうすれば、住み易い国になるはずだよ。

そのためには、まず自分が変わらないとね。

一人ひとりが変われば、世界が変わる、簡単なことだよ。

それでは、気の弱い定年間際の窓際サラリーマン山田一郎の怒りの嘆き節、とくとお聴きください。

尚、同姓同名の方がいらっしやいましたらごめんなさい。

けして悪気があって使ったわけではありません。

第一話 騒音の男

第一話 騒音の男

「うるせえーッ！ 音をもらすなあーッ！ このヤローッ！」
ついに切れた。

山田一郎はラッシュアワーを避けるため毎朝五時半には家を出る。
ようやく見つけた平穏な時間帯、だったはずだ……。

乗っている乗客もほとんどが顔見知りになっている、とはいっても
別に会話を交わすわけではない。

ただ見慣れた顔ばかりだとなんとなく安心感がある。

いつもの顔がいつもの席にいないと、なにか気になるものだ。

山田はよほど空いていない限り、座ることはない。

況しては優先席に座ることなど、天地がひっくり返ってもない。

いつも進行方向から見て左側のドアの所に立つ。

いつかはこうなると思っていた。

山田は普段は小心な男だ。

サラリーマン生活三十五年、後三年で定年だ。

窓際族として、毎日無為に日々を過ごしている。

電車には時々異物が紛れ込む。

その日は学生風のアベックが乗っていた。

山田のいつもの場所に立ち、いちやついている。

「チエッ！」

山田は仕方なしに、反対側のドアに立った。

どうも落ち着かない。

すると、山田の耳に嫌な音が流れ込んできた。

『ブンチャカ、ブンチャカ、ブンチャカ、チャカチャカチャカ……』
癪に障る音だ。

男のしているヘッドホンからもれてくる。

その音は電車の騒音に時々かき消されるが、直ぐに山田の頭の芯に入り込んでくる。

「我慢、我慢、我慢」

山田はジッと耐える。

耳を手で塞いでみた。

『ブンチャカ、ブンチャカ、ブンチャカ、チャカチャカチャカ……』
それでも聞こえてくる。

「ああ、耳栓を持ってくれば良かった」

色々と気を紛らしてみるのが、耳の奥に纏わりついてくる。

『ブンチャカ、ブンチャカ、ブンチャカ、チャカチャカチャカ……』

「向こうへ行け、バカヤローッ！」

山田は心の中で叫んでいた。

『シャカシャカシャカシャカ……ブンチャカ、ブンチャカ、ブンチャカ……』

只でさえささくれ立った心を逆撫でする音だ。

・ ・ ・ なんてこんな騒音を好むのだろう。こんな音を好む奴はクズだ・

と、段々考え方が極端になってくる。

こんなのはただの騒音だ。

「くうーう……、もう限界だ」

まさに逆鱗に触れた。

2

『バツシーン！』

山田はその男の左頬にビンタを喰らわしていた。

『なっ、なにするんだあーッ！ こ、このヤローッ！』

周りの乗客が慌てて遠ざかった。

「ヤツカマシーッ！ みんなの迷惑を考えろーッ！」

と叫んでヘッドホンを耑り取り、床に叩きつけてグシャッと踏んづ

けた。

『な、な、ななな……』

山田の意外な行動にその男は言葉が出ない。

『だ、だからって、壊すことないじゃんか……。な、殴ることないじゃんか』

男は涙目で、周りの乗客に訴えるように言った。

「う、うるさい。公共の場で騒音を流す奴が悪い。学校でそんなことも教わってないのか」

『だ、だからって、こ、壊すことないじゃないか。ア、アルバイトして買ったのに……』

「そ、そんなこと知るか……」

感情のままに怒りをぶつけた山田も、段々冷静さを取り戻してきていた。

・・ちよつとやり過ぎたか……。さあ、困ったな。まさか、弁償してやるとも言えないし……・・

『ぼ、ぼく、訴えます。殴られた上に、ウォークマンを壊されたんだから。どなたか、証人になってください』

『や、やばい。そうでたか……』

「お願いします。どなたか、証人になってください」

その男は哀願するが、誰もそれに応じようとはしない。

・・それはそうだろう。……普段傍若無人に振舞っている者が、涙目で訴えたとして誰が同情するものか・・

山田は少しホッとして、強気になってきた。すると、

『俺が証人になってやるよ。俺が証言してやる』

茶髪の男が名乗り出た。

『わ、私も証人になるわ』

ウォークマンをつけた若い女性も名乗り出た。

・・や、やばい。想定外の展開だ。これではどう考えても俺の不利だ・・

『おい、オヤジ、次の駅で降りろよ。警察に突き出してやるからな』

涙目の若者が味方を得た所為か、急に強気になってきた。

『弁償しろよ。それと慰謝料もだ』

「うつ、……」

『ふふふふ……、正義は勝つ』

「痛い、痛い」

勝ち誇った若者が山田の右手を捻りあげた。

『ゴツ！』

『い、いてえーッ！ な、なにするんだ』

疲れたサラリーマン風の男が若者の頭に拳を叩きつけたのだ。

『おい、若いの……。黙って聞いてりや調子に乗るんじゃないよ』

『な、なんだとおーッ！ やる気かッ！ まとめて面倒みてやるぞ』

と、拳を握り締めて身構えた若者が、茶髪に同意を求めた。

『バゝ力。なんで俺が、そこまで付き合わなくちゃいけねえんだ』

茶髪が遠ざかつて行った。

『そうよ、あんたバカじゃないの。勝手にやんなさいよ』

『えっ、あつ、そ、そんな……』

再び形勢逆転、若者は情けない顔を去って行く茶髪に向けた。

やがて電車は日暮里駅に滑り込んだ。

と、その若者はサッと降りて、山田の前から姿を消した。

・ふゝう、よかった。つい調子に乗ってしまった・

山田一郎は大きくため息をついた。

御仕舞

第二話 痴漢騒動

1

『なにをするんですかーッ!』

・……………? なんだ、なんかあったのか?・

山田一郎は降りる駅が近づいたので、車両の奥から出口へと移動した。

・あれ、なんだこの女、俺を睨みつけているぞ・

『助平ジジイッ!』

「す、助平、ジジイ……、俺のことか」

周りの目が一斉に山田に向けられた。

「ま、まま、待てよ。い、いたい、俺がアンタになにをした」

『今、私のお尻を触ったじゃないですか』

「俺があ…………、アンタのお尻を…………。ふっ、ふざけんな、俺は降りるのにこっちへ移動しただけじゃないか」

『いいえ、確かに触りました』

「ちょ、ちよっと待ってくれよ。俺は鞆と新聞で両手が塞がっているんだよ」

山田は他の乗客にもわかるように、両手を翳した。

『でも、確かに触りました』

『いやねえ、朝から。だからオヤジと一緒に乗るのは嫌なのよ』

女の囁き声がした。

『おい、オヤジ。早く謝った方がいいぞ』

どっかから男の声が飛んだ。

『謝ってください。出ないと警察を呼びます』

「け、警察……。たまたま鞆が当たったぐらいで、警察」

この言葉で、山田は切れた。

「ふざけんな、バカ野郎ッ! 警察でもなんでも呼んでみる! 不

細工な面あしやがつて、なぐにが、痴漢じゃ。鏡を見てみる」

『まゝあ、ひどいことを。開き直るんですかつ！』

女の手が山田の手首を掴んだ。

山田がそれを振りほどくと、

『きゃーッ！ 痛いッ！』

と叫んだ女が泣き出した。

・・やばい。これはやばい。このままでは痴漢にされてしまう・・
山田に男が迫ってくる。

『おい、女を泣かせるんじゃないよ』

こんな時に正義感を振りかざす奴が必ずいるものだ。

「俺はなにもしてないよ。ちょっと鞆は触れたかもしれないけど」

『ほら、皆さん聞きましたか』

「この狭さだよ。誰が降りようとしても鞆ぐらい触れるだろう。それに俺は、すみません、降りますって声をかけた」

『いいえ、聞いてません』

女はどうしても山田を犯人にしたいらしい。

『あくまでも惚けるなら警察へ行きましょう』

「わかった。それじゃあ、警察へ行つて話をつけよう」

山田は段々冷静さを取り戻してきていた。

すると、

『そうだよ。その人は確かに降ります、すみませんって言ったよ』

「えっ！？ ……」

どうやら山田の隣に立っていた学生風の若者らしい。

2

『確かにその人、言ったよ。ぼくははっきりと聞いた』

『わしも聞いた』

白髪の男が言った。

そして、

『だいたいあんた、少しは遠慮したらどうなの。この狭い中で新聞を広げて』

『そうだよ。他人に文句を言う前に、我が振り直せ、だ』

『まーあ、私のどこが悪いンですか。被害者は私ですよ』

と言つて、女は周り睥睨した。

『おい女。いい加減にしろ。大騒ぎしやがって。この被害妄想のヒステリー女が……』

『な、なんですってッ!』

女が声の方を振り返った。

『……あッ!』

女はその声の主を見た途端、驚きの声をあげた。

『思い出したか』

周りの乗客は何事が起こったかと、怪訝な表情をしている。

『あんた早く降りた方がいいよ。こんなのに付き合うことはねえよ』

『ああ、俺も思い出した。この女、この間も騒いでいた』

他の乗客が呟いた。

『こいつは常習犯だよ。ストレスを発散するために、いつもこんな言いがかりをつけているんだ』

『欲求不満の雌豚だ。だいたい女性専用の車両があるんだから、そっちに乗ればいいじゃないか』

『そうだよ。ふざけやがって、こんな女のひと言で男の人生が狂わされるんだから』

女はうつむいたまま無言……。

やがて列車がホームに滑り込むと、女は辺りの乗客を突き飛ばすようにして慌てて下りた。

『きゃーッ! この女痴漢でえーす』

誰かが女性の声色を使って悲鳴をあげた。

『きゃーッ! 私も触られた。誰か、あの女を捕まえてえーッ!』

『あっははは……』

『がっ、ははは……』

『わぁーッ!』

笑い声とともに、あちらこちらから大きな歓声があがった。

・・ふーう、助かった。あのまま痴漢にされたら、俺の人生もここまであつた・・

まさに紙一重、人生どこに不幸が潜んでいるかわからない。

御仕舞

第三話 突き飛ばし男編

1

『ギャーッ！』

という物凄い悲鳴に続いて、

『ドッカーン！ バッターン！』

という騒音、乗客の視線が一斉に車両の最後尾へと向いた。

『グワァーッ！ ギュー……』

もんどり打って床に叩き付けられた男はどうやら気を失ったようだ。物音に驚いた車掌が慌てて出て来た。

『お客さん、お客さん、どうしました？ 大丈夫ですか？』

男は口元から泡を吹いており、ピクリとも動かない。

車掌が乗客に怪訝な顔を向け、

『お客さん、しっかりしてください。もう直ぐ駅に着きますから』

もう一度気絶している男の耳元で囁いた。

『すみません、どなたか手を貸していただけませんか？』

車掌が訴えると、近くにいた若い男がおずおず進み出た。

『すみませんが、駅に連絡を入れますので、少し見ていてください』

『あつ、うつ……』

若者はどうしていいかわからずただ突っ立っている。

車掌は自分の部屋に駆け込んだ。

間もなく、電車は上野駅に滑り込んだ。

ケガ人が出たので暫く駅に停車するとの車内放送が流れた。

チツと舌打ちをして、数名の乗客が電車を降り、隣の京浜東北線ホームに並んだ。

タンカーを持って駆け寄って来る数名の駅員に、

『この人です。この人があの人を蹴飛ばしました。私、見ました』

山田の隣にいた女性が大声で訴えた。

『えっ、ほんとうですか……、お客さん、少しお話をお聞きたいのですが、よろしいですね』

「……、えっ、あっ……」

有無を言わせない言い方だ。

山田は理由を話せば、自分の主張が通るだろうと考えていた。

・まだ、六時半。少しぐらい時間を取られても遅刻することはないだろう。会社に電話するまでもないな・

と安易に考えていた。

それで山田は、大人しくその駅員の後に従った。

上野駅の駅員控え室に通され、警察が来るので暫く待つようと言われた。

・えっ、なぜ？ 警察……？・

・もしかして大ケガ、いや、もし死んでいたら、俺は殺人罪になるのか・

という恐怖心が突然込み上げてきた。

・これで俺のサラリーマン人生も終わりか……。後悔先に立たず、短気は損気、色々な想いが頭を駆け巡る。ああ、家族は悲しむだろうな・

しかし、あの男に対する懺悔の気持ちも、ケガを心配する気持ちも湧いてこなかった。

その時になって、相手への思いやりというよりも、

・ああ、なんであの車両に乗ったんだろう。なんであの男があそこになければいけないんだ。あいつさえいなければ、こんなことにはならなかったはずだ。あいつがあんなことをしなければ、俺が怒ることもなかった。そうだ、あいつが悪いんだ。俺は運が悪いだけだ・

という、真に身勝手な考えが湧きあがっていた。

十分ほど待っただろうか、駅員に案内された警察官が二人部屋に入って来た。

『いや、お待たせしました。喧嘩にいたった状況について、少し聞かせてください』

警察官の聞き方はあくまでも礼儀正しかった。

と、若い警察官の無線の呼び出し音が轟いた。

はい、と応えてその警察官は部屋を出て行った。

『……なにっ、……死んだ。……』

と繰り返す驚きの声が、山田の耳にも届いた。

その後、声を潜めたのか話し声は途絶えた。

・・し、死んだ。……殺人、……刑務所、……憎しみ、懲戒免職・

色々な想いが頭の中を駆け巡り、脂汗が滴る。

それまで好意的に事情聴取をしていた年配の警察官の表情が変わった。

息詰まるような無言の時間が部屋に流れる。

やがてカチャリとドアのノブを捻る音がして、外に出た警察官が部屋に入ってきた。

山田にはとても長い時間が過ぎたような気がした。

中に残った警察官と山田の視線が入って来た警官の口元にそそがれた。

ゆっくりと口が開きなにごとかを語り出したが、山田の耳には意味のある言葉として捉えられなかった。

『あ・の・お・と・こ……』

繋がった言葉ではなく、音が一つずつ独立して聞こえてくる。

・・やはり、死んだのか……。俺は……。バカだった。いくら後悔しても、やってしまったことはもう戻らない・

山田はそうなってしまった経緯を思い出しながら、後悔の念に浸っていた。

吊り革に掴まって新聞を読んでいた田中は、いきなり後ろから突き飛ばされた。

「うッ！ なっ、……」

振り返ると、ひとりの男が後ろのドアに向かって歩いて行く姿が目に入った。

・ ・ ・ またあいつか、いつも忌々しいやつだ・ ・ ・

翌朝、田中は昨日と同じように新聞に読みふけていた。

・ ・ ・ 間もなく上野駅だ。来るぞ、あの男・ ・ ・

リュックを背負い、野球帽を目深く被った男の姿を右目の隅でとらえた。

・ ・ ・ 来る、来る、ドンドン迫って来る・ ・ ・

早朝六時半の山手線車内は大して混んでもいないのに、吊革に掴まって立っている乗客を突き飛ばしながら歩いて来る。

山田はタイミングを計って、サツと身を引きその男との衝突を避けた。

避けたつもりだったが、ワンテンポ置いて身体に衝撃を感じた。

・ ・ ・ えっ、なぜ？ ・ ・ ・

と疑問に思い山田は振り返るが、後ろに立っている乗客はいない。

・ ・ ・ ということは、かなりスペースはあるはずだ。そうか、そうゆうことか……。それなら、こっちにも考えがある・ ・ ・

『おい、あんた……。おい……。』

「えっ？」

『なんだ、寝ているのかと思ったよ。それにしても、まあ、よかったな』

「……………」

『あれ、あんたわかったかい？ 相手は気がついたそうだな』

「……………し、死んだんじゃない」

『あ、えっ、ああ、さっきの話、聞こえたのか……。あれはまったくの別件だ』

『そうか、それでブーツとした顔をしていたのか』

「そうですか……、よかった……」

山田は安堵のため息をついた。

『でもよ、安心するのは早い。訴えるにせよ、示談にせよ、これらが大変なんだ。なにしろあんたは、一方的に加害者なんだからな』

『そうだよ。別にあんたの味方をするわけじゃねえが、どんな無理難題が飛び出すか知れたモンじゃない。相当大変なことだけは覚悟しておいた方がいいよ』

若い方の警察官が気の毒そうな表情で言った。

「……………」

『それだけ喧嘩は高くつくってことだ』

年配の警察官が呟いた。

御仕舞

第四話 化粧をする女編

1

・ おうおう、また始めやがった・

山田の前に座った若い女がバックから鏡を取り出し、しばらく自分の顔に見入ってから、おもむろに化粧を始めた。

・ しかし考えられねえよな。これって恥ずかしいことだと思っただけ、今の若者にはそうじゃねえんだなあ・

女は周りから奇異の視線をまったく気にする様子もない。

しかしこれほどバカにした話があるうか、周りにいる乗客はジャガイモか……。

・ 半枯れとはいえ俺たちも男の端くれだ。ちつとは遠慮ってモンがあるだろう・

『ふん、なによ、ジロジロと。私がなにをしようと勝手でしょ』

・ だいたい一番前の車両が女性専用なんだから、そっちへ乗れ、ってのよ・

『女ばかりの車両なんて、私は嫌いよ。気取った女ばかりで、おもしろくもなんともありやしない』

・ おうおう、不細工な面しやがって、いくら塗りたくったって無駄、無駄。ああ、もったいねえ・

『見ている、見ている。スケベオヤジ共が私を見ている。あゝあ、これが若い男だったらなあ……』

・ このバカ女、スター気取りでやがる。バカだねえ・

『あのオヤジ、いくつぐらいかしら……、ちよつと好みなのよね。』

お金があれば、付き合っただけでもいいわよ』

・ おうおう、チラチラと男の様子を窺っていやがる。どうせ、援助交際の相手でも物色しているんだろが……。なんなら相手をしてやろうか。くくくく……・

『あつ、あのオヤジ、いやらしい。なにを思い出し笑いしてんのよ。あら、好い男。学生みたいね。ちよつと誘惑してみようかしら……。チラッ（流し目）……』

・・なんだよ、この女。気持ち悪いな、席を替えよーつと・・
『あら、行っちゃった。隣のオヤジが臭かったのかしら……。いやーね、中年のオヤジは臭くって。家の親父もそうそう、まったく男って中年になると粗大ゴミね。もっともお金を持っていれば別だけど……。あゝあ、お金持ちの若い男はいないものかしら……。』
・・ほら、バカ女。色目を使うから学生が席を替わったよ。くくくく……、自分が嫌がられているって、わかってねえだろうなあ・・

2

『四十代の半ばまでなら許せるわ。でも、そうね、年収は三千万円以上なきや嫌だわ。私のこの美貌と肉体の対価なんだから、当然よね。ふふふつ……。』

・・おやおや、バカ女がうつとりしている。大方、金持ちの男を捕まえた夢でも見ているんだろう。バカは幸せだよなあ・・

『あのオヤジ、ちつとも私を見ないわね。オカマかしら……。』

・・あゝあ、いつまでやっているんだよ。ああ、イライラする。無理、無理、土台が悪いんだから、いくら壁塗りしても無理。俺なら自殺するよ、まったく・・

『ほら、無理をしないで私を見なさいよ。いいのよ、遠慮しなくつて』

・・ツンとスマして、気取っちゃって……。良い女のもりなんでしょうな、気の毒に・・

『私は女王様ね。ああ、男の視線が快感……。止められないわあゝ』

・・おやおや、鏡で自分の顔を見ながらウツトリしちゃったよ・・
『今日こそ決着をつけなくっちゃ。絶対にあの新入社員をモノにしてやる、冷子なんかには負けないわ。ふん、見てらっしゃい、今日の

歓迎会の後、カラオケに行つて……」

・おつ、なんだ、急におっかない顔をしたぞ。便所へでも行きたくなつたか・

『今日は、数量限定の通信販売で買った勝負下着で決めてきたわ。

数量限定なことから、他の誰のよりも色っぽいはずよ。香水だつてシャネルの五番よ。三万五千円も払つたんだから、絶対に落とさなくっちゃ。うふふふ……、冷子、見てらっしゃい』

・今度は笑つてるよ。大丈夫かいな……、春先は多いってからなあ・

電車は東武野田線の柏駅に滑り込んだ。

・さあゝて、今日も頑張るか。じゃあ、ねえちゃん、また明日……

『あゝあ、みんな乗換えか……。私は鎌ヶ谷まで、なんであんな所に会社があるのよ』

こうして、今朝も男たちと女の心理戦は終了した。

御仕舞

第五話 割り込む女

1

『はい、すみませんねえ……』

座席の僅かな隙間にデッキカイ尻が割り込んできた。

・おいおい、それは無理だろう。おい、ほらっ・

山田一郎は弾き飛ばされるように席を立った。

『あら、すみませんねえ』

・なーにが、すみませんねえ、だよ、無理やりデカイ穴を割り込ませやがって。女もこうなるとどうしようもねえな・

『おい、アンタ』

「わ・た・し？」

という風に、山田は自分の鼻に人差し指を向けた。

『そうだ。アンタは立つことねえよ。おい、ババア、無理やり割り込みやがって。あっちへ行けよ』

『ババア……、なんですってッ！』

・ああ、言っちゃったよ。一番言っちゃいけないことを・

山田はそそくさとその席を離れて、吊り革に掴まった。

『ああ、言ったとも。ババアにババアってゆって、なにが悪いッ！』

『キイイッ！ 言ったわね、このスケベジジイッ！』

『なななな、なんだとー、スケベジジイだあ！』

『スケベで悪けりや、エロジジイだ』

『ここここ、このお』

『ふん、ここここ、って、テメエは鶏か』

『じゃかましいーッ！ テメエこそ、ほんとに女か』

『なんだってえー、こえ見えても立派な女よ。なんなら証拠を見せてやろうかあ』

・・おうおう、すごいことになっているよ。よかった、あそこを離

れて……、触らぬ神に祟りなし。クワバラ、クワバラ・・

『バ、バカヤローッ！　そ、そんなものを見て、どうするんでえ』

『へへっ……、だらしなない男だねえ。おや、そういえばオマエさんは男かい。へへへっ……、なんなら証拠を見せてみな』

女がからかうように言った。

『あんだとおく、おお、見せないでかあ。俺はどうなっても知らねえぞお……。どうだ』

男は立ち上がると、その女の顔の前にむんずとつかみ出した。

隣の若い女性が、キヤーッと叫んで席を離れた。

他の乗客たちも目を剥いている。

・・ああ、あいつ出しちゃったよ・・

『おや、まあー、かわいいオチンチンなこと。オマエさん、よく恥ずかしくなく、そんな粗末なモノを人前に晒すねえ』

と言つて、その女は男のモノを指でピンと弾いた。

『あつ、うつ……。てえなあ、このアマーッ！』

『けけけっ……、アタシは尼じゃねえよあ』

見知らぬ振りをしていた乗客から苦笑がもれる。

2

……と、

『誰だ、今笑った奴は誰だッ！』

男の視線が一人の男を捕らえた。

『オマエだな。今笑ったのはお前だな。否、絶対にオマエだ』

男は、女の元から逃れるように、そちらに詰め寄って行く。

『い、いえ、ぼ、ぼくは、なにも……』

『否、確かにオマエだ』

どうやら逃げ出す切欠ができたようだ。

可哀想なのはその言いがかりをつけられた男の方だ。

なにもその男だけが笑ったわけではない。

一番弱そうな男に目をつけたのだ。

『うつ、や、止めてください』

襟首を掴まれた気の弱そうな男が後ずさりをして、山田にぶつかった。

・・・や、やばい……

『おつ、アンタ、さっきの……、元はと言えばオメエさんが原因だあ。やい、こらッ!』

「な、なななな、なんですか？」

『なんですか、じゃねえや。オメエがしっかりしてりや、俺はこんな恥をかかなくてすんだものを……』

男は気の弱そうな男の襟首から手を離すと、今度は山田に掴みかかってきた。

「そ、そんな、無体な」

と言つて、山田がサツと体をかわすと、男はタッタタとタタラを踏んで座っている女性に抱きつく格好になった。

『キヤーッ! ビターン!』

女性の叫び声と同時に、男の頬に平手が飛んだ。

『イテエーッ! な、なにしゃがんでえ、このアマーッ!』

男は血相を変えて、そのビンタをくれた女性に掴みかかるとする。

山田は咄嗟にその男の足を払っていたが、そのことには誰も気がつかなかった。

『ドッターン!』

男はもんどり打って床にひっくり返った。

山田が顔を覗き込むと、息をしているので安心した。

どうやら気絶したようだ。

『けっけけけ……、だらしない男だねえ』

山田が視線を向けると、割り込み女は軽くウインクを返した。

・・・見抜かれたかな・・・

御仕舞

第六話 訳もなく笑う男と女

1

「アハハハ……」

「ウフフフ……」

山田は顔を上げて二人の男女を見上げた。

午後六時十分発の常磐線、前から二両目に乗ることにしている。
と言っても、別に理由はない。

強いて言えば少し乗客が少なめか……。

「今日は、どうも、アハハハッ……」

「ウフフフ……、いいえ、こっちこそ、ウフフフッ……」

「久しぶりに、アハハハ……、会えて、アハハハ……、楽しかった。
アハハハッ……」

「そういえば、さあ……、ウフフフッ……」

「アハハハ……、なあゝに？ アハハハッ……」

「なあゝに、って、だつてさあゝ、ウフフフッ……」

「ええいいッ！ イライラするな。なにがそんなに可笑しいんだ。
なにが言いたいんだ。話すなら話せ。笑うなら、笑えッ！ ……」

「ウフフフッ……、うんでさあ……」

「……だから、なんナンだよ？ ……」

山田一郎は定年間際のサラリーマンだが、疲れていても余程のこと
がない限り電車で座ることはない。

それが彼なりの矜持だった。

しかし最近、他人と争って席を奪ったり、或いは空いているから
といって優先席にまで座ることはしないが、帰宅時に空席があれば
座ることが多くなっている。

やはり、これも年齢の所為か……。

「アッハハハ……、そうそう、スズキ、スズキは知っているよね？

アハハハッ……」

「ウフフフ……、あのスズキ君でしょう。フフフフッ……」

「うん、アハハハッ……、そう、あのスズキ。アハハハ……」

「……どこのスズキだよ。スズキがどうしたってんだ……」

「スズキ君がどうしたの？ ウフフフッ……」

「あいつがさあ……。アッハハハ……、ああ、可笑しい。ハハハッ……」

「……ええい、イライラする。スズキがどうしたんだよ？ ……」

山田は想わず声を出しそうになった。

或いは、「え」ぐらいは、出していたかもしれない。

その証拠に二人が同時に山田の方を振り返った。

二人は山田が座っている座席の対角線上に位置するドアに並んで立っている。

「……あつ、ヤバイ……」

山田は目を伏せた。

争いを好まないと言うよりも、近づかない、或いは避けて通るのが山田流の処世術だ。

2

しばらくの沈黙……。そして再び、

「スズキがさあ……、アッハハハッ……」

「うん、フフフフ……、スズキ君が、またあれでしょう。ウフフフッ……」

「アハハハ……、そう、あれよ、あれ」

「……ええい、イライラする。あれってなんだよ？ ……」

「また、あれなの……、困ったものねえ。フフフッ……」

「そう、あいつ、バツカじゃねえかと思うわけよ。オレテキにはさあ……。アッハハハ……」

「……オレテキには？ なんだ、それ？ そんな日本語あるかよ……」

「ウフフフッ……、ワタシテキにもそう思うわあ……」

・おいおい、こんどはワタシテキときたか。ああ、世も末、もう日本語も終わりだな。美しい日本語よ、どこへ行った？　それで、スズキはどうしたんだよ？　ええい、じれったいなあゝ・

「うん、鈴木君が礼によって、また買ったらしいよ。アッハハハ……」

「ウッフフツ…、ほんとうにバカね、いつもながら。ウッフフ……」

「だろう、だろう。君もそう思うだろう」

・思わねえよ。だからスズキがなにを買ったんだよ？　・

「ウッフフ…、ほんとうに懲りない人なのね。でも、スズキ君って可愛い……」

「えっ、君はああゆうのが趣味なの」

急に男の方がマジになった。

「あ、えっ、ウッフフフ……。まっさかあー、冗談も休み休み言うてよね」

「だろう、だろう。アッハハハ……。まっさかあゝ、ねえ」

・どうやら男はこの女に惚れているようだ。しかし、まだ深い関係ではないな。女、……気をつけろよ。まあ、どうでもいいことだが……・

と山田は勝手に推理した。

「ウッフフ……、この前は万能包丁と安眠枕。その前がステンレス製のお鍋セットでしょう。それに高い木の枝を下ろすノコギリと脚立……。ウッフフツ……」

「よく覚えているね？」

男の顔が再びマジになった。

二人が付き合っているのではないかと疑っているようだ。

「ウッフフ……、でも彼はアパート住まいでしょう。そんなノコギリとか買って、なんに使うつもりなのかしら……？」

「死体でも切断するんじゃないの。アッハハハツ……」

女が白けた。

・・だから、おまえさんはもてないの。そんな冗談、笑えますか。バァーカ……」

山田はなんとなく溜飲が下がった気がした。

女は山田好みの顔だった。

3

鈍い男も気が付いたようで、話題を変えてきた。

「あのさあ、この間、同窓会があつて」

「えっ、私、知らない」

女もこの男に惚れている、と山田は推測した。

「あ、いや、ほら、僕が転校して来る前にいた小学校だよ。アッハハハ……」

「なあ、だ、そうなのお。ウッフッフ……、で、楽しかった？」

「あつ、うん、マアマアってとこかな。アッハハハ……」

男は楽しかったと言いかけて、慌ててマアマア、と言い換えた。

「初恋、の人、いた？」

「あえっ、は、初恋……、そんなのいないよ。アハハハ……」

「ほんとう？」

女が疑いの目を向ける。

「ほ、ほんとうだよ。俺、奥手の方だったから……。ヘヘッ……」

・・おいおい、駆け引きはもういいから、好きなら好きって煎つちやえよ・・

「あのさあ、ヤマダ君、好きな女、っているの？」

・・ヤマダ、俺のことか？ うん、もちろんいるよ。そんなわけ、ねえか・・

「えっ、え、え、ええ……、アッハハハ……、好きな女？ ……うん、いる」

「えっ、いるの……」

「あつ、つまり、だから。エッへへへ……」

・ええい、鈍い女じゃ。おまえのことだよ、おまえの……・

「……ヒロミ」

・おつ、ついに言ったか。それでこそ男じゃ。愛の告白、俺が証人じゃ・

山田は思わずニヤリと笑っていた。と、

「ヒロミのことが好きなの？」

「うん、結婚前提で付き合っているんだ」

男があっけらかんと言いつつ切った。

・なにッ！ この女じゃねえのか……・

人生経験の豊富な流石の山田も読み違えていた。

「そうなんだ……」

「アッハハハ……、結婚式に招待するから絶対来てね。会費制だけど。アッハハハ……」

「……」

・バァゝカ。糞して寝ろ・

山田は心で耳を塞いでいた。

御仕舞

第七話 足を組む男

1

「ギヤーツ！ なにすんだ、この糞オヤジッ！」

『ジャカマシー！ デカイ態度で座ってンじゃねえー！』

山田一郎は座席に踏ん反り返り、足を投げ出して座っている男の足の甲を思いつ切り踏んづけていた。

「なんだとこのヤロー！ わざと踏んづけやがったなあー！」

『そうだ、文句あつか。とつとと、小ぎたねえ足、引つ込めろ！ バカヤローが』

と啖呵のひとつも切りたいところだったが、山田はジッと我慢していた。

・・寝ていて気がつかないんだな。次の上野駅なら人が沢山乗ってくる。そうなれば足を引つ込めるだろう・・と期待を持って我慢していた。

乗り込んで来る乗客に押されて、山田の新品のズボンが男のスニーカーに触れた。

青山で買ったばかりの春物の背広だった。

グリグリとズボンがスニーカーに当たっても、男は足を引つ込めず寝た振りをしている。

山田の新品のズボンが埃で白く汚れた。

『す、すいません。足を、足を引つ込めてくれませんか』

「……………」

男の反応はない。

相変わらず目を瞑ったままだ。

・・これだけ当たっているのだ。気がつかないはずはない・・
『すみません！』

山田はもう一度、今度は少し声を荒げて言った。

すると男がジロツと一瞥をくれ、再び目を閉じた。
・こ、このやろう……、舐めやがって……。よし、そっちがその気なら、オジサンを怒らしたらどれだけ怖いかわ教えてやろう・
・普段の山田は争い事には近づかない平和主義者、と言えば聞こえはいいが、なぐに、ただの小心者だ・
そんな男が一旦切れるとヤバイ。

2

「イテエー！ な、なにすんだ、この糞ジジイッ！」
その男が足を抱えて立ち上がった。

『なんだとー、黙って聞いてりゃ、糞オヤジだ、糞ジジイだと。こ、この糞ガキヤー！』

「な、なんだと、テメエは黙って聞いてねえじゃねえか」

周りの乗客から、クスクスクスと笑い声が漏れた。

「なっ、なにがおかしい！ テ、テメエ、笑ったな」

男が周りに当り散らす。

立ち上がって詰め寄ろうとすると、目標にされた男の顔が引き攣った。

『やい、こら。糞ガキ、相手はこっちだろう』

・ああ、余計なことを言ってしまった。ま、拙いな……・
「なにー」

『あ、うつ、ゲホツゲホツゲホツ……、グ、グルジイ……』

男が山田の胸倉を右手で掴んで、左手の拳を振り上げた。

「こ、このヤロー」

まさに拳が振り下ろされようとした瞬間、

「止めたまえッ！ 警察だ」

「あ、へっ……」

男は、そのひと言で振り上げた拳のやり場に困り、拳を見詰めている。

「止めなさい。現行犯で逮捕するよ」

すると、山田の周りにいた四、五人の男がサツと散った。

「や、山崎……」

後ろの方から咎めるように名前が呼ばれた。

「チエツ！ もう少して逮捕できたのに……」

「ったく、バカが……。三ヶ月の張り込みがパーじゃねえか」

山田はその場からコソコソと離れ、人込みに紛れ込んだ。すると、

「ふう……」

と、隣の男が溜息を吐いたので、そちらに目を転じると、さっき山田が足を踏んづけてやった男の顔がそこにあつた。

山田は男に気づかれないように、その場を離れた。

――君子危うきに近寄らず。三十六計逃げるに如かず。

・・・やべえ……

と呟いて、山田は次の駅で降りた。

それは長いサラリーマン人生を通じて得た知恵だった。

御仕舞

第八話 躰の出来ない母親（オヤ〜？）

1

『イテッ……』

「……………」

・ ・ あれ、聞こえなかったのかな……？ ・ ・
と、山田一郎は首を捻り、

『あつ、イタイッ！』

今度はさつきより大きな声をあげた。……が、

「……………」

再び無視。

・ ・ ああ、やつぱり。この女、わかつていながら無視しているんだ。
テメエのガキの面倒ぐらいしっかりしろよ。ガキの靴が俺のスポン
に触れているだろうがッ！ ・ ・

と、怒鳴りたいのを山田は必死に堪えて、

『お嬢ちゃん、ダメですよ。ほら、お嬢ちゃんの靴が小父さんのズ
ボンに触れているでしょう……』

ズボンを指差しながら、優しく諭すように言った。

しかも笑顔までサービスして……、ああ、それなのに……、
「？」

と怪訝な表情で山田の指先を見詰め、母親の顔を覗き込む。そして、
「……………」

親子揃って無視。

・ ・ なんだ、なんだ、なんなんだよ、こいつらは……。親子揃って
無視かよ・ ・

『あのー、すみません。お宅のお子さんの靴、なんとかしていただ
けませんか？』

山田は堪りかねて母親に直接苦情を言った。

争いを好まない、否、争いは避けて通る山田にしては珍しいことだ。
・・シマツタ……・・

これから起こる、であろう我が身の不幸に想いを馳せ、山田は猛烈に後悔を感じていた。

できるものなら逃げ出したい。

・・しかし待て、ここで弱みを見せるな・・

山田は自らを叱咤激励する。

・・なにせ相手は百戦錬磨の若きアバズレと、そのアバズレに鍛え抜かれた小生意気な娘だ。一旦弱みを見せたら負けだ・・

と言い聞かせても、心臓がドクン、ドクンと早鐘を打ち、口から飛び出しそうだ。

山田は歌舞伎役者の隈取りのような厚化粧顔を見ながら、その耳まで裂けた恐ろしい口から発せられる言葉をひたすら待った。

ほんの数秒のはずが、それはとてつもなく長い時間に感じられていた。

……と、

「麗ちゃん、お止めなさい。隣の怖いオジサンに叱られますよ」

その女は山田に視線を合わせることもなく、正面を見据えたまま機械的に言う。

するとガキ、否、レイお嬢様が山田に軽蔑の視線を投げかけ、

「……………」

三度無視、同じ姿勢で足をバタバタさせている。

母親も一度注意しただけで、もう役目は済んだとばかり、それ以上は言及しない。

・・むっ、むむむむ……、こ、このヤロー、下手に出れば付け上がりやがって・・

山田の怒りは頂点に達し、お嬢様、否、ガキの足を左手で強く払った。

すると、そのガキは一瞬驚きの表情を山田に向け、次に母親の顔に目を移すと、

「ウンギャーッ！ ギャーッ！ イダーイッ！ ギャワワワワッ
！」
と叫び泣き出した。

2

「あへっ！？」

「あ、あなた、わ、私の娘に、なにをするんですかぁーッ！」
隈取りの厚化粧女が、目を吊り上げコメカミに青筋を立てて怒鳴った。

「あつ、えっ、わ、私は、ただ……」

正に鬼の形相、山田の心が縮みあがる。

「ただ、なんナンですかッ！」

女が嵩にかかって攻める。

・シマッタ……、これで俺のサラリーマン人生も終わりだ・
山田一郎は定年間際の窓際族、社内に彼を庇ってくれる者は誰もいない。

“株式会社。。。の窓際社員山田一郎、電車内で女の子に暴力を振るう。変質者が……”

翌日の朝刊の見出しが目に浮かび、会社の同僚や家族の罵声が聞こえてくる。

「あ、あなた、今、私の大切な麗ちゃんに、ぼ、暴力を振いましたね」

「ぼ、暴力、だなんて……、わ、私はただ……」

「いいえ、確かに、私はこの目で見ました」

「わ、私はただ、この足が、こうだから……、こうしただけで……」
山田はズボンの汚れを指差し、軽く足を払う真似をした。

「ほら、また暴力。みなさん、この方が私の可愛い娘に二度も暴力を振いました。どなたか、警察を呼んでください」

周りの乗客の目が山田に集中する。

「け、警察、だなんて……」

・あ、あ、なにもかも終わった・

退職金と書かれた白い封筒に羽が生え、東の空に飛んで行く。

「さ、警察に行きましょう」

山田の弱気を見越した厚化粧女が、嵩にかかって責め立てる。

娘も一緒に、正義は我にありとばかりに睨みつけている。

「娘に土下座しなさい。床に手をつけて、娘に謝りなさい。そうすれば許してあげます。ねえ、麗ちゃん？」

「うん」

偉そうに娘が頷く。

山田絶体絶命のピンチ……。

・な、なんで俺は、いつもこんな目に遭うんだ。俺がいつたいなにをした。俺はただ、当然のこととして、降りかかった火の粉を振り払っただけなのに……、そうだ、なんで俺がこんな連中に謝らなければならぬんだ。悪いのはこいつらじゃないか。警察でもどこへでも行ってやろうじゃないか・

山田は開き直った。

「警察だなんて、大げさ過ぎます。私はただ、貴方の娘さんの靴が私のズボンに触れていたので、注意しただけです。見てください、まだ汚れがついています」

再びズボンの汚れを指差し訴えた。

「私、知らない。麗ちゃん、そんなことしないもん」

「ほら、娘は知らないと言ってます。どうせ、最初から汚れていたんでしょう」

「な、なんだ。じゃあ、俺が嘘を言っていると言っのか。なんで、俺がそんな嘘をつかなきゃいけないんだ」

「さあ、それはご自身の胸にお聞きなさい」

厚化粧女は皮肉な笑みを方頬に浮かべ、口を曲げて言った。

そう、彼の国の総理大臣のような……。

「さあ、謝るんですか、謝らないんですか。謝らないのなら警察へ

行きましょう」

厚化粧が迫ってくる。と、

「いい加減にしろ、バカ親子。うるさくって、眠れねえじゃねえか」
前に座って目を瞑っていた職人風の男が、堪り兼ねたように口を開いた。

助け舟……、山田は少しホツとした。

「バ、バカ親子、ですってえーッ！ なんナンですかあなたは、この男の仲間ですか？」

「仲間あゝ……、そんなモンじゃねえよ。俺にはどうでもいいことだが、なにせあんた、ギャアギャアとうるさくって、寝てらんねえ。いい加減にしろよ、ったく……」

男がジロリと厚化粧女に一瞥をくれると、

「……………」

その目が恐ろしかったのか、女は反論をしなかった。

「俺はさっきから見ていたけど、確かにあんたの娘さんの靴が、その男のズボンに触れていたよ。俺はよく我慢していると、感心して見ていた。俺なら、娘っ子とあんたの頭を引っ叩いているぜ。ククク……………」

「……………」

その男の言葉を厚化粧女と娘は、二人とも目を伏せて聞いている。

「どうだ、もうなしにしたら？ あんたはどうだ？」

山田に向かって、男が言葉を投げかけた。

「は、はい。私は、もう……………」

「ほい、そうかそうか。で、あんなの方はどうなんだ？ ああ、聞こえねえよ」

「……………はい」

「おう、そうかそうか、わかってくれたか。じゃあ、もう騒がねえでくれよ。俺は眠いんだからよお。なあ、お襄ちゃんも周りの迷惑にならねえように、ちゃんと前を向いて座らなきゃダメだよ。いいね、わかったね」

厚化粧女の娘がコクリと頷いた。

「クククク……、よく見りや、二人とも、可愛いらしい顔をしているじゃねえか。なあ、目を吊り上げていちゃ損だよ。クククク……」

厚化粧女とその娘が微笑みを浮かべた。

・・助かった。……なるほど、確かに冷静に見ると、二人とも可愛い顔をしている。それにしてもこの男、身形は良くないが大物だ・・山田は男に軽く会釈した。と、

「おい、おっさん。一杯奢れよ。クククク……」

御仕舞

第九話 バカ犬とバカ飼い主

1

『あッ!』

散歩中の山田一郎と愛犬の直太郎に二匹の大きな犬が迫って来る。狩猟犬、ポインターだ。

山田の背筋に冷たい汗が伝った。

獲物を追い詰めるように、二匹の猟犬はジリッジリッと迫って来る。直太郎は逃げるどころか、低く身構え牙を剥いている。

身体は小さいが、いざとなると中々の根性を見せる。

しかし多勢に無勢、身体も直太郎の二倍近くある。

そんな二匹が迫って来る。

なにか得物があればいいのだが、田園の中の畦道、辺りを見回してもなにもない。

山田は咄嗟に少し大き目の石ころを数個拾った。

飛び掛ってきたら叩きつけるつもりだ。

山田は二匹の犬から視線を外さず、屈み込んで首輪の繋ぎに手を掛けた。

『直ッ! 引き綱を解くぞ。敵わなかったら逃げる』

『こらッ! おまえらなに遣っているんだあ。行けッ!』

二匹の犬はビクツと振り返ると、頭を垂れ直太郎から視線を外した。手に引き綱を持っているところを見ると飼い主らしい。

・・まったく、なにを遣っているんだか。こんなと所で放すのはルール違反だろう・・

「おう、悪いな。動かないでくれよ」

・・なにを偉そうに、とつとと失せる・・

「ほれ、行くぞ」

男が二匹に命ずると、山田たちから離れて行く。

丁字路を折れてアホ面した二匹の犬と偉そうな猿面男が姿を消した。
『ふうう、行ったか。なゝあ、直太郎。まったく頭にくるなあ……。』
しかしおまえ、結構遣るねえ。』

と声をかけると、直太郎は山田の顔を見上げた。

柴犬の純潔種だ、小型犬だが気は強い。

いつだかも図体のデカイ雑種を一唸りで撃退したことがある。

『さあゝて、行こうか。散歩の邪魔をされたけど、まさか戻っては来ないだろう』

直太郎はなにこともなかったように、あつちでクンクン、オシッコをシー、こつちでクンクン、オシッコをシーといったもののペースで歩き出した。と、

「ウー、ウウウ……」

前方を睨み低く唸る。

2

へグルグルグル……」

と唸り声が聞こえ、やがてさっきのアホ面二匹が姿を現した。

『糞ッ、また戻ってきやがった……。』

流石の大人しい山田も怒りが込み上げてくる。

一度は捨てた小石をもう一度拾い握り締めた。

「ガウーッ！」

黒毛アホ面犬が直太郎に突っかって来る。

牙を剥いて応戦する直太郎、一歩手前で黒毛アホ面犬が止まった。

二匹は低く身構え、牙を剥き合いガチツと相対する。

しばらく睨みあう。

と、その均衡を破るように、もう一匹の薄茶マヌケ面犬が脇から直太郎に襲いかかるうとした。

山田は薄茶マヌケ面犬目掛けて、持っていた小石を叩き付けた。

へキャン、キャン、キャン、グルルル……」

ドスツと鈍い音を発して、肩の辺りに小石が当たった。
すると薄茶マヌケ面犬が山田を睨む。

山田は恐怖から持つている小石を薄茶と黒毛に次々に投げつけた。
そして、犬の目を睨みながら手探りで小石を拾う。

『石を投げるなッ!』

と怒鳴りながら偉そうな猿面男が戻って来た。

「なにを言つてやがる。動くな、つて言つたからジツとしていたのに、また戻つてきやがつて。躰もできないような犬を放すんじゃない。早くなんとかしろッ! とつとと繋げ」

バカヤローという言葉は飲み込んで、山田は怒鳴りつけていた。

・・ヤバイ・・

怒鳴つてしまつて後悔したが、一度口から出た言葉はもう取り返しがつかない。

争い事を避けて通るのがいつもの山田だ。

“犬の飼い主同士が争い、一人は死亡、もう一人は重症の大怪我。なんとも大人気ないことである”、との翌日の朝刊の見出しが脳裏に浮かんた。

相手がどう出るか、足がガタガタと震えていた。

ジロツと睨みを聞かせて、猿面男は山田から視線を逸らすと、

「ほれ、行くぞ」

と言つて、黒毛をピシヤリと引き綱で叩いた。

「キャン!」

と吼えて男の後を追う。

もう一匹も頭を下げて左右に揺すりながら、山田と直太郎から遠ざかつて行く。

『ふーう、……よかった』

まだ足がガクガク震えている。

山田は、ウン!と気合を入れて、自ら両手で頬を張った。

・それにしてもあんな犬に手綱もつけず、もしなにかあったらどうするつもりだ。最近ああいった無責任な飼い主が多い。他人から見たらどんな犬でも怖いものだ。況してや、猟犬を放し飼いにするなんて……。まったく無責任にも程がある・

『なあゝ、直太郎？』

山田の顔を怪訝な表情で見上げ、クウーンと甘えた声をあげた。

・あゝあ、すっかり白けちゃったな。戻ろうか・

しかし直太郎はお構いなし、ズンズント引き綱を引っ張る。

『こらこら、ゆっくり歩け。そんなに引っ張るなよ。わかった、わかった、行くよ』

要望に応えていつもの道程を辿ることにした。

田園地帯を一周する、ほぼ一時間の散歩コースだ。

道すから、直太郎は色々なモノに興味を示しては、匂い（どちらかというと“臭い”か）を嗅ぎ、オシッコをかける。

そして時々草を食むのは、胸焼けの所為か、便通を良くするためか……。

山田と直太郎が有料道路の下を潜り、左に折れた。と、

『うッ！』

さっきの猿面男が、黒毛のアホ面犬と薄茶のマヌケ面犬の手綱を持つて立っていた。

山田の心臓が早鐘を打つ。

・な、なんだ。怒鳴ったのを根に持って、喧嘩をしに来たのか？・

足がまたガタガタと震え出した。

しかし弱みを見せるわけにはいかない、山田は眉根を寄せて猿面男を睨みつける。

そして両足を踏ん張って気合を入れた。

『な、なんですか？ なにか、用ですか？』

言葉尻が少し震えた。

“昨日、散歩中に愛犬家同士が喧嘩、双方重症を負い入院……。なんと大人気のない話だ……”、との翌朝の新聞見出しが脳裏に躍った。

「おう、さっきは悪かったな。俺はあの切通しの上に住んでいる。×ってモンだ。あんたも近くのモンだろう。勘弁してくれや」

と言つて、猿面男が頭を下げた。

「このヤロー、静かにしねえかッ！」

と、唸つて敵意を見せる二匹の犬を引き綱で、ピシヤリ、ピシヤリと叩いた。

『あつ、えつ……、どうも、こつちこそ……』

意外な展開に山田はドギマギして応えた。

「じゃゝな。ほれ、行くぞ」

猿面の飼い主は、黒毛のアホ面犬と薄茶のマヌケ面犬の尻を交互に蹴飛ばしながら去つて行つた。

・・なんだ、悪いオヤジでもねえな・・

『うッ！ 眩しい』

真つ赤な太陽が顔を出し、東の空に朝焼けが広がつた。

モヤモヤしていた山田の心もパァッと晴れた。

『さあ、直太郎、行くぞッ！』

〔ワン！〕

御仕舞

第十話 携帯電話を見ながら歩く輩

1

或る日の帰宅時、JR常磐線の柏駅……。

『あつ、いつ、とつとと……』

前を歩いている男が急に立ち止まる。

しかし、急ブレーキも間に合わず男の背中にトンとぶつかった。

山田一郎はむつととして、

『きつ、……』

気をつけろと声を発するよりも早く、男が、

「いてえな」

振り返って山田を睨みつけた。

『きつ、……ごめんなさい』

男の迫力のある目付きに山田はたじろぎ、文句を言いかけたが、情けないことに口から出た言葉は、ごめんなさいのひと言……。

すぐごとその場を離れようとする、

「ちよつと待てよ。……おい、待てよ。オヤジ！」

・・ああ、やばい。聞こえない振りして行っちゃおう・・

「おいこら、トボケてんじゃねえよ」

追いかけて来た男が山田の肩に手を掛けた。

『うツ！』

と声を発して、山田は立ち止まった。

「うい、こらあーッ！ 舐めてンじゃねえぞ」

威嚇する男と向き合った山田の足は、傍から見てもガクガクと震えているのがわかった。

それで更に付け上がった男がニヤリと笑って、

「ちよつと顔貸せ」

と凄んだ。

頼りなげな山田の態度に、金を巻き上げられるとでも思ったのだらう。

『は、はい。な、なんでしょう？』

いつもなら土下座をしても争いごとから逃れようとするが、その日の山田は冷静だった。

「なんでしょう、じゃねえよ」

『それでは、どんなご用件でございましょう？』

山田の足の震えが止まっていることに男は気付いていない。

男がいきなり山田の襟首を掴んだ。

『あつ、止めてください。お金ですね、お金ならあげますから、殴らないでください』

と言って財布を出しながら、殊更大きな声で山田は訴えるに言い放った。

いきなり財布を突きつけられた男が戸惑っている。

まさか、これだけの大衆の面前で財布を受け取るわけにはいかない。

「な、なに、言ってるんだ……」

と辺りを窺いながら、差し出された山田の財布に手を伸ばした。

「そ、そうか、慰謝料だ」

と言って、財布の中から一万円札を抜き出した。

その時、山田は男の肩越しに視線をやりながら、如何にも後ろの警察官に訴えるように、

『お巡りさん、お金を取られました。こ、この男です』

と男の腕を掴んで叫んだ。

一斉に周りの乗客の目が二人に集中した。

「な、なにッ！」

慌てて財布と現金を投げ返すと、男は脱兎の如く駆け出した。

2

或る日の早朝、JR常磐線の日暮里駅……。

窓際サラリーマンの山田一郎が、混雑する車内から吐き出されるように飛び出した。

山田は混雑する電車内でのトラブルが嫌で、いつもは六時半に日暮里駅に到着する。

しかしこの日は一時間ほど遅くれて、七時五分に柏から乗り込んだ。
エクスプレス
筑波EXの開通で以前より空いたとはいいいながら、七時台はラッシュのピークの時間帯だ。

揉まれに揉まれて七時半に日暮里駅へ到着した。

久しぶりのことで身体がバラバラ、

・ふゝう、参った、参った。この時間帯はこんなに混むのか。明日は遅刻しないようにしなくっちゃ……。毎日こんなじゃ身が持たないよ・・

『おい、早く歩けよ』

向かいの三番線ホームに山手線が滑り込んで来るのが見えた。ということは、

・間もなく四番線に京浜東北線が来るはずだ。急げば間に合う・
会社の始業には十分間に合うのだが、いつもより一時間遅れで山田は気が焦っていた。

それで前を俯きながら歩く女性に、

『おい、早く歩けよ』

と強い口調で言っていた。

どうやら携帯電話を見ながら歩いているようだ。

最近、辺りを気にせず夢中になっている携帯オタクが老若男女を問わず多い。

こういった携帯オタクはぶつかりそうになっても、縦しんば（よしんば）ぶつかっても、詫びのひと言も言えない。

山田は詫びを言わない中国人をもじって、こういった輩に日中人と名付けている。
ニッチュウ

<そうではない中国の皆様、ごめんなさい>
いきなり女が立ち止まった。

『うつ、とつととと……』

サツと身をかわしたが、鞆が軽く女の身体に触れた。

「な、なにをするのよ。私を突き落とす気ですか」

『あつ、いえ、ご、ごめんなさい』

山田は詫びを言つてその場を立ち去ろうとした。が、

「逃げるのですか、この痴漢男ッ！」

と、女が罵声を浴びせた。

『うつ……』

焦る気持ちからつい口を突いて出た言葉なのに、きつい反撃に山田は返す言葉を失う。

・・や、やばい・・

険のある目付き、どうやら虎の尾を踏んでしまったようだ。

『あつ、ごめんなさい』

と山田がその場を離れようとする、

「待ちなさい、ってば。この人、私を突き落とそうとしました。誰か、駅員の方を呼んでください」

大声で女が叫んだ。

『ちよ、ちよつと待ってください。突き落とす、なんて……私は、なにも……』

ドギマギとする山田の額に汗が滲む。

しかしそんな二人の遣り取りにも、朝のラッシュ時の乗客は誰も興味を示さない。

チラツと一瞥をくれて通り過ぎて行く。

やがて土浦行きの上り常磐線が、二人が相對するホームに滑り込んで来た。

この時間帯の上り列車はガラガラだ。

それでも二人を邪魔だとばかりに、突き飛ばすようにして乗り込む乗客がいる。

「な、なにをするんですか」

「やかましいーッ！ 邪魔だ、そんなとこにポケットと突っ立ちや

がつて、このヒステリーババアッ！」

「なっ、なんですってえーッ！」

・・チャンス・・

山田はスツとその場を離れ、他の乗客に紛れ込んでいた。

「あっ、痴漢が……」

・・おお、危ねえ、危ねえ・・

と囁きながら、山田は後ろも振り返らず階段を駆け上がった。

上から見下ろすと、女がキョロキョロしながら階段を上がつて来る。

・・おっと、やばい、やばす。見つかったかな？・・

急いで三、四番線ホームの後方へと走る。

運良く京浜東北線の大崎行きが滑り込んで来た。

・・早く、早く・・

今にも女が階段を駆け下りて来るかと山田の気が焦る。

電車が停止してドアが開いたので、山田は飛び乗って奥へと進む。

・・早く、ドアを閉める。早く、走り出せ・・

山田は祈る。と、

・・やばい、女が階段を下りて来た。早く、早く、早く発車しろー

ッ！・・

心の中で叫んでいた。

女の目線が山田を探しているのがわかる。

・・あッ！ 見つかる・・

思わず目を瞑っていた。

と、三番線には山手線が滑り込んで来た。

女の目が京浜東北線の車内から山手線へと移動した。

その瞬間、ドアがガガッと音を立てて半分ほど閉まり、ドンと音

を発してまた開く、

『あっ、うっ……』

女と目が合った。

・・やっ、やばい・・

山田が凍りついたとき、ドアがトンと閉じた。

・俺はそんなに悪いことをしたのだろうか……。それにしても良かった。俺はこの時間帯の電車乗ることはまずない・
それで山田は、もう一度大きく溜息をついた。

御仕舞

第十一話 外を見ていない運転手

1

山田一郎は窓際サラリーマン……。

今日も定時（五時十五分）に会社を出て、東京から一時間半を要する東武野田線の七光台駅で下車した。

この辺りまで来ると気温は、都心と比べて二度は違う。

・・・寒い・・・

思わず首を竦めた。

歩いて十分、実は走って十分の自慢の一戸建て住宅に向かっている。結婚が遅く、家を買ったのも三十五歳のときだったので、三十年口ーンはまだ七年も残っている。

今年の一月で五十八歳になった。

隣の不倫馬鹿カップルに腹を立てながらも、退職するわけにはいかないのだ。

・・・ほれほれ、三十を過ぎた女が甘ったれた鼻声を出すンじゃねえよ。なあゝにが、ハマサキさあゝんだよ。おうおう、相手のチンパンジー面がカズミちゃゝん、これ美味しいよ、食べるうゝ、だって……、ああ、気持ち悪い・・・

時刻は七時ジャスト、駅はまだ空いている。

駅前のパン屋“ルミエール”で大好きな焼き立てのブドウパンを一斤購入した。

・・・やった、やった。よし、今晩は飯の代わりにパンだ・・・

いつもこの時間では買えないが、今日は運良く買うことができた。

それだけで小市民、山田は嬉しかった。

駅前の信号は押しボタンを押してもしばらく待たされる。

それをいつも不満に思っているが、待望のブドウパンを久しぶりに買うことができたのでそれもあまり苦にはならなかった。

駅から走って十分の家へと急ぐ。

道は昔の農道でとても狭く、車が擦れ違うのはちょっと難しい。どちらかの車両が縁石に乗り上げて待つ。

少し大きめのトラックなどが来ると、歩行者は脇に寄って怖い思いをしながら遣り過すことになる。

一台の軽自動車が山田の進行方向から迫って来る。

もう辺りは暗いのでライトを点けている。

ヘッドライトが道路の凹凸の所為で上下に揺れると、強い光が時々山田の目を射た。

真っ直ぐに進んで来る。

軽自動車なので楽に擦れ違えるはずと判断し、山田はそのまま歩を進めた。

心持車が山田の方に寄って来る気がする。

・一本道だ。俺が居るのはわかるだろう・

右手に皮の鞆、左手に買ったばかりのブドウパンを下げ、安心して歩いて山田は進む。

2

『えっ、えっ、えっ……』

近づいて来る運転手の顔が良く見える。

『な、なんだ、なんだ？』

しかし、その男はこちらを見ていない。

『おい、バ、バ、バカ、こっ、こっちを見る』

と叫んでも聞こえるはずもない。

『あッ！ ああああ、あーッ！』

山田は咄嗟に危険を感じた。

既の所で車を避けたが、その拍子に右足が泥濘にめり込んでいる。

そして、大切な、大切なブドウパンがバックミラーに触れて吹っ飛んでいた。

『バ、バカヤローッ！』

と怒鳴っても、なにごともなかったように車は遠ざかって行く。
一度ブレーキランプを燈したが、思い直したようにその軽自動車は走り去って行った。

ナンバーを読もうとしたその瞬間、ライトがパツと消された。

確信犯だ。

山田は慌てて石ころを掴んで投げつけたが、道路でカチツと虚しく弾けた。

『糞ッ！』

左手に持ったポリ袋は千切れて飛んで、ブドウパンが道路に転がっている。

滑ってひっくり返るのはなんとか踏ん張ったが、泥に突っ込んだ右足の革靴はドロドロに汚れていた。

靴の中にまで泥が侵入している。

・糞ッ！ あの手、前も見ずに肉饅頭なんかを喰らいつきやがって……。危ねえ、危ねえ。まだ轢かれなかっただけ、幸いか。

あゝあ、しかしブドウパン……。あゝあ、この靴……。どうすりゃいいんだよ……

山田は怒りを抑えながら、田町駅前で貰ったサラ金の広告用ティッシュを取り出し、虚しく皮靴のドロを拭いた。

慌てて飛び込んだトイレでのティッシュペーパー、困ったときのティッシュはなにものにも換えがたいものだ。

広告主がサラ金だからと、捨てなくて良かったとつくづく思った。

・この辺りでは見たことのない面だ。誰かわければ家まで押しかけて行くんだが……。糞ッ！ 豚ヤローが……。それにしても醜い豚面だった……

と相手を酷く貶すことで、山田は自らを慰めていた。

・ああ、喰えないだろうなあ……

山田はブドウパンを横目で見て、泥で汚れた靴下を皮靴の中でネチヤネチヤさせながら、家路を急いだ。

御
仕
舞

第十二話 電車を止める行為

1

『あッ！ ほ、ほんとかよ。チェツ、頭にくるな』
と窓際サラリーマン山田一郎は後悔していた。

・せつかく終業と同時に会社を飛び出してきたのに、これじゃ無駄になっちゃう・

たった今、山手線に乗るか京浜東北線に乗るか迷い、少し空いていた京浜東北線をチョイスしたのだ。

<ガガガー、ピー……、ああ、ただ今、上野御徒町間で線路内に人が立入っているとの連絡が入りました。現在、確認作業を進めております。お急ぎのところ、誠に恐縮ではございますが、しばらくお待ちください。尚、新たな情報が入り次第放送いたします。ガガガー、プツン>

「あゝあ、またかよ。まったく頭にくるなあ。最近多くねえ？」

「多い、多い。二、三日前もあつたろう」

「頭の可笑しいのが増えているんだよなあ……」

「そらそうだ。こう不景気じゃ、可笑しくもなるよな」

「俺たちはまだ仕事があるだけマシか」

「違いねえ。はっはは……」

隣に乗り合わせた若い二人組みのサラリーマンが話している。

まだ余裕がある。

「糞ッ！ なにやってんだよ。どうなってるんだよ」

「ほんとだ。状況を説明しろよ、ったく」

しかし五分も過ぎると会話も途切れ度切れになってくる。

・まあ、だけでも困るよな。自殺でもするつもりで線路に入るのかな。それとも嫌がらせかな・

山田はそういった状況に追い込まれた人間の苦悩を想像していた。

・明日は我が身、明日は我が身……・
と呟きながら。と、
＜ピー、カタカタ……、ええ、ただ今入りました情報によります
と……、プツン＞
「あれ、どうしたんだよ」
「だいぶ混乱しているみたいだな。なあ、あっちへ乗り換えようぜ」
「山手線も同じじゃねえの……」
構内放送があり二番線に山手線が入って来た。
京浜東北線に乗っていた乗客の多くがそちらへ移動を開始する。と、
＜ガタガタ、ピー、ただ今入りました情報によりますと、まだ線
路内に立入ったお客様の安全が確認できておりません。お急ぎのお
客様は隣の山手線をご利用ください。ええ、ただ今……＞
車内放送は、乗客を急き立てるように何度も同じ内容を繰り返す。

2

ほとんどの乗客が慌てて移動する。
・・までまで、ただ線路内に立入っているだけだ。もう直ぐ動き出
すはずだ・・
山田は空いた席に座って待つことにした。
「どうせ急ぐ旅でもなし……、座って行こうぜ」
同じような考えの乗客も少しはいる。
「俺は大宮だ。少しばかり先へ行ってもしょうがねえよ」
と、開き直っている乗客もいる。
＜カタツ、ピー、ただ今入った情報によりますと、上野御徒町間
で線路内に立入っていた人の安全が確保されましたので、当列車は
前の駅に停まっている列車が発車次第、順次発車いたします。ご乗
車してお待ちください＞

・・ほれみる。俺の予想が当たった・・
早口の放送が流れると、一旦山手線に移った乗客が、なんだなんだ

と不満を口にしながら京浜東北線に戻って来る。

・・へっ、ざまあみろ。右往左往するから席を失くすんだよ。今まで降り止まなかった雨はありません・・

上機嫌の山田である。

隣の山手線はラッシュ並みの乗客を詰め込んで発車した。

ところがこちらは発車しない。

・・おい、もういいぞ。あまり混まないうちに発車しなさい・・

<カタツ、カタツ、ピー、ええ、この列車は時間調整のため当駅で二分ほど停車し、五時四十七分に発車いたします。そのまま乗車してお待ちください>

・・ええっ、山手線は発車したじゃないか。なんで二分も待つんだよ・・

こんなときの二分間はとてつもなく長く感じると共に、また豪く損をさせられたような気になるものだ。

ドンドン車内は混雑してくる。

・・あゝあ、空いてたのに……、つたく早く出るッ!・・

山田は腹の中で八つ当たりをしていた。

・・京浜東北線は山手線の下請けか。埼玉県民をバカにしているんじゃないの。もっとも俺は千葉だけどよお・・

ようやく電車が動き出す。

しかしスピードが上がってこない。

・・ほれ、遅れを取り戻せ。なんなら、快速運転にでもしろよ・・
という山田の願いとは裏腹に、列車は動いたり停まったりを繰り返す。

「ああ、いらいらする。走るなら走れ。停まるなら停まれ」
隣の男が呟くと、列車は停止した。

3

<ガッ、ピッ……、た、ただ今停止信号が出ました。前の列車がつ

かえている模様です。しばらくお待ち……>

列車がガタンとひとつ身震いをして動き出した。

・ おお、停まるなよ。飛ばせ、飛ばせ・

と山田は心の中でエールを贈った。と、それが災いしたのか、

< キキキキーツ！ ガックン、ガックン、キュー……>

列車は急ブレーキを踏んで停車した。

乗客は一斉に進行方向に傾ぎ、停まった瞬間今度は後ろへと傾いだ。吊り革に捕まっていないものはタタラを踏んでつんのめり、周りの乗客に支えられたお陰で、どうにか倒れずに済んでいる。

『イテエーツ！』

山田も思いつ切り足を踏まれた。

「あつ、ごめんなさい」

と謝りながらも、

その目は、

・ 急ブレーキが掛かったんだから、しょうがないでしょう。私が悪いんじゃないわよ・

と語っている。

ハイヒールで踏まれるともの凄く痛いものだ。

列車はそんなことを繰り返しながら、どうにか新橋駅に到着した。

西口広場では待ち合わせの人々が沢山いる。

列車からは意外なほど、ひとり一人の顔がよく見えるものだ。

・ 秘密の待ち合わせの方、ご用心、ご用心……。場所は良く考えて決めましょう・

順調に走り出した列車に、山田のイライラ虫も去っていた。

「また停まっちゃったりして……」

「はははは……、まさかあゝ。冗談は止めてよね」

隣の男女が不吉な冗談を言った。

< ガァー、ピーー……、ガタガタ、ああ、ええ、ただ今、上野駅でお客様の身体に列車が触れたとの情報が入りました。現在安全を確認しております。この列車は安全が確認出来次第、発車いたします。

しばらくお待ちください>

「ほくら、バカ、ケンちゃんぐだらな冗談を言うからよ」

「えっ、ええええーっ、俺の所為？　これって俺の所為」

・・そうだ、バカヤロー・・

山田は怒りをぶつけるように呟いた。

「そうよ、バカァー。うつふふふっ……」

「うん、もう。この、このこのお。へへへっ……」

・・バァーカ、いちやいやしてンじゃねえよ。時と場所を考えない、うちの会社の不倫バカカップルと同じじゃねえか・・

「ああ、もう、あつたまきた。おい、降りて飲みにいこうぜ」

「そうだな。ここ、新橋だろう。俺、好い店知っているよ」

「おお、そうか。じゃあ、おまえの奢り、なっ」

「へへへっ……、割り勘、割り勘。おーい、やまだぁー、降りるぞ」

「えっ？　・・とと、俺のわけねえか・・」

隣では山手線も停まっている。

・・ああ、今日は仏滅か。乗り換えもできない。せめて秋葉原ならなあ・・

山田はもう怒る気もしない、座席に深く座り込んだ。

あちらこちらから溜息が漏れる。

4

十分ほど停車後、乗客の気持ちを反映したような重い足取りで列車が動き出した。

山田は目をつぶって頭を空っぽにした。と、突然、

<ガガガーツ、ピーー、ピッ、本日は、大変ご迷惑をお掛けいたしました。当列車は定刻より二十分遅れです。お忙しいところ、大変しました。尚、誠に恐縮ではございますが……>

・・なっ、なんだ、今度はなんナンだよ・・

再び怒りが込みあげてくる。

<……が、当列車は大宮行きでございますが、本日に限り赤羽駅止まりとさせていただきます。ご迷惑とは存じますが、ご了承のほどよろしくお願い申し上げます>

「けっ、ふざけやがって。踏んだり蹴ったり、引っくり返ったとはこのことだな」

中年のサラリーマンが周りに同意を求めるように声に出して言い放った。

・ ・ ・ むふふふ……、お気の毒さま。俺は上野で降りるから関係ないの・ ・ ・

ちよっぴり幸せな気分の山田一郎であつた。

・ ・ ・ 他人の不幸は蜜の味・ ・ ・

さっきまで一緒に不幸を背負っていた仲間が、この放送を境に勝者と敗者にわかれた。

・ ・ ・ むふふふ……、頑張つてね。じゃあ、僕はここで降りるからね・

・

蜜の味わいを心に秘めて、

・ ・ ・ まったく、困りますよねえ。うん、うん……・ ・ ・

と頷きながら、山田は常磐線乗り場を目指した。

『くくくく……』

堪えていた笑いが口の端から漏れた。

一緒に上野駅で降りた乗客の口元が綻んでいるように見えたのは、

山田の気のせいだろうか……。

もう一つオマケに、

『むふふふ……』

と笑うと、すべての不快感が吹っ飛んだ。

御仕舞

第十三話 携帯でメールを打ち続ける女

1

上野発午後六時十分、常磐線快速取手行きに山田一郎は乗り込んだ。前の五両は我孫子で切り離されると放送があった。

・我孫子、読める？ “あびこ”と読むんだよ。ついでに、安蒜は読める？・

山田は最近この列車での帰宅が多い。

時間も早く本数も多いので確実に座れるのだ。

この日、運の良いことに、空いていた三人掛け席の真ん中にうら若き女性が座った。

「すいません」

と消え入りそうな声で挨拶をしてから座った。

山田もつられて、

『あつ、はい、どうぞ』

と間の抜けた挨拶を返して身体を脇に寄せた。

・今日は運がいいな。大安、大安、へへへっ……

別になにがあるわけでもないが、隣に若い女性が座ると嬉しいものだ。

まっ、大人しく座っていてくれれば、の話だが……。

出発間際にその女性がスツと立ち上がった。

なにかモゾモゾしている。

ジロジロ見てもと思い、山田は“週刊新潮”に目を落としていた。ガサガサ、ゴソゴソ、中々座らない。

やがて列車が動き出し、女性はよろけて山田の膝に腰を落としてしまった。

謝るかと思ったら、ジロツと睨みつける。

・むっ、なんだ、この女は……。珍しく礼儀正しいと思ったが、

勘違いか・・

その女に対する反感から、

山田の心境は、“痘痕も笑窪”から“笑窪も痘痕”に変わっていた。こうなると相手がどんな好い女でも悪い感情が優先する。

・・詫びのひと言えねえのか。早く座れ。バカヤロー・・と、なってしまうのは仕方のないこと……。

その女性はおもむろに携帯電話を取り出した。

「カチカチカチカチカチ、カチカチカチカチ、カチカチカチ……」
もの凄いい勢いで、一心不乱にメールを打ち出した。

「カチカチカチカチカチ、カチカチカチカチ、カチカチカチ……」
・・ええい、耳につく。うるせえ、バカヤロー・・

段々心がささくれ立ってくる。

女性はそんなことにお構いなしだ。

「カチカチカチカチカチ、カチカチカチカチ、カチカチカチ……」

・・疲れるだろう。少しは休めよ。えっ、疲れない。そうじゃねえよ、周りがたまんねえんだよ。いい加減にしねえか・・

と言いたかったが、動き出せば電車の音に紛れるだろうと我慢した。しかし、それでもカチカチ音は脳髄に進入してくる。

・・ああ、もうダメだ・・

『すいません。止めていただけませんか』

思い切って言葉をかけた。

女性は山田に一瞥をくると、携帯電話から目を離し膝の上に置いた。

それでホッとした山田が、

『ありがとう』

とお礼を言つと、

「私、なにか違反をしていますか？」

と言つて山田を睨む。

『えっ？』

「私、違反をしていますう」

女性は語尾を上げてもう一度山田に問い返した。

『い、違反……、いや、そうじゃなくて……』

答えに窮する山田に、

「じゃあ、邪魔をしないでください」

ときっぱりと言い切った。

2

『あつ、……』

と声をもらして山田は俯いていた。

― 行司差し違えで、山田の負け。

<ガッ、ピイツ、ああ、……座席にお座りのお客様は、一人でも多くのお客様が座れますように、なるべく席を詰めてお座りください。尚、車内での携帯電話のご使用は他のお客様のご迷惑となります。電源は切って、ご協力をお願い申し上げます。プツン>

・あれ？ ほら、今、携帯の電源は切ってくださいって、車掌さんが言ったじゃない。……ってことは、メールを打つのも違反じゃないのか？ そうそう、確か、携帯の電波は心臓のペースメーカーに悪いって、以前聞いたことがあるぞ・

『ほら、おねえさん。電源、切ってくださいって……。電波が心臓病の人に悪いみたいだから……』

山田は遠慮気に極力感情を抑えて言ってみた。

と、キツと顔を上げた女が、

「おねえさん、って……、だいたい、あなたは心臓が悪いんですか？」

と反撃してきた。

『俺っ？ 俺は、別に……』

シドロモドロする山田に、

「だったら、文句言わないでください。関係ないでしょッ！」

女性はきっぱりと言い放った。

『し、しかし、ま、周りに、心臓の悪い人が……』

「居るって言うんですか？ あなたは周りの人たちとお知り合いですか？」

山田の顔をマジマジと見ながら、女は皮肉交じりに攻めてくる。

『あつ、いや……』

フンといった感じに、女性はそんな山田を無視して、

「カチカチカチカチカチ、カチカチカチカチ、カチカチカチ……」
と、凄いスピードで機械音を発し続けている。

・・スピードに見とれている場合じゃない。よし、抗議のために、せつかく確保した席だけど、前のおばさんへ譲ろう。そうすれば、この女も自分の行為に気付くだろう・・

『どうぞ、座ってください。隣がうるさいですけど……ねッ！』

山田は皮肉を込めて言うてから、敢然と起ち上がった。

「えっ？ あ、はい……」

そのおばさんは小首を傾げ、ペコリと頭を下げたから座った。

山田は隣の女性の反応を見たが、

「カチカチカチカチカチ、カチカチカチカチ、カチカチカチ……」
まったく意に介する様子もない。

『糞ッ！ このバカ女……、世も末じゃ』

と小声で呟いた。

チラッと女性が目を上げる。

どうやら、山田の行為に気がついてはいるようだ。

しかし無視、相変わらず忙しくメールを打ち続けている。

席に座ったおばさんも、山田がなぜ起ったのか理解できたようだ。

おばさんは女性を横目で見てから、なるほどといった表情を浮かべ、前に立っている山田に視線を投げかけてから、静かに目を閉じた。

・・このヤロー、俺のような大人しい、然も分別のある男じゃなかったら、今頃は携帯を床に叩きつけられ、踏んづけられて、頬つぺたの一つも張り倒されているぞ・・

山田は憎々しげに呟いていた。

御
仕
舞

第十四話 山田の喪、果たして獲物は？

1

窓際サラリーマンの山田一郎（58歳）は、毎日終業ベルの五分後、つまり五時二十分には退社する。

誰に何を言われようが、ほとんど毎日それを厳守している。

もし何か言われたら、

『俺は、毎朝何時に出社していると思っている？ 俺は皆が出社する頃にはひと仕事、否、ふた仕事は終えているよ』

との答えを用意しているが、山田に向かって何か言う者は誰もいなかった。

それがまた、ちよっぴり寂しいが……。

会社を出た山田は、徒歩十分ほどでJR田町駅に到着する。

駅の売店で週刊誌を買い、五時三十五分前後の京浜東北線に乗って上野方面へ向かう。

月曜日は“週間ポスト”、火曜日は“週間朝日”、水曜日は“サンデー毎日”、

・・・うん？ 毎日が日曜日、可笑しな名前だね・・・

木曜日は“週間文春”、金曜日は“週間新潮”と決めていたものだ。

・・・過去形ね。これは窓際になる前の話……、あの頃は羽振りも良かった。今？ 今はね、大概週に二冊、文春と新潮かな。内容的に一冊で二三日は読めるだろう。ポストや現代は一時間で終わりのもの。まあ、少しエロっぽい写真が載るから嫌いじゃないけどね・・・

・・・えっ、余裕があるって……、何、拾って読めばいいだろうって人間には矜持があるでしょう。拾ってまで読みたくないよ。もっとも退職するとわからないけどね・・・

・・・矜持なんて生意気なこと言うな、ってか・・・

・・・そりゃあ、給料が減ってお小遣いも減ったけど、タバコを止め

たからね、それで少し余裕もあるの……。めつきりお付き合いも減ったしね・・

・・自分で稼いで、お小遣いは可笑しいって……。そりゃあ、まあそうだけど、あんたは言える、奥さんに……。だろう、だったら生意気なこと言わないのっ・・

・・えっ、わかったから、話を先に進めろ。あんたが色々と質問するからだよ。さて、どこまで話したかな？ あっ、そうそう……。何で京浜東北線に乗るかだったね・・

・・それはね、……・・

山手線より多少空いているということもあるが、山田はその補欠ともいえる扱いに甘んじている（山田の勝手な思い込みだが）京浜東北線に親しみを感じていた。

社内での自分の立場とダブる所為かも知れない。

途中で問題がなければ、上野駅にはだいたい五時五十五分ぐらいに到着する。

その日は何も問題がなく、

・・えっ、問題って何だって……。それはね、毎日お世話になっているＪＲさんに聞いてみてください・・

山田が目指す六時十分上野発、ＪＲ常磐線快速取手行きは既にホームに入っている。

同じホームの反対側には六時二分発のＪＲ常磐線快速取手行きが停まっている。

また、二本の間に六時六分発の勝田行きが挟まっている。

それもあり、後から発車する列車はまだガラガラ、席は選り取り見取りであるが、ここが思案のしどころ……。

2

これから三十分程の乗車時間を楽しく過ごすか、はたまた不快な気分で過ごすかの分水嶺である。

一車両の座席数は、三人掛けの席が四つ、二、三、二と区切られた七人掛けの席が六つ、合計で五十四人座れることになる。

その中には優先席が三×二の六席、山田にとってこの席は対象外、端から頭にはない。

山田は隣に女性が座り易い席をチョイスする。

もちろん女性とはいっても、ほんの僅かな隙間に、遠慮会釈なく、デッカイ尻を割り込ませるかたがたは対象としていない。

窓際中年男にとっても若い女性は魅力的だ。

そのような方と隣り合わせた運の悪い日は、ひたすら寝た振りで過ごすことになる。

自分のことは棚に上げ、獲物……、ではなく、楽しいひと時を提供してくれる若い女性が座ることを祈る。

そのためには三人掛けの席が好ましい。

そのためには罨を仕掛けなければならぬが、この罨は独りでは作れない。

善意の第三者の協力が必要なのだ。

タイミング的には隣の列車が発車する前、つまり空席に余裕のあるうちがいい。

しかし、七人掛け席の二人掛けの席に女性が一人、好ましいシチュエーションではあるが、他の席が空いているのにいきなり隣へ座るのは勇気がいる。

優先席ではない両端の三人掛け席は当然の狙い目だが、この席は競争が激しいので確保が難しい。

それよりも比較的容易に確保できる、七人掛け席の三人掛け部分を狙うのがプロの常道である。

山田の座右の銘は、一番は狙わず、二番目、三番目の席を確実にモノにする。

この打たれない立ち位置が、会社での長生きのコツだ。

さて、三人掛け席といっても誰も座っていないのに、始めから真ん中に座るバカはいないはずだ。

・あつ、ときどき居る、居る。真ん中に座って踏ん張っているのが……。あれって、なにを考えているのかね・

狙いは女性が一人座っている三人掛け席だが、これもまた他がガラガラなのに敢えてそこに座るといふのは少し恥ずかしい気がする。そこでプロは、車外でタイミングを見計らって、適度な混み具合になつてから乗り込む。

但し、その座っている女性が絶世の美女であつてはいけない。

なぜなら、絶世の美女の隣は並みの美女は避けるが、中年のスケベオヤジは好むもので、真ん中が空いていれば何の躊躇いもなく汚い尻を割り入れる。

そうなると、せつかくの苦勞が水の泡である。

また、あまり体格のいい女性でも困る。

山田が大柄なので女性が大きいと、間のスペースがとても狭くなつてしまう。

したがって、小柄であり美人ではないが、清潔感があり、好感の持てる女性が理想的だ。

不潔なものも困るし、陰険な面構えでも困る。

これだけの条件がすべて揃つたとしても、それで目的が達成できるかという、そうゆうものでもない。

これだけの条件を苦勞して揃えても、成功の確率は精々三十五パーセントである。

・えつ、何もしなくてもそのくらいの確立で隣に若い女性が座るだろうって……。くうくうくつ…、甘い、甘い。だから素人は恐ろしい。私の三十年の研究成果が信じられないなら、もうこの話は終わりにするけど……。えつ、もういいって。ねえ、そんなこと言わないで、もう少し、もう少しだけ聞いてよ。ねえ、お願いだからさあゝ・

・ ・ ・ こんでさあ。えつ、馴れ馴れしくするなつて。はい・ ・
先週の日曜日、久しぶりにすべての条件が揃った。

・ ・ ・ くくくくつ ・ ・ ・ 後は獲物を待つばかり ・ ・ ・

山田はほくそ笑みながらも、それを獲物に気取られないように寝た
振りをして待った。

・ ・ ・ あ、そうそう。このときスケベ顔を見せるとダメだよ。獲物は
逃げちゃうよ ・ ・ ・

カツ、カツ、カツとブーツの音が聞こえる。

・ ・ ・ うん、この音は ・ ・ ・
耳を澄ます山田。

・ ・ ・ これは間違いなく若い美人の奏でる靴音だ。デブにもババアに
も、況してやガキにはこの音は出せない ・ ・ ・

山田は薄目を開けて音のする方を盗み見る。

・ ・ ・ 若い女性だ。スタイル、好！ 顔、えつ、も、もの凄い美人 ・ ・
・ ・ ・ 好！ 好！ 好！ 好！ 超極上の女だ。常磐線でこんな美人

は十年に一度の奇跡だ。否、通勤して三十五年、初めての経験だ ・ ・
山田は感動に打ち震えていた。

・ ・ ・ 常磐線沿線の皆さんごめんなさい。これはお話です。創作です
から、本気にしないでください ・ ・ ・

・ ・ ・ も、もう直ぐ、あの女、俺の女になる ・ ・
山田は興奮で、何か勘違いしている。と、

ひとつ隣の席に座った。
・ ・ ・ ミニスカートからスラリと伸びた見事な足を、これ見よがしに
組んだ ・ ・ ・

男だけでなく、乗り合わせた乗客全員の視線が女性に集中した。
前に座った男たちの目は例外なく点になっている。

ちらりと視線が合っただけで、男たちは顔を赤らめた。

・ ・ ・ 糞ッ！ こっちへ座ればいいのに。あゝあ、ついてねえなあゝ ・ ・
・ ・ ・

思わず呟いていた。

腕時計を見る仕草をしながら、山田はその極上美女の横顔をチラッと見た。

『えっ？』

もう一度見る。

『えっ、ええええーッ！ 喉、喉……、チンコ』

驚きで声をあげそうになった。

よく見ればヒゲの剃り跡が青々としている。

・なるほど前の男の目が点になっていたのは、その驚きだったのか・

と合点がいった。

するとその女性の携帯電話が、“夢は夜開く”を奏で始めた。

なんの躊躇いもなく携帯を受けると、野太い声で辺りに憚ることなく話し始めた。

その声で気付いた連中が呆気に取られた顔をしている。

女は……、否、その男は、

「何よ、何か文句あるの」

と、しわがれ声で啖呵を切って、颯爽と電車を降りて行った。

社内に安堵の空気が流れた。

・ふっ、良かった。隣に来なくて……・

山田も心から安堵の溜息をついた。

隣にはご同輩のサラリーマンが座ったので、山田は居眠りを決め込んだ。

御仕舞

第十五話 近頃の医者は……

1

山田一郎は窓際サラリーマン、年齢は五十八歳、残り二年で定年を迎える。

若い連中は邪魔者扱いするが、そんな存在にも会社は人間ドックを受けさせてくれる。

三十六年間もの長きに亘って、家庭生活を犠牲にしてまで会社に尽くしてきたのだから、当然といえば当然のことだが、会社とはありがたいものだ……。

「ピンポーン、ピンポーン……。株式会社。の山田様、山田一郎様。一番診察室へお入りください」

看護婦からの呼び出しを受けて、山田一郎は指定された部屋の前に立った。

「はい、どうぞ」

『山田です。どうぞよろしくお願いします』

どんな気丈な性格でも、内視鏡検査の結果報告を受けるときは緊張するものだ。

言葉遣いがとても丁寧になる。

だからと言って、出てくる結果は変わらないのに……。

「どうぞ、お掛けください」

『はい。よろしく願います』

と、もう一度丁寧に辞儀をして医師の前に座った。

医師が診断書と一緒に数枚のカラー写真を取り出すと、机の上に並べる。

胃の粘膜が鮮やかな色彩で写っている。

その写真にジッと見入ったまま、山田は医師から言葉が発せられるのを待った。

無言の時間が流れる。

緊張感に背中を汗が伝わるのがわかった。

「ふゝむ、ここここ……」

医師が指差した。

『は、はい。色が……、明らかに、色が違います……』

その部分はピンク色をした健常な粘膜と比べて、黒紫色をしている。

「ふゝむ、……」

と声を漏らした。

・ドクン、ドクン、ドクン、ドクン……

それだけで山田の心臓は早鐘を打ち始め、音が医師にも聞こえるのでは心配になった。

「……………」

『せ、先生』

堪らず声を発していた。

「あ、はい」

胃の写真に目を落とし考え込んでいた医師が、山田の呼び掛けに視線を上げた。

『せ、先生……、癌、でしょうか？』

山田は不安を思い切って口に出してみた。

「……リンパ×○……、か……」

語尾が掠れて聞き取れなかったが、リンパ癌かも知れませんか聞こえたような気がした。

しかし、それをもう一度確認する勇気がなかった。

・ガン！ えっ？ そんな簡単に答えちゃうの、もう少し気を遣ってよ……

「そうですねえ……。よく調べてみないと……」

今度ははつきりと、

「そうです、リンパ癌です」

と聞こえた。

『ガン！ ガン！ ガン！』

と、後頭部をハンマーで三度殴られた気分だ。

・癌、癌、リンパ、癌・

という囁きが、山田の頭の中を駆け回った。

「……、……さん。……やま、だ、さん……」

『……あつ、はい。あ、す、すいません。……で、これから』

「山田さん、大丈夫ですか？ 少し細胞を採らせてもらいました」

『えっ、あ、大丈夫です。さ、細胞を、ですか？』

「ええ、そうです。細胞を培養してみせんと、癌かどうかは判断できません。培養には二週間ほど掛かります」

『に、二週間ですか？』

「そうです。私は水曜日の担当ですから、二週間後の水曜日にいらしてください」

・そうか、まだ癌と決まったわけではないのか・

『わかりました。では、よろしくお願いします』

山田はそれでも冷静を装って、丁寧に礼を述べて部屋を後にした。受付で費用の精算を待つ間、頭の中で自問自答を繰り返していた。

・先生はリンパ癌と言った・

・否、言ったように聞こえただけかもしれない……

・いやいや、確かにそう聞こえた。俺はリンパ癌なんだ。とうとうきたか。お袋になんて言おうかなあ……

・でも、まだそうと決まったわけじゃない。二週間後の結果が出るまで、知らせるのは止めよう・

「キキキーツ！ こらぁーツ！ 信号は赤だろう。気をつけろーッ！」

『あつ、す、すいません。ふうう、危ない、危ない』

・ダメだ、しっかりしなくっちゃ……。癌の前に交通事故で死んじゃう・

山田は自分の狼狽に対して皮肉な笑いを浮かべていた。

・・それにしても、今はほんとうに簡単に、癌の宣告をするんだなあ。誰にでも宣告するのかな？ 再検のとき一緒になった、あのお婆さんなんかに言うのかな？ 俺がこれだけうるたえるんだから、あのお婆さんなんてシヨックで引っくり返っちゃうんじゃないかな。それとも、俺がダラシないのかなあ。ふふふふつ……。なんだか笑うしかない心境だった。

3

・・こんなとき誰かに話せれば、少しは気が紛れるのだが……。しかし、会社で誰かに話せば、アツと言う間に面白可笑しく噂が広がってしまう・・

幸い山田には、過って駐在していた中国に信頼できる友人がいる。

彼女は元医師という経歴の持ち主だ。

山田は久しぶりに電話を試みることにした。

直ぐに携帯電話に繋がり、一時間ほど話し込んだ

親身に励ましてくれる友人に、山田はとても気持ちが楽になった。

『それにしても結果が出るまでの二週間は長いし辛い、せめて当日に結果ができれば、悩まなくてすむのに……』

と山田がその友人に話すと、

「私、その病気について調べてみます。明日また電話をします。それとなにかあったら、いつでも電話をしてください」と励ましてくれる。

その言葉に甘え、山田は毎日電話で彼女に苦しみや悩みを伝えた。それで山田の気持ちは楽になるが、彼女は……。

忙しいことも煩わしいことも、或いは情けない男と思ったこともあったろうが、いつでも親身になって応じてくれた。

山田は二週間毎日励ましてもらったことになる、それで悩みは随分軽減されたものだ。

その日が近づくと、検査結果を聞くのを先送りしたい気持ちが湧いてくる。

・・なにか絶対に避けられない用事ができないかな。病院に行かなくてもいいような理由が、なにかできないかな……

などと思い巡らしているうちに、とうとう運命の日はやって来た。

前日まで、

・・一度会社へ出勤してから病院へ行こう、否、午後から行こう・・などとうジウジしている、

「いい、明日は朝一番で行きなさい。そして、直ぐに結果を私に報告しなさい」

その晩、ほとんど命令口調の電話が入った。

それで山田は覚悟を決めて、家から直接病院へと向かった。

午前七時半到着、病院の扉は既に開いている。

・・俺より早い人がいる？・・

掃除の小母さんだ。

山田は心のシコリを振り切るように、元気良く挨拶をすると、とても素敵な笑顔が返ってきた。

それで気持ちが晴れた。

『よしッ！』

と気合を入れて、

・・どんな結果がでてもしっかりと受け止めるぞ・・と、心に誓った。

御仕舞

第十六話 勘違い女

1

山田一郎は典型的な窓際族……。

窓際という言葉にズキツとした方がいらっしやいましたらごめんなさい。

山田は今年の一月十六日、満五十八歳の誕生日を迎えました。

・二十二歳で就職して早や三十と六年、あと残り二年で定年かあ……。長いようで短かったなあ……。

などと感傷に浸っていると、いつもの時刻に、いつもの駅で、いつもの列車から、いつものように吐き出される。

上野駅から午後六時二分発の常磐線取手行き列車に乗ると、所要時間二十九分で、柏駅に午後六時三十一分に到着する。

この時間帯は帰宅ラッシュの第一回目のピーク、電車も駅もかなり混み合っている。

山田は押し合い圧し合いに抗することなく、流れるままに身を任せ、階段を登って改札口へと向かう。

『あつ、ごめんなさい。……』

と謝って、

・うん？　なんで俺が謝んなきゃいけねえんだ・

との疑問が湧き上がる。

よくいるじゃないですか、隣の改札でピンポン、ピンポンと鳴ると、いきなり隣の列からこっちの列へ割り込んで来る輩が……。

これって、とっても失礼な行為だよ。

ほんの少し待てば、直ぐに改札は正常に戻るんだから、狭い日本、そんなに急いでどこへ行く、ってね。

どっちにしたって、いきなり足を突っ込むのは、とっても失礼なことだよ。

わかったかい、ねえちゃん？

えっ、ねえちゃんて誰だ？

だって……、追々話しますから静かに聞いていてね、そのハゲ茶瓶の小父さん。

右手でも左手でもいいからちよつと挙げて、

・あつ、失礼・

とゆうポーズを取ってから、ワントンポ置いて入って来てくれれば、こっちとしては、

・あつ、なるほど、それは大変だ、まあ、どうぞ、どうぞ、なんのお構いもできませんが、こんな所でよろしければ、どうぞ、どうぞ・

となるわけだ。

この手をちよいつと挙げるというわずか0・何秒の行為で、これだけのコミュニケーションが成立する。

ただね、朝青龍、知っているよね、あいつ、じゃなくて、あの方が懸賞金を受け取る時の手形の切り方と眼付け、あれは頂けないね、あれじゃ喧嘩を売っている様なモンだから、あんなことを遣るとぶつくらされる（叩かれる）よ。

よっぽど喧嘩に自信のある人以外は、決して遣らない方がいいと思います。

これは作者からの助言です。

2

宜しかったら、話を戻しましょうか……。

さっきも言っただけど、この時間帯は駅も相当混んでいるんだよね。柏っていうと田舎って馬鹿にされるけど、東武線の乗り継ぎ駅にもなっているから、結構混雑するんだよね。

暇な方は是非一度遊びに来てください。

あつ、これは作者からのお願いです。

そんでもって、もつと暇な方は東武線の“流山おおたかの森”へも寄ってみてください。

慎ましいでしょう、作者は生まれも育ちも流山ナンですよ。

本当は柏なんてどうでもいいんだけど、いきなり流山へ来てくださいと言われても皆さんが困るでしょう。

流山の人間って……、えっ、どうでもいいから話を進めろ、って、はいは、わかりました。

・流山良い所一度は御出で、一度と言わず二度御出で、と……・わぁーかった、わぁーかった、てばぁー。

ふんと（本当）に気がみじつけんだからよぉ、トケイ（都会）モンはよぉ。

ふんで、じゃネくってよ、それで、山田と前の人との間は二十センチ、否、男だったから二十五センチだった。

その隙間へ先ず足を入れ、さつと身体を割り込ませた女がいた。

『うつ、とつ、ととつ……』

と、急ブレーキを踏んでも、どうしたってぶつかりますよね、普通の人は……。

山田は争い事が嫌いで、それで咄嗟の場合、ごめんなさいと謝る癖が付いている。

・皆さんもそうしようね。そうすれば、余計な争い事に巻き込まれることはないはずですから、普通は……、ふふふふ……、普通は、ねっ・

気になる、ええ、気になるの、くふふふ……、その話はまた今度、くくく……。

『あつ、ごめんなさい。……』
と謝って、

・うん？　なんで俺が謝んなきゃいけねんだ・

との怒りが、山田の脳裏に湧き上がった。

と、その女性は首だけをギリギリと捻って、まるでエクソシストに出てくる悪魔に憑かれた少女の様な恐ろしい顔で睨み付けた。

恐怖心と強烈な香水の臭いで、山田の心臓は動悸し激しい眩暈に襲われたが、腹にグツと力を込めて踏ん張って耐えた。

しかし、山田は魔女の顔を正視できず、思わず目を伏せていた。

3

・ ・・・なんで、なんで俺が……、俺がいつたい、なにをした・

ドンドン怒りが込み上げてくる。そして、

『ふざけんな、このドブス！ テメエが割り込んで来たンじゃねえか』

ついに大人しい、平和主義者の山田が切れた。

すると魔女の顔が、か弱き乙女の如き表情に一変し、可憐な瞳には涙さえも湛えている。

周りの全ての男性を、否、全ての老若男女を味方に付けてしまう表情だ。

幼児のときならともかく五十八歳の今の山田には、天地が引っくり返ろつと、空から槍が降ってこようと、決してできない表情である……。

こうなると勝ち目はない。

――女は恐ろしい。

周りの全ての人々、否、柏駅を囲む十キロメートル四方の全ての生きとし生ける物の批判が山田に集中していた。

納得はできない、できないがしかし、すぐすごと引き上げるしか方法はない。

背中に批判の矢がドドドドドツと突き刺さる。

本来なら東武野田線に乗り換えなければならないが、批判の矢を避けるために西口へ出ることにした。

さっきの魔女に後をつけられている様な気がしたのだ。

それで、山田は表通りを避け、路地裏をしばらく徘徊してホトボリ

を冷ました。
家で家族にそれを話しても、誰も身を入れて聞いてはくれない。
まあ、いつもの事だが……。

4

冷めた残り湯に身体を縮めて沈めると、再び怒りが込み上げてきて、
『クソッ！ クソッ！ クソッ！ もう一つおまけに、クソッ！』
と、山田は叫んでいた。

「な〜に、なんか、言ったあー！」
と女房の声がしたので、

『……………』

山田は口を噤んだ。

この場合は決して確認の意味ではなく、“うるさい”と同義語である。

なぜならば、語尾が“！”マークである。

従って、疑問形ではない、ということがわかる。

長く苦しい共同生活の末に、山田はそのことが理解できるようになったのだ。

・絶対におかしいよ。もしも、もしもだよ、俺が若い女性の間割り込んだとしたら、いったいどうゆうことになる・・・

ポコポコポコッ…、ポコッ…。

・痴漢呼ばわりされて、足を踏んづけられて、蹴っ飛ばされても文句は言えまい・・・

ポコポコポコ…、ポコッ…。

『くうーっ、くっせえーッ！』

風呂の中でする放屁は気持ちがいいものだ。

・その点、女はなんナンだよ。男にぶつかろうが、蹴っ飛ばそうが、金、タ…、あつ否、股間に手が触れようが……、

「あゝら、貴方は運が良いわねえ〜。私みたいな美人に触ってもら

って」

といった調子だろう・・

『ざけんじゃねえよーッ！　　ったく……、どの面さげて怒りの所為で、再び声を張り上げてしまった。』

『クソッ！　　いたい男をナンだ、と……』

と言いかけて慌てて口を押さえたが、

「だから、いったい、なんなのよーッ！」

間髪を容れず怒声が返ってきた。

――　　君子は危うきに近寄らず。

山田は、ブクブクブクッと湯に沈んだ。

御仕舞

第十七話 自由の履き違い

1

山田一郎は平和主義者と言うと聞こえはいいが、なあに単なる事なかれ主義者だ。

会社では典型的な窓際族、家庭ではダメ亭主……。

一月で満五十八歳になった、後二年で定年を迎える年齢だ。

定年後の計画は、あると言えばあるが、そのための努力はしていない。

親から譲られた僅かばかりの農地、これをなんとか活用したいと漫然と考えている。

考えてはいるが行動はしない。

否、気持ちはあるが、疲れて身体が動かないだけだ、その内に、その内に、といつも自分に言い訳をしている。

争いごとの嫌いな男だが、時として相手によっては切れることもある。

「こらあーッ！ その女ーッ！ オマエだよ、オ、マ、エッ！」

山田が斜め前に立つ女子高生に向かって、いきなり怒鳴りつけた。

ジツと我慢していた。

例の、ブンチャカブンチャカの音もれだ。

電車が動き出せば音に紛れるだろうと期待して、ジツと我慢していた。

しかし、その耳に纏わり付く嫌な音は、山田の耳を狙い撃ちしているようだ。

・・周りの連中は気にならないのかな。それとも皆我慢しているのかな・・

山田は周りの乗客を窺い見て、目の合った前の乗客に、目でその不満をぶつけてみた。

無神経に公害同然の音を撒き散らす女子高生をチラリと見てから、その乗客に“ほらその女うるさいでしょう”という目を向けてみたのだ。

しかしその男はサッと目を逸らす。

女子高生のスカートから出た大根足に興味がいつているのだろう。

・このスケベオヤジ・

裏切られた思いでそう呟いていた。

2

「こらあーッ！ その女ーッ！ オマエだよ、オ、マ、エッ！」我慢に我慢を重ねていたが、山田はとうとうブチ切れた。

座っていたからいいようなものの、もしも隣に立っていたら、そのイヤホンをむしり取り、i p o tを床に叩きつけ踏み潰し、女の横っ面を一発、張り倒していたことであろう。

・いや、座っていて良かった。明日の朝刊を賑わすところだった・

と思ったのも束の間、当然i p o t仕舞い込むものと考えた山田が甘かった。

女子高生はシラッとした顔で山田の方を一瞥しただけだった。

その態度はまるで、“遣れるものなら遣ってみなさい、この窓際サラーマン”と挑発されているように感じた。

その細い眉、隈取りのようなアイライン、無表情な能面面が一層山田の怒りに火を点けた。

「こ、こ、ここここ、このバカ女ーッ！ いい加減にしろーッ！」と、座席から腰を浮かして怒鳴る山田に、女も一瞬たじろいだ、ように見えた。

・これだけ脅かせば、今度こそ静かになるだろう・

しかし、近頃の女子高生は強かだ、フンと鼻先で笑って無視を決め込む。

啞然とする山田……。

・ ・ ・ もう止めよう、もうよそう、これ以上拘わると、やばいことになりそうだ。明日の朝刊の見出しが頭を過ぎる・ ・ ・
しかし、周りの乗客のなにかを期待するような視線は、無言で後押しをしてくれているように感じられた。

山田は大衆を味方に付けた気でいる、それが間違いだった。

―― そんなことはあり得ないのだ。

確かになにかを期待はしているが、それはただ他人の不幸は蜜の味、といった場面が起こること期待しているだけに過ぎない。

山田に社会正義の主役を期待しているわけでもない。

況してや、勸善懲惡で、その女子高生が自分の無作法に気付き、私が悪うございましたと土下座する場面を期待しているわけでもない。大概の人間にとって、自分に影響を及ぼさない他人の不幸は、とても芳醇で美味しいものなのだ。

観衆は大見得を切って主役のつもりの山田と一応悪役の役回りの女子高生とを見比べて、どちらの応援をしようか判断している。

まあ、山田に99%の正義があつたとしても、敵味方は半々と考えて間違いはない。

否、相手が美人の女子高生の場合、下手をすると七三の割合になっている可能性が高い。

もちろん山田が三だ。

電車の中で争う場合、そういった状況判断が大切なことである。

―― 読者の皆様もくれぐれもお気をつけあそばせ……。

作者からご進言申し上げます。

3

「なによ、糞才ヤジ」

女子高生の反撃が始まった。

・ ・ ・ ドキッ……、正義は150%俺にある筈だ、なのになぜこの女

は反撃できるのか・

山田には理解できない。で、

「……………」

無言。と、

「私がアンタになにか迷惑をかけた？」

女子高生が嵩にかかって攻めてくる。

「ああ、迷惑だ。その音がうるさくって、落ち着いて本も読めねえよ」

ようやく反撃して、辺りの乗客を見回すが、皆目を逸らし同調を示す者はいない。

「私は音楽を聴いているだけよ。私の自由でしょう」

山田を睨みつける女子高生の目は冷たく、殺意さえも感じられた。その後ろでウンウンと頷いているアホな乗客、若い女性というだけで、“私はか弱い女性の味方です”と正義を気取って女性の味方に付く輩がいる。

・・今時か弱い女性などいるものか……………

「自由……、自由だと。自由っていうのはなあ、いいかよく聞け、他人の迷惑にならない、他人に迷惑をかけないってことが前提にあるんだよ。その上での自由だ。アンタのは自由でもなんでもなくて、只の我儘ナンだよ。わかったか、唐変木^{とうへんぼく}」

・・決まった。ジーン……………

山田は自分の言葉に酔っていた。

・・女、見ろ、周りの連中も俺の言葉に感動しているだろう・・

感動で身震いしている山田の耳に、

ブンチャカブンチャカ、ブンチャッチャ…

と音もれが聞こえてきた。

・・ななな、なんだよ、俺の話を聞いてねえのかよ・・

とそこへ、中距離列車の通過待ちの北千住駅でゴツイ黒人が乗り込んできたのだ。

デッカイ、二メートルはあろうか、まるでゴリラだ。

「ハアーイ、イエーイ！」

しかし、怖い顔にもかかわらずやたらと愛想がいい。

山田はその黒人と目があつた瞬間、思わず微笑みを返していた。

そのゴリラの耳に突き刺さったイヤホンからは女子高生と同じリズムの音がもれてくる。

然も女子高生の倍の音量だ。

・ ・ ・ 糞、このバカヤロー。ここは日本だ、デケエ面するんじゃない。

と心の中で囁いて、山田は静かに目を閉じた。

・ ・ ・ あの女子高生、俺を馬鹿にしているだろうなあ……。しかし、

君子は（誰が君子じゃ！）危うきに近寄らず、だ。それにしても……

……、ああ、情けねえ……

御仕舞

第十八話 醜き座席のぶんどり合戦

1

『イテツ、このヤロー！ 他人にぶつかったら“ごめんなさい”くらい言えんのか』

と思わず声を発していた。

山田は車内での立ち位置を決めている。

早朝の電車は常連客が多い、いつしか自然にそれぞれの座る席、立つ位置が決まってくる。

偶に見慣れない乗客が乗って来ると、車内は混乱する。

自分の位置を奪われた者は慌てふためき、他の位置を確保する。すると奪われた者がまた混乱する。

こうして混乱の連鎖が起こり、車内はパニックと化す。

――今日はその話ではない――

一般的なサラリーマンは大概そうだと思うが、山田も毎朝乗る電車も決めている。

JR常磐線柏駅、六時五分発の通勤快速上野行きと……。

そして立つのは、後方から三両目の車両、進行方向に対して一番前のドアの右側、そこが山田の定位置だ。

朝の通勤列車では、休日出勤を除いて座らない。

それがサラリーマンの矜持と、長い間信じて実行してきた。

・ けっ、大の男がガツガツと席を奪い合いやがって、見つともねえナ・

大の男たちが慌てふためき席を奪い合う、そんな毎朝の情景を見ながら呟く。

・ ・それを自己満足と笑いたければわらえ……。俺は退職するまで続けるだけだ・

――今日はこの話でもない――

山田は最後にゆうゆうと乗り込み、いつもの定位置に陣取った。

・よし、今日も定位置が取れた・

サラリーマンは、それだけでのことです。その日一日が気分良く過ごせるものだ。

――サラリーマンでない皆さん、そこそこ宜しくね。（作者からのお願いです）えっ、そこそこって、どこそこだ？ だって……、その首の上に乗っかって丸くって黒いモンで考えなさい――

2

そして自慢の皮製の鞆を網棚に上げようとして、おもむろに振り返る。と、そのとき、

山田は右肩に強い衝撃を受けた。

発車間際に慌てて乗り込んで来た男の方がぶつかったのだ。

男の目は唯一残された空席に向かっていて、山田の存在が目に入らなかったようだ。

『イテッ、このヤロー！ 他人にぶつかって“ごめんなさい”も言えんのか』

となったわけだ。

それは、争いごとを好まない、と言うよりも争いは避けて通る山田にしては珍しいことで、情けないことに足がガクガクと震え出した。
・ヤバッ……

山田は直ぐに後悔を感じる。

最後の席を確保した男が、怒鳴った山田の方を上目使いにチラッと見たのだ。

品定めをするような嫌らしい目だった。

このときが勝負だ、少しでもたじろぐと負ける。

一瞬火花が散る。

こちらを弱いと値踏みすると、敵意を持った挑発的な目に変化する。その日は少しだけ棘、引き分け……。

・・やるか、このヤローツ！・・
声には出さず唇だけを動かして応戦、止せばいいのに……。
・・ハッ、ハッ、ハッ……。ドクン、ドクン、ドクン……。心臓が飛び出しそうだ。
緊迫のときが流れ、全身を緊張感が包み込む。
山田は拳を握り締めて恐怖心を振り払い、心の中で迎撃態勢を取った。……と、
その男は静かに目を閉じた。
・・ほっ……。ああ、よかった・。
というのが、山田の偽らざる心境だった。

3

山田はドアに寄りかかり、冷静を装って日経新聞を読み始める。そういえば、今日は買ったが、最近販売員がいなくて新聞を買えない日が多々ある。
確かに、六時五分発というのは早いと思う、早いと思うが以前はゆううつと買った。
いつからか“KIOSK”のオープンが遅くなった。
以前聞いたところでは、販売員が集まらないということだった。しかし、これだけ不景気で失業者が増えれば、黙っていても応募者は増えるはずだ。

――日経を読むのはサラリーマンの必須事項、のはず……。えっ、最近ではネットで見れば十分だって……。なに、見るじゃなくて視るだって。あっそう、なるほど、最近の新聞は読むではなくて“視る”ですか、なるほどねえ。へーえ……。――
ええと、山田は読み始めたが、中々興奮が鎮まらず新聞の内容が頭に入っていない。
・・他人にぶつかって“ごめんなさい”も言えねえのか。ったく。ガツガツしやがって、見つともねえナ・・

またまた怒りが込みあげてきて、肩にぶつかった男の方を見る。

― あっ、今度は“見る”ね。ええなあ、英語は単純で…… ―

4

・・ けっ、狸寝入りか・・

座った乗客の半分は狸寝入り、残りの半分の半分は携帯でメール、そのまた半分が新聞（といってもスポーツ新聞込みね）、その半分が単行本で読書、その他はキヨロキヨロと挙動不審、こういった連中とは目を合わせない方がよい。

― あっ、携帯小説の方は、読書じゃなくて“視書”だったね。けけけ…… ―

しかしあの皆揃っての狸寝入りには、外国人が驚きます。

それで降りる駅に着くと、パツと目を明けて、サツと降りる。

正に神業ですねと驚きます。

中には朝から凄い鼾を轟かしている方も、一車両に一人か二人はいらっしゃいます。

そんな方には、“毎日のお勤めご苦労様です”と声をかけてあげてください。

確かに、前に座った他人がこちらをジッと見ていたら、ちょっと怖いよね。

下手をすると、“俺にガンを飛ばすのか”って因縁をつけられちゃうモンね。

だから、狸寝入りは正解、庶民の賢い知恵だ。

でも、外国へ行ったら止めようね。えっ、

『なぜ？ だって……』

あのねえ、中国の地下鉄なんて網棚がないの、わかる？ その意味合いが……。

乗せる人はいない、と言うよりも、危なくて荷物は手放せないのッ！ わかった？

それが世界の常識ってもんよ。

日本人は平和ボケ、アンタは只の天然ボケ、ってね。

御仕舞

第十九話 鈍感な男

1

時刻は終業少し前の午後五時……

「プツ、プツプツプツ、プツ、プツプツプツ、プツ、プツプツプツ

……」

と、決まってこの時刻に山田の机上電話のベルが鳴る。

『チエツ』

山田は小さく舌打ちをして受話器を取る。

「あつ、俺」

予想通りだ。

・・だったら、取らなければいいだろうと考えるかも知れないが、予想以外の人物からということが無きにしも非ず、出ないわけにはいかない・・

だがしかし、山田は典型的な窓際社員、席もほんとに部屋の隅の窓際近くにある。

実際には、得意先や会社の役員から掛かってくることはほとんどない。

「今日、どうする。帰る？」

・・当たり前メエだろうが、帰らなくてどうする。でも、一緒に帰るのは勘弁してくれ・・

と断りたいのだが、

『うん、帰るよ』

と応えて、いつも後悔する。

山田はサラリーマン生活36年の大ベテランだが、誰かと一緒に家の近くまで帰るということは、精々2パーセントしかない。

年間250日出社するとして、×（かける）36で9000日、その2パーセントは180日という計算になる。

・ええ、わかっているの。俺は一人で帰りたいの、週刊誌を読みながらネ。いい加減に、こちらの気持ちを読み取って欲しいよ・
「何時？」

『五時半、一階のガードマン室の前にいるよ』

「うん、わかった。五時半、ね」

『でも、待たないよ、俺……』

せめてもの抵抗だ。

「冷てえなあ〜」

・なにを言ってやがる。男同士で、毎日一緒に帰るって方が異常なことだろう・

2

まだ、途中までなら我慢もできる。

しかしこの男の家は、同じ東武野田線で山田よりも二つ先の駅だ。従って、一緒に帰るということは、山田にとってはまったく自由がないということなのだ。

・俺はねえ、一人で帰りたいンだよ。それも座らないのが俺の主義、でもアンタはしっかり座りたがる。そこでもう、意見の擦れ違いがあるわけだ・

自分の主義を変えて相手に合わせるのは、とてもストレスを感じるものだ。

況して、疲れ果てた会社帰りだ。

偶にはいいだろう。

でもな、毎日毎日ベタツとくっつかれたンじゃ、堪ったモンじゃねえ。

・しかもだ、アンタはベラベラ、ベラベラ、自己中心的な話題ばかりだ。いかにも周りの乗客に聞かせるように話すンだよナ・

『けっ、誰もアンタの話なんて聞きたくねえんだよッ！』

世の中が自分中心に廻っている人って結構多いよね。

・その上、自分は誰よりも優秀だと思っている。そう思っているのはアンタだけだ・

『高かが。ヘナチヨコ大学じゃねえか。ふざけやがって……、まだ東大の銀時計なんてンなら許してやつけどよお』

・皆知っているンだよ。アンタが実力で役員になったンじゃねえ、つてことを……

『誰も言わねえのをいいことに、たく調子に乗りやがって。ざけんじゃ、ねッ！』

・あっちへゴマすり、こっちへゴマすり、そんでもって、ようやく役員の端っこにぶら下がった。ぶら下がったと思ったら、アツと言う間に解任だ・

『役員ときは他人を散々見下しやがって……。解任されて当然ナンだよ、実力がねえんだからよおッ！』

・それを、現在の不遇は会社が悪い、社長が悪いときたモンだ・
『そんな戯言を、毎日聞かされる方の身にもなってみやがれえッ！』

・だいたい、アンタは本当に嫌な性格だよ。人前で平気で屁はぶつ放すし、鼻糞はほじくる。それを如何にも大物がすることのように考えている・

『バカヤローッ！ 小学生のガキにだって、そんなことの善悪ぐれえわかるべえーッ！』

・大物は紳士が多いの。だから、人前で屁をこいたり、鼻糞ほじつたりはしねえの・

『わかったか、このボケカスヤローッ！』

・でもね、俺はアンタのこと嫌いなわけじゃねえよ・

『えっ、なに、これだけ糞ミソに言っておいて、嫌いじゃねえよはねえだろうつて』

・否、ほんとに嫌いじゃねえよ。じゃあ、好きかって、言われても困るけれどね・

『子供じゃねえんだから、野暮は言いつこなしにしようぜ』

・ ・ それにしても、この間は参ったよ。はつきり言つて、一緒に帰りたくねえから、アンタからの電話に出なかった。にもかかわらず、後を追いかけて来て、電車で座っている俺の前に立つたね・ ・

『テメエはストーカーかッ!』

・ ・ あんなに気持ちの悪いことはなかった。膝をポンと叩かれたときは、正直デツカイ粟粒のような鳥肌が立ったモンだ・ ・

『なんで、あれで、俺が避けているんだ、ってことに気がつかねえんだあーッ!』

・ ・ あれで俺は知ったよ。世の中にはどうしようもなく、鈍感な奴がいるんだってことをネ……・ ・

『己を知れッ!』

・ ・ 気がついていねえようだから、友として忠告するけど、社内でもアンタは一、二番を争う、嫌われモンだよ。うん、それは自信を持つてもらっていいよ・ ・

『だから、始業中に、テメエの都合だけで、他人を呼びつけるンじゃねえーッ!』

・ ・ 皆迷惑しているよ、時を選ばない、空気を読まないアンタの電話には……。それに、あの電話の切り方、相手がテメエの気に入る回答をすると、気持ち悪い猫なで声応対する。ところがなんだ、一旦気に入らない返事が返ってくると、叩きつけるように切るだろう・ ・

『テメエの下品さと、ほんとの教養のなさが丸出しダヨッ!』

・ ・ でもね、もう一回言うけど、俺はアンタのこと、嫌いなわけじゃねえよ。だからって、じゃあ、好きか、って聞かれても困るけど

……・ ・

『て、優しく言ったンじゃ、オメエにはわかんねえだろうなあ……!』

御
仕
舞

番外編 図々しい奴らPart - ?

1

『なあにが、カズミちゃん、じゃ……。なあにが、はぁい、じや』

山田一郎は、毎日二人のこんな呼びかけで始まる遣り取りに悩まされ続けている。

上司と部下、馬鹿男と馬鹿女が隣に居るのだ。

『いい年こきやがって、いい加減にしろってんだ』

男は四十五歳で妻帯者、女は独身で三十三歳である。

二人ができていることは、会社中の人間が知っている。

しかしこの馬鹿カップルはまったく恥じるということを知らないらしい。

二人揃って神経が一、二本切れているらしい。

時と場所を選ばずにいちやつく。

『ハマサキさん、今日のお洋服、とっても素敵ですねえ』

『お、始まった。ああ、虫唾が走る。十代の女の子ならともかく……』

山田はマジマジと女の顔を見た。

『うん、これ僕のお気に入り。これって、結構高かったんだよね』

『ええ、とっても素敵ですよ』

『はいはい。わかった、わかった。なんでもええがナ。この馬鹿、皆からチンパンジー面と陰口叩かれているのも知らねえで、二枚目気取りだよ』

『ヤマワキさん』

『もつと普通に呼べねえのかよ。漢字で呼べ、漢字で。平仮名で名前を呼ぶんじゃない。馬鹿ヤロー、じゃなくて、馬鹿アマア。ああ、気持ち悪い』

2

自分の新婚時代を振り返って、人前でこんなベタベタしたことはない。

また、三十五年のサラリーマン人生においても、通勤電車で遭遇した馬鹿カップル以外、見たことはない。

「カズミちゃん、これ、美味しいから食べなよ。君のために買ったんだ」

「うわあ、わたしだあ、いい好き。ありがとう……」

感動で女の目が潤んでする。

「ケエケケケ……、カズミちゃんが喜んでくれるのが、一番嬉しいなあ」

『そのチンパンジーの雄叫びのような馬鹿笑い、なんとかなんねえのかよ。どんなに気取ったって、猿は猿、お里が知れるってものだ』

「ハマサキさん、わたしうれしい……」

『いつまでも遣ってる。ばあか』

こんな遣り取りを毎日仕事に見せ付けられるのだから、堪ったものではない。

『ほれほれ、三十過ぎの女がそんな鼻にかかった声を出すなよ。ああ、気持ちがわりい……。ホテルへでも行って遣ってくれよ』

隣の席なので、山田は二人の合図を全てお見通しだ。

「さあて、今日は早く帰ろうかなあ」

男の合図だ。

すると女は、そそくさと片付けを始める。

『いいから、堂々と遣れよ。皆知っているんだから。カズミちゃん、そろそろホテルへ行こうか。はあ、い、今日も激しくしてね、って言えばいいじゃねえか。ったく、ああ、馬鹿らしい』

3

八時半、始業ベルが鳴り響く。

それから五分ほど過ぎると、女の机の電話が鳴る。

「はあゝい。……、ふんふん、はあゝい、お氣をつけて……（チュッ）」

『おうおう、また今日も遅刻か……』

と馬鹿女が男の部下たちに、

「ハマサキさんは電車が遅れて、今田町駅の改札を出たそうです」

『なあゝにが、お氣をつけてじゃ。朝まで一緒に居たくせに……』

だいたい君たちはJRを愚弄しているのか、テメエの遅刻を電車の所為にするんじゃないやねえよ』

馬鹿女の報告に、部下たちは当然白けた顔をしている。

『このチンパンジー男がいないと業務が回らないと思っているらしい、だからこのエテ公がつけあがるんだ。しっかりしろよ、どうせ拾った社長職、役員職じゃないか。保身ばかり考えているんじゃないやねえ』

このチンパンジー男の浮気と傍若無人な振る舞い、わかつていながらにも言えない役員と社長……。

『なに、だったらオマエが言え……、おお、言わないでか、言つてやろうじゃねえか……、ふんでもよお、俺は明日も知れない窓際族。このチンパンジー男が会社の実務を牛耳っているんだ。俺だって、ガツンと言いてえよ。ああ、情けない、情けない……』

皆がこの馬鹿力ツプルの破綻を待っている。

その内に、浮気がエテ公の妻に知られ、馬鹿女は妊娠、死ぬの、生きるのと大騒ぎ、三面記事が社内を駆け巡る。

社内の反エテ公派は大喜び、つまり馬鹿力ツプを除いて、全員が大喜びって寸法だあな。

そんなことを考えながら、影でこそ悪口三昧……、ああ、情けなや、情けなや。

御
仕
舞

番外編 図々しい奴らPart - ?

1

窓際族の山田一郎は、毎朝不倫馬鹿カップルの電話での会話に悩まされることから一日が始まる。

「はあゝい、わかりました。お気をつけてえゝ」

鼻にかかった声で子猫のように答える。

・ ・ 止めてくれ、気持ちが悪い。周りの迷惑も考えろよ。ほれ、最近では部下も白けて、居なくなるだろうが。一人の太鼓持を除いてさあ・ ・

「今ハマサキさんは川崎にいるそうです。電車が故障したそうです」
・ ・ おいおい、今日も電車の故障かよ。いい加減にしねえと、毎日遅刻の言い訳に使われたンじゃ、JRさんも黙っちゃいねえぞ・ ・
上司と部下の関係の馬鹿男と馬鹿女が隣にいるのだ。

・ ・ いい歳こきやがって、毎朝きやびきやび。寝言はベッドの中で言ってこい・ ・

片や四十五歳の妻帯者、片や三十三だか四だかの歳の独身女、二人ができていることは、会社中の人間が知っている。

犬の小便のようにあっちこっちに臭い（証拠）を残している。

色々な場所で目撃されているにもかかわらず、この馬鹿カップルはまったく恥じるといふことを知らない。

会社の事務所で、休憩室で、食堂で時と場所を選ばずにいちやつく。普通はどちらかに多少の理性があり、他人の目を意識するものだが、この馬鹿カップルに他人はただのジャガイモと映るらしい。

二人揃って神経が一、二本切れている、としか思えない。

「ハマサキさあゝん、昨日は何をたべましたあゝ」

女が鼻にかかった声で問うと、

「うん、昨日はねえゝ。おいしいラーメンだよあゝ」

男が小学生のような語り口で答える。

・馬鹿か、おまえら・

「うわあゝ、いいな、いいなあゝ。おいちかったでちゆか？」

「うん、とってもおいしかったよあゝ。今度一緒に行こうねあゝ。けえけけっ……」

生まれがよつぽど悪いのか、男は下品な笑い方をする。

二人の会話が始めると、一人の太鼓持男を除いて部下はスツと消える。

さすがに馬鹿らしくて聞いてられないのだろう。

部下でさえそうなのだから、他部署の人間にとつては迷惑以外のなものでもない。

「ハマサキさん、今日のお洋服、とっても素敵でちゆねえゝ」

「ええっ、ということはいつもの服は駄目なのあゝ」

「ううん、バカアゝ、いつも素敵でちゆよあゝ。だけど今日のお洋服は特に素敵でちゆうよあゝ」

・おゝお、あゝあ、む、虫唾が走るうゝ。た、助けてくれえゝ……と、あちこちから声なき声が聴こえてくる。

「これ、これは僕のお気に入り。結構高かったんだよね」

「ええ、とっても素敵ですよあゝ」

・へいへい、わかった、わかった。なんでもええがナ。この馬鹿、皆からチンパンジーと呼ばれているのも知らねえで、二枚目を気取りやがつて。馬鹿、だねえゝ、服より鏡を買えよ・

「ハマサキさあゝん……」

・普通に呼べねえのか、漢字で呼べ、漢字で。平仮名で名前を呼ぶんじゃねえよ。馬鹿野郎じゃなくて、馬鹿ニア！。ああ、気持ち悪いい……

山田は自分の新婚時代を振り返ってみても、人前でこんなベタベタしたことはない。

テレビ以外でこんな馬鹿カップルは見たことがない。

或る朝……、

今日も始業時刻を過ぎてもハマサキが来ない。

「あのチンパンジー、今日も遅刻だよ。また、電車の故障か」

「くくくくつ…、番の片割れも来てねえだろう。おつ、噂をすれば……」

女がとぼけた顔で、“おはようございます”とお愛想をふりまきながら部屋へ入ってきて、荷物を机に置くなりさつと消えた。と、女の机の電話が鳴った。

“太鼓持（又は、茶坊主）”男が躊躇いがちに手を伸ばす。

・あぁ、またかよ。出たくねえな。どうせ朝まで一緒だったくせに、わざとらしく電話なんかしてくるなよ・

電話の主と用件がわかっているだけに躊躇いがあるのも無理はない。

「はい、はい、わかりました。お気をつけて」

周りを気にしてか、太鼓持の語尾がかすれる。

五分ほどして女が戻って来た。そして、

「ハマサキさん、もう直ぐ駅へ着くそうです」

と、太鼓持に伝えた。

「えっ？ たった今、ハマサキさんから電話があつたよ」

「えっ？」

二人の会話が途切れる。

・いつ聞いたんだよ。まったく、もつとしつかり打ち合わせしておけよ。こっちはいい面の皮じゃねえか。ほれ、隣の窓際族がこつちを見ているじゃねえか・

「くくくくつ…、馬鹿だねえ」

「まったく馬鹿だよ。よっぽど他人を馬鹿だと思っているんだろうな」

「ああゆづのを猿の浅知恵、と言う。へへへへっ…」

そこへ雄の方が、おはよう、おはようと言いながら入室。

・おはよう、じゃねえだろう。毎日、毎日、遅刻しやがって・
「ハマサキさあゝん、おはようございまあす」
「おうおう、早速雌猿がケツを振っているよ」
「おお、嫌だ、嫌だ。俺はタバコを吸ってくるよ」
と言って、山田の隣の窓際“鈴木”が席を外す。
“ハマサキさあゝん”の部下たちも太鼓持を除いて消えていく。
これから恒例となった二人の朝の儀式が延々と続く、それを見越し
ての行動だ。
中には耳栓を取り出す者もいる。

3

「カズミちゃゝん、これ、美味しいよ。遠回りして君のために買ったんだ」
「うわあゝい、わたしであゝい好き。ありがとう……」
ウルウルと感動で女の目が潤む。
「カズミちゃんが喜んでくれるのが、一番嬉しいなあゝ。けえけけけっ！」
・その馬鹿笑い、なんとかなんねえのかよ。どんなに気取ってみたってエテ公はエテ公、お里が知れるってもんだ・
「ハマサキさあゝん、とってもおいちい。うつふうゝん」
・いつまでも遣ってる・
毎日毎日、朝に、昼に、番に、こんな遣り取りを見せ付けられるのだから、堪ったものではない。
「まだ遣っているのか、チンパンジーの番は……」
鈴木が戻って来て苦虫を噛み潰したような顔をした。
「ったく、エテ公の服は昨日と同じじゃねえか」
「おっ、そういわれてみれば。毎朝一緒に来て、途中で別になるらしい。目撃者多数」
「馬鹿だねえ……でも、住まいはまったく方向が違っだろう」

「女がエテ公の家の近くへ越したらしいよ」

「ふーん、もう逃げられねえナ。金もかかるだろう……」

「出張で日当を稼いでいるだろう。それと保険か、ケツが痛てえの、腰が痛てえの」

「まるで詐欺師じゃねえか」

「それにしてもこの男の浮気と遅刻、役員連中は知らねえのかな？」

「そんなはずないよ。関連会社の連中も知ってるから、耳に入らないわけはない。実際、俺も。。。の人事部長から聞いたもの」

「そうか、保身にキュウキュウで事なかれ主義の経営陣らしいな」

「・・・どうやら役員連中はこのエテ公がいないと業務が回らないと思っ
っているらしい・・・」

「傍若無人なエテ公の振る舞いを、わかっていながらにも言えない経営陣か……」

「先輩、社長に言つてやつてくださいよ」

「ば、馬鹿、俺にはローンが残っている。だったら山田、オマエが
言えよ」

「・・・おお、言っただけ……、それでも俺は、明日をも知れない窓際
族。このエテ公が会社の実務を牛耳っていることはどうしようもな
い事実……。俺だって、ガツンと言いてえよ。言いてえけど、浮か
んでくるのはかあちゃんの怒った顔。ああ、情けなや、情けなや……」

……

上司も部下も他部署の連中も、パートのおばさんや契約社員でさえ
も、この馬鹿力アップルの破綻を待ち望んでいる。

その内に、浮気がエテ公の妻に知られ、馬鹿女は妊娠して、死ぬの、
生きるのと大騒ぎ、三面記事が社内を駆け巡る。

社内の反エテ公派は大喜び、つまり馬鹿力アップを除いて、全員が大
喜びって寸法だあナ。

そんなことを考えながら、影でこそ悪口三昧……、ああ、情け
なや、情けなや。

御
仕
舞

第二十二話 普通に座れない高校生

1

『フォンニヤ、ギャーッ！ イデーッ！ な、ななな、なにふんだこのヒャローッ！』

突然怒声が叫び声あがった。

『コラアーツ！ オヤジイ、とぼけてンじゃねえよ』

それは、柏駅に停車中の午後六時四十五分発大宮行き、東武野田線の列車内での出来事だ。

窓際サラリーマンの山田一郎はほとんど毎日この列車を利用している。

五時十五分の終業ベルとともに会社を出ると、六時四十五分前後には上野駅に到着する。

五十四分発の常磐線にも乗れるが、山田は六時二分発の列車の前から三両目に乗る。

六時二十八分に柏駅に到着する。

六時三十六分発にも余裕を持って乗れるが、山田は既に停車中の四十五分発を利用するのが常だ。

その列車内で事件は起きた。

山田は一番後ろの車両に乗って、次の車両に移動する。

いつもはガラガラなのにその日に限って、車両の真ん中辺りの椅子に見るからに柄の悪い餓鬼（高校生）が五匹足を投げ出して座っていた。

両側から足を投げ出しているので通路が極端に狭められている。

山田がその隙間を通り抜けようとすると、鋭い視線で下から睨めるように見あげた。

気が弱く争いごとの嫌いな山田は、普段なら一旦降りて次の車両へと移動するが、その日はなぜか渦中の栗に手を伸ばした。

一番手前の最も凶暴そうな雰囲気をした糞餓鬼の足の甲を、手加減ではなく、足加減することなく思いつ切り踏みつけていた。

『フォンニヤ、ギャーッ！ イデーッ！ な、ななな、なにふんだこのヒャローッ！』

まさか裏寂れた中年男が強面の自分の足を踏むはずはないと油断していた所為か、痛みと愕きで奇妙な叫び声をあげた。

どうやらその餓鬼がボス猿らしく、正面に座っている一匹は直ぐに状況を把握した。

ヤバッ…、山田は遣ってしまつて事の重大さに気がついた。

情けないことだが足がガクガクと震え出す。

― 後悔先に立たず。

― 覆水盆に返らず。

― 馬子にも衣装、……は関係ないか。

「あつ、ご、ごめん、なさい……」

と、消え入りそうな声で詫びた。

『喧しいッ！』

と叫んでボス猿が勢いよく立ち上がると、同時に他の四匹も立ち上がった。

ボス猿は山田を威嚇するように、胸を反らして詰め寄る。

他の四匹も山田を取り囲む。

絶体絶命……

2

『クラァーッ！ テメエ、わざと踏んだらう』

「むっ……」

息が臭い、思わず山田は顔を背ける。

『な、なんだあテメエ…、舐めてるナ。この野郎……』

・・デカイなこの餓鬼、まるでゴリラだ・・

けて山田も小さい方ではないが、取り囲んだ五人は全員百八十セ

ンチを超えている。

特にボス猿は飛びぬけて長身だった。

『なんだと、なにブツブツ言ってるやがる』

・グアーツ、窒息しそうだ。耐え切れない・

山田は息を止めた。

『おい、オヤジ、なんとか言えよ』

後ろの猿がドンと身体をぶつけた。

・ヤ、ヤバイ……、誰か、知り合いでも来ないかなあ……。誰か、

警察へ通報してくれねえかなあ……

「ご、ごめんなさい」

『あんだあ、こら、ごめんなさいだあ。オヤジ、テメエで喧嘩売っておいて、ごめんなさいだあ』

・このボス猿のキンタマを蹴り上げ、後ろの猿には肘打ち、左側の猿には右ストレート、そして怯んだ隙について逃げて、駅員室へ逃げ込む・

・いや、待て待て、ボス猿に頭突きた。そして後ろの男に……。山田はシミュレーションを繰り返す。

『ターちゃん、ここじゃ拙い。みんな見てるぞ』

右側の子分猿が囁く。

ターちゃんと呼ばれたボス猿が周りを見回した。

『うんだ、便所へ連れ込むべえ』

左側の熊面が呟いた。

・ますます、ヤバイ・

恐怖が全身を包む、山田は便所に弱いのだ。

昔から“かつあげ”は便所と決まっている。

小学校、中学、高校と“かつあげ”をされ続けてきた山田にとって、“便所”イコール“かつあげ”イコール“怖い”となる。

― 皆さんも知っておいてネ。便所はウンコや小便をする安らぎの場所でも、況してやオナニーをする快樂の場所だけではない、ということをネ……。

「ンでもキー坊、便所はどこにあんだよ？」

「……………」

「サトル、オメエ知ってつか？」

「俺、俺アも知らんねえ。外で便所使ったことねえもん」

「私、知っています。その階段をのぼって、改札の脇通って、もう一度階段を降りて、ホームの一番端っここです」

山田が答えた。

「ん？ ウルセエー、テメエに訊いてねえよ」

隣の番線から六時三十六分発の列車が出発した。

階段を走り降りてきた乗客たちは、既に出発してしまった列車を見送りチエツと舌打ちをして四十五分発にドヤドヤと乗り込んできた。山田を取り囲むように立っている異常な雰囲気、怪訝な表情を浮かべる。

すると五匹の猿どもは徐々に輪を解き、ボス猿が車両から降りると四人も後に随った。

「…ああ、よかった。……、ん？ ヤバイ…」

と、安堵の溜息をつく、ボス猿が再び乗り込んできた。

ドアに立った山田の元に近づくと、

「覚えていろよ。今度遇ったら、ただじゃおかねえからナ」

と、耳元で囁いて離れようとしたその瞬間、

「うっ、臭っせえ。偶には歯を磨けよ」

と声をかけると、

「うっ……」

と呻いて、ボス猿は慌てて口を押さえた。

「勝った。こんど遇っても奴が俺のところへ来ることはない」

山田はそう確信した。

「もしもし、すみません。なぜそう言い切れるのですか？」

「ん？ どなた……」

「私？ 私は山田一郎さんのファンです」

「そうですか、山田一郎さんの、数少ないファンの方。珍しい方ですね」

「教えてください。このままでは眠れなくなります」

「考え落ち狙いなのですが……。わかりました、山田のファンという奇特な方ですから、特別にお教えしましょう」

「ありがとうございます」

「山田の強烈なひと言でボス猿は、彼女ができなかった理由、友達が自分と面と向かって話さない理由や時々顔を背ける理由を知ることになります。すると

他人と話すのが怖くなります。場合によっては、口臭恐怖症に陥って結婚できなくなります」

「なるほど、そうゆうことですか。でも、百パーセントそうなることは限りませんネ」

「ええ、もちろんです。中には、まったく気にしない方もいらつしやいます」

「するとどうなりますか？」

「そのときは出遭わないことを祈ります。ペンは剣よりも強し、されどペンは使い方を間違えると猛毒となります」

―― 気をつけよう、暗い夜道と心無いひと言……

御仕舞

第二十三話 恐れ知らずの携帯馬鹿

1

・あ、早く降りろよ、モタモタしやがって……

山手線のホームへ降りる階段をノタノタと歩く若いサラリーマン、

・電車が来ちゃうじゃねえか、この野郎……

気は焦るが混雑で追い越せない、山田一郎はイライラしながら後をついて行く。

とそのとき、

『テメエ、死にてえのかあーッ!』

と、山田の背後から怒声が響き渡った。

その声に、下りの人たちは一斉には振り返り、上りの人たちは一斉に顔をあげた。

階段の上の真ん中に一人の男が敢然と立ち塞がっている。

その怒りは前の女性に向けられているようだ。

怒鳴られた女性は、なんで自分が怒鳴られるのか判り兼ねている様子だ。

怪訝な表情で男を見上げている。

『オメエだけじゃねえ。おまえも、おまえも、そのテメエもダ』
振り返った人々は“なんだ、このアホは。なにを怒っているんだ”

と、一瞬怪訝な表情を浮かべるが、直ぐに無視して先を急ぐ、通勤時間帯は皆忙しい。

・ふーう、間に合った・

山田はいつもの電車に乗れて安堵の溜息を漏らした。

時刻は午前六時半、八時半の始業まではまだ二時間あるので、一台や二台乗り遅れたとしても遅刻の心配はまったくくない。

それでも不思議なもので、いつもの電車に乗り遅れるというのは嫌なものだ。

「ねえ、そうでしょう、皆さん？ …… えっ、うちの会社には、ええ、部長のくせにい、はい、毎日平気で遅刻する奴がいる、ですって？」
「そんなのはカスよ、どうせ電車が遅れてとか、JRさんの所為にするンでしょう。」
「うちの会社にも同じのがいるわ。」
「行き遅れの契約社員と浮気中のチンパンジーみたいな顔した奴が…。」
「…。」
「そうそう、興味のある方は特別編を読んでね。」

2

ええと、どこまで話したかしら……。
「いつもの電車に乗れてホッとしたところ、ですって？」
「そうだったかしら……、そのへチャムクレの君、一応礼を言っておくわ。」

「ありがとう。えっ、心がこもってない、ですって？」
「当たり前じゃないの。」

「まったく、頭にくるよな。携帯を見ながらノタノタ歩きやがって

……。」

「ヤバッ…、さっきの男が後ろにいる。」

「山田は新聞を広げた。」

「なあ、あんたもそう思うだろう？」

「知らない振り、気がつかない振り、山田は一心不乱に新聞を読んでいる振りをした。」

「しかし、頭にはなんにも入ってこない。」

「よお、どう思うよ？」

「無視、無視、俺に話しかけているンじゃない、きつと他の奴に話しているんだ。」

「…ああ、まだ鷺谷だよ、降りちゃおうかな…」

『なあ……』

と言う問いと同時に山田の肩に軽い衝撃が伝わった。
違う、違う、誰かが俺の肩に不可抗力で触れたただけだ、気にするな、許してやるよ。

『おい、あんた』

ドンともう一度、今度はさっきよりも少し強い衝撃が肩に走った。

・あちゃー……俺かよ……

仕方なしに山田は振り返って男の顔を見た。

夜、人通りの耐えた農道で会いたくない、おっかない顔だった。

『はい、ちよつとごめんよ』

と声をかけて、山田と隣の男とのわずかな隙間に、そのおっかない顔の男が無理やり身体を割り入れた。

・むつ、参ったなあ。脇へ来ちゃった・

隣の男はムツとした表情でおっかない顔の男を睨んだが、直ぐに表情を緩めて身体を脇へずらした。

『おう、すまねえな、にいちやん。なあ、あん、どう思うよ?』

おっかない顔の男が山田に話しかけてきた。

もう無視できない。

「はあ、なにが、でしょう?」

と応じた。

『なにがってよお、あんた。俺が怒鳴ったのを見ていただろう?』

「あつ、ええ、まあ、でも……」

『だろう。俺、あんたの顔みたもの。あんた好い男だからよお。あんな、もてるだろう。くくくつ……』

と笑って、肩で肩を小突いた。

「いや、それほどでも……」

『なにマジに取ってるンだよ。お世辞だよ』

と耳元で囁いて、もう一度、くくくつ……と笑った。

『ほれ、そこにいる馬鹿アンちゃん、まだ遣ってるだろう』

男がしゃくった顎の先に、携帯電話の画面を夢中で見入っている若い男がいる。

『ほれ、あつちでも、こつちでも……。おうおう、あんなオヤジまで。まったく、世も末だなあ。情けねえ』

おっかない顔の男が吐き捨てるように言った。

聞こえよがしに言っても誰も振り向かない、それだけ熱中しているのだろう。

『昔、薪を背負い歩きながら勉強した偉人がいたが、あれ、誰だっけ？』

「二宮尊徳ですか」

『そうそう、その尊徳さんの時代と今とじゃ交通事情が違い過ぎるあ。おっかなくなえのかなあ、あいつら……。』

“おっかない”という言葉聞いて、山田はその男に少しだけ親しみを覚えた。

「おっかない？」

『あれ、オメエも野田の方か。だってよお、携帯の画面を視ながら歩いていたら、誰かにぶつかることもあるだろうし、それに階段から落っこつたり、線路に落っこちることだって、ねえとはゆえねえだろう』

・・なるほど、確かにそうだ・・

『それとよお、“おっかなくなえか”ってゆうのは、つまりナンだほれ、ああやって知らん振りしてとぼけている奴ら、テメエと同じ種類の他人に対する思い遣りの欠片もねえ連中がだよ、テメエの周りに一杯いると思ったら、おっかなくなつて携帯なんか熱中してらんねえだろうが……。俺なんて毎日ビクビクしてらあ』

山田は上海に駐在していたことがある。

そのときに身に沁みて感じたのは、“自分の身は自分で守る”というものだった。

その点、日本人は甘え過ぎている。

彼の国では、後ろにも目がないと生きていけない。

『あのなあ、ほんと言うと、そいつらが死のうが怪我をしようが、俺は構わねえよ。でもまあ、そいつらの所為で、年寄りとか子供とかの弱い人間が巻き添えを喰う可能性があるだろう。それが俺には許せねえのサ』

・この男、そこまで考えての行動だったのか・

山田は愕然とした。

それと同時に、自分のことだけを考えて不満を漏らしていた己が、とても情けない人間に思えた。

最近、通勤途上で線路に突き落とされ死亡した、殴られ大怪我をした、といった殺伐としたニュースが後を絶たない。

仕事が上手くいかないでイライラしていた、親に怒られて、或いは先生に注意されて頭にきた、といった身勝手な理由で簡単に人を殺す輩がいる。

「あんたの言う通りだ」

山田はそこのおっかない顔の男の手を握り締めた。

『おいおい、俺にはその趣味はねえよ。くくく…、あんたはわかってくれたようだナ。だから俺はこれからも怒鳴り続けるよ』

一週間後……、

山田は朝刊の小さな記事が目に残った。

住所不定、氏名不詳、推定年齢五十歳の男性が日暮里駅構内で大学生に刺され死亡した。

近くにいた者の話によると、二人は大きな声で言い合いをしていた。尚、警察は喧嘩が原因と推測、

逃げた若い男の行方を追っているので、目撃者は名乗り出て欲しい、と記されていた。

山田はその殺された男があのおっかない顔をした男だと確信したが、係わりを恐れて名乗り出ることはしなかった。

ただ、しばらくの間、事件を知らせる立て看板の前を通るとき、山田は心の中で手を合わせ男の冥福を祈った。

半年後……、

『テメエ、死にてえのかぁーッ!』

とゆう背後の怒声に、山田はアッと声をあげて振り返った。

御仕舞

第二十四話 野菜泥棒は重大犯罪だ

1

五月下旬の午前四時半は、まだほんのりと薄暗い……。

いつものように山田が朝刊を取りに表へ出ると、家の隣の梅林になにやら怪しい人影がある。

・ ・ ・ ン？ 野良犬……、否、それにしては大きい……
ジツと目を凝らし、梅林を透かし見る。

三十年の年月を経た梅は鬱蒼と繁り、木の下は薄暗く、見通しが利かない。

・ ・ ・ 人だ。梅泥棒だ・ ・

その人影は俯いて一心不乱に梅の実を拾っている。

バン、バン、バンと、手に持った朝刊を左の掌に叩きつけ、山田は黒い影に向かって歩み出す。

怒りと恐怖が入り混じり、心臓がバクバクし始めた。

窓際サラリーマンの山田一郎は、気が小さく争いごとを好まない性格から大過なく過ごしてきた。

しかし泥棒を見逃すわけにはいかない、正義はこちらにあるのだ。

怖い、泥棒に向かって動き出した足が止まらない。

逃げる、逃げてくれ、とつと失せると、心の中で叫んだが、身体を起こした黒い影は、あたかもこちらの動きを窺うようにジツと見ている。

・ ・ ・ 糞ッ、誰か知り合いが来ないものか。武器を取りにもどううか・

山田は後悔していた。

・ ・ ・ 怒鳴って追い飛ばせばよかった。図々しい奴だ、とつと失せろ・ ・

腹の突き出た狸の置物のようなシルエットが、山田とは反対の方向

へノソリ、ノソリと動き出した。

・・よかった・・

追いつかないように歩を緩める。

狸ではなくて、その泥棒は手にポリ袋を提げている。

塀の陰から車の尻が見える、どうやらその泥棒狸の車らしい。

やがてエンジン音がして走り去って行った。

距離があつたので、残念ながらナンバを読み取ることができなかった。

しかしその不細工なシルエットはしっかりと瞼に焼き付けた。

恐らくどこで遭つてもわかるだろう。

普通泥棒しているところを目撃されれば、盗んだ物は置いて逃げるものだが、その泥棒狸は堂々と持ち去った。

2

その数日後、山田は午後七時ごろ帰宅した。

この時期はかなり日が延びているので、七時とは言ってもまだかなり遠くまで見通せる。

家の角を曲がると梅林の先の方に犬を連れた女が立っている。

・・散歩か、その辺に糞をさせるなよ。もつとも好い女なら許しちゃうけど、へへへっ……

山田の家は周りが畑と梅林なので、普段犬の糞に悩まされていた。

最近の飼い主はマナーがなっていない。

うっかりすると門の前に犬の糞を残して行く輩もいる。

こういった連中は犬を飼う資格はない。

もつとも犬の糞ばかりでなく、空き缶やタバコの空き箱はまだかわいい方で、ポリ袋に詰めた大量のゴミを梅林へ投げ込んでいく輩もいる。

中には変な奴もいて、毎日決まった場所へ洩をかんたチリ紙を捨てていく。

これなどは犬の小便と同じで、縄張りの示威意向だろうか。

こいつの顔は一度目撃していて、機が弱そうな顔をしていたので、今度は目撃したら現行犯でトツ捕まえてやるつもりだ。

山田は気の小さい男で争いは嫌いだが、自分より弱い者には強い。但し、強いが弱いかは見た目ではわからない、ときどき判断を誤り窮地に陥ることがある。

まあ、どこにでもいる典型的な小市民である。

女はその場所から動かない。

・あつ、やっぱり犬に糞をさせているんだ。まったく、しょうがねえなあ。やれやれ、注意しておくか・

山田が女の方に向かって歩き始めると、

『誰か来たよ』

女が梅の林に向かって囁きかけた。

・ん？・

女の視線の先へ目をやると、ジャージ姿の男が木の陰に隠れた。

・あつ、また泥棒だ・

先日の糞狸の件もあったので、山田の頭にカツと血がのぼった。

「こらあーッ！」

と怒鳴って駆け出すと、

『来たよ、来たよ』

と叫んで女が逃げ出した。

男は手に持ったポリ袋を投げ出して、梅林を女とは反対の方向へ逃げて行く。

「こらあーッ！」

ともう一度追い打ちをかけた。

山田も山田の家族もけしてケチなのではない。

梅が欲しいと言ってくれば、“どうぞ、どうぞ、好きなだけお取りください”と応じるのが常だ。

『あら、山田さんのご主人、お散歩ですか』

日曜日に愛犬の散歩をしていると隣の奥さんが声をかけてきた。隣の家は専業農家だ。

『今年は梅がずいぶん豊作ですね』

「どうぞ、よかつたら持つて行つてください。但し、自分で取つてください。ははははっ……」

それで二度あつた泥棒事件のことを話すと、

『家の畑からもよく盗まれますよ。野菜は倉庫へ仕舞うわけにもいかないし、鍵も掛けられないでしょう』

「そうですね。野菜もお金も同じナンですけどねえ。野菜や果物を盗ることを軽く考えているようですね」

『死んだお祖父さんが、“百姓が丹精込めた野菜を盗むのは、家の中からお金を盗み出す泥棒よりも罪が重い”と言っていました』

「ほんとだよねえ、ひと言声をかけてくれれば、少しぐらいあげるのに……」

『ニュースで食品偽装とか、中国人は悪い悪いと言つてるけど、中国人を笑えないわよねえ』

「ほんとうに情けない国民に成り下がったものです。今度野菜泥棒を見つけたら、警察へ突き出してやりましょう」

『でもねえ、後が怖いから……。逆恨みされて、家に火でもつけられたら堪りませんもの……』

「そうか、確かに変な奴が増えましたからね。困ったものだ」

広い農地を先祖から引きついた者を妬む気持ちもわからないではないが、濡れ手で粟の跡継ぎはほんの一握りの話で、その維持にキウウキウウとしているのが現状だ。

調整区域や緑地を持った跡継ぎは、サラリーマンをしながら税金を払い、土日は“草刈り”や“クネ刈り”に翻弄され休む間もないのが現状だ。

どうか皆さん、畑にある野菜は自然に生えているものではありません

ん。

もし、おいしそうだなと思ったら、“少し譲っていただけませんか”と農家の方に声をかけてみてください。

端からただで貰おうというさもしい考えは捨ててください。

なぜならば、野菜にはお金はもちろんですが、たつぷりと手間・暇がかかっているのですから……。

できればお友達になるといいですよ。

中には気難しい方もいらっしやいますが、大概は気さくで優しい方がほとんどです。

ぜひ、気楽に声をかけてみてください。

きつとお友達になれますよ。

御仕舞

第二十五話 濡れた傘

1

十月に入ってよく雨が降る。

台風も十七、十八号と日本列島に接近し秋雨前線を刺激している。十八号は列島を縦断する恐れがあると、天気予報で警告を発している。

昨日の夕方、窓際サラリーマンの山田一郎は上野駅の常磐快速、六時二分発に乗って出発を待っていた。

ほどなく隣ホームの五時五十四分発の列車が、発車のベルが終わるのを待ってゆっくりと走り出した。

それとともにガラガラだった席がドンドン埋まり出す。

山田が乗るのは進行方向から数えて四両目、そしてほぼ真ん中辺りの座席の左端に座る。

座席は二、三、三、二の十人掛け、その左端の二人掛け席に山田は座る。

なぜか……？

理由を本人に訊いてみました。

「内緒だよ。むふふふっ…、隣に女性が座る確率が物凄く高いのです。それは経験値から導き出したものです。でも、内緒だよ」

だそうですが、読者の皆さん、くれぐれもその席を取らないでください。

“ 具体的な席の場所は書かない ” と言うのが作者と山田氏との約束事だったのですが、それでは読者の皆さんが消化不良に陥ると思い、作者の独断で書いてしまいました。

・ 山田一郎さん、ごめんね、ごめんねえー・

その日も山田の思惑通り、隣の席に若い女性が座った。

美人だ、まだ二十歳前だろう。

しかもミニスカート……、だからどうしたと言われても困るが、チ
ラリと横目で確認して、むふふふっ…と微笑んだ。
周りの野郎どもの妬みの視線に優越感を感じながら、山田は微笑み
噛み殺し、単行本に目を落し、

「勝った」

と、小さく呟く。

こうして幸せな三十分の旅が始まるはず、だった。

しかし世の中はうまく出来ていて、幸せの数だけ不幸の数がある。

2

間もなく、隣の女性はウトウトし始めた。
定刻になって電車はゆったりと動きだし、徐々にスピードを上げて
いく。

「うっ…」

すると隣の女性の濡れた傘が山田の右膝の辺りに軽く触れが、ビク
ツと動いて直ぐに傘を元の位置へ戻す。

「いいの、いいのよ。むふふふっ…」

まだ余裕だ。

日暮里駅のホームへ滑り込んだとき、電車はガタリと揺れた。

その拍子に今度はベタツと傘が膝にくっ付いた。

山田が軽く膝で押し戻すと、

「あっ、すみません」

と恥ずかしそうに詫びて、再び傘を自分の膝の間に戻した。

「あっ、大丈夫です」

山田は微笑み返す。

ドカドカドカと乗客が乗り込んできて、山田の前に女子高生が立っ
た。

右手に鞆とビジョビジョに濡れた傘、左手に大きなバックも持って
いる。

その所為で離れて立つても、濡れた傘が山田の足の間に入ってきた。だが、本人は気がついていない。

「う、うん」

と声を漏らし、膝に乗せた鞆で傘を押し返す。

気がついた女子高生は慌てて身体ごと傘を引こうとするが、車内が混んでいるので後ろへ下がれない。

ビジョビジョの傘はズボンの布地を通し、向こう脛まで不快感を送り込む。

山田は遠慮気に傘を押し返すが、女子高生は鞆を身体の前に回している。同じ右手で握られた傘は鞆と四十五度の角度を保ったまま引くに引けない。

・北千住まで行けば空くだろう・
と考え山田は抵抗を諦めた。

思惑通り、その女子高生はペコリと頭を下げ、北千住駅で降りて行った。

3

ホツとしたのも束の間、降りた乗客以上の人数が乗り込んできた。前に立つた二十代後半と思しき女性が、後ろから押されて山田の膝頭にギシギシと押し付けられてきた。

まるで山田との接触を嫌うかのように、二人の間にハンドバックと濡れた傘を挟み込んでいる。

膝頭がビショビショだ。

山田が膝に乗せた鞆で押し返すと、

『混んでいるんだから、しょうがないでしょ！』

と叫んで山田を睨みつけた。

その声に隣でウトウトしていた女性が目を覚ます。

山田は前の女性の剣幕に、黙って目を伏せるしかなかった。

こんな場合、うっかり反論でもしようものなら、殺気だった女性に

殺され兼ねない、は大袈裟にしても、かなりの痛手を蒙ることを経験則で知っている。

しかも周りの乗客は皆、若い女性の味方に付くものだ。

或いはこの場合、立っている者は我が身と比べ、座っている者に敵愾心を持つものだ。

しかも立っている者は直ぐに不幸共同体として協定を結ぶが、座っている者が座っている者同士の誼で味方になってくれると考えたら大間違いだ。

狸寝入りを決め込むこと必定である。

『はい、もしもし、私、今……、今、電車の中。まったく頭にきちゃうわ。変なオヤジがいて、最低よ』

携帯の呼び出し音に、思わず顔をあげた山田の顔を女が睨みつけた。『ええっ、そうなのぉ……マサミがあ……。あっははははっ……、笑えるわねえ。えっ、いいわよ。今、ええと、もう直ぐ松戸……』

辺りに憚ることなく、女は大声で会話を始めた。

すると目を覚ました隣の女性が、

『あんだ、うるさいわよ。ここは電車の中でしょう』

と注意をした。

えっ、と愕いた表情を浮べ、

『なんか、文句言ってる女がいるの。えっ、あっははははっ……、そうもいかないわよ。馬ッ鹿みたい』

『うるさいと言っているでしょう。いい加減にしなさい』

『うるさいわね。文句があるなら降りなさいよ』

前の女がメンチを切った。

『なに言ってるの、そんなの常識でしょ。皆に迷惑してるでしょう。そんなの小学生でもわかるでしょ』

二人がジッと睨み合っている。

まるで火花が散るような緊迫感に、山田はつくづく喧嘩をしなくて良かったと思った。

・・・日本の女も怖いなあ・・・

と、山田は心の中で呟いていた。

世の中に幸せの数だけ不幸の数があるのはわかっているが、だから
と言って、なんにも、そんなに慌てて不幸が来なくてもいいのね
え…。

御仕舞

第二十六話 五輪狂想曲

1

・・やはり負けたか……・・

早朝の四時半、朝日新聞目を通し、山田一郎は呟いた。

誰がみてもタイミングが悪い。

もし立候補するにしても、戦略的には二〇二〇年だろうが、ええ……。

それよりも今更オリンピックを東京でやる意味がありますか、ってんだ。

まあ、負けるべくして負けたということだ。

どだい都知事自身の保身のために目指したオリンピックじゃないか。〔なにになに、開催地決定には、政治的な意図が働いていると感じた、だと？〕

・・ははははっ……誰がそんな負け惜しみを……？ オバマ、さん……、ん？ な、なにつ、都知事だあ！？・・

『バ、バツカヤローツ！』

と叫んで、山田は慌てて口を押さえた。

“シイ、シイー……、まだ妻が寝ている”と、自分に言い聞かせる。

――触らぬ神に祟りなし。

毎朝山田は午前四時に目を覚ます。

目覚し時計は四時十五分にセットしているが、余程疲れているときを除いて、四時には目が醒める。

隣に寝ている妻に対する配慮、ではない、と本人は思っているが、深層心理にそのことがあるのは間違いない。

そしてセットを解除して、静かに、静かに布団から抜け出す。

けて妻が怖いからではない、と本人は思っているが、深層心理にそのことがあるのは間違いない。

山田は起き出すと、まず湯沸しポットをセットする。

それから髭剃り、洗面とこなし、神棚に合掌し、仏壇に線香を供え、昨日の家族の無事を感謝し、今日の平穩を唱える。

その後表に出て、愛犬の労を執り、朝刊を取る。

そして昨日身体に取り込んだ物を自然界へ流し、インスタントコーヒーの顆粒をマイカップにひと匙、お湯をトクトクトクと注ぎ込む。至福のときだ。

―― 実に安あがりナ男である。

「えっ、朝食はどうする、ですって？」

シッ、あまり大きな声を出さないでネ。

ええと、長い間に馴らされて、否、……しゅ、習慣で、会社の近くのCVSでお握りを買います。

「えっ、なぜ奥さんに作らせないのか、ですって？」

ええー、そ、そんな大それた、否、朝は食欲がないので、っ、つまり、ばくが作らなくともいいと……。

「だいたい家庭の事情はわかった、ですって」

ああよかった……。

2

さて、話を戻すとするか……。

“恥の上塗り、日本の恥だ”と、この都知事の発言で日本国民の七割五分五厘の人々が思ったはずだ。

招致活動の資金百五十億円の使い道を開示するだと、当たり前だ、もし東京が開催地に選ばれたらウヤムヤにするつもりだったんだろ
う。

都民の皆さん厳しく追及してください。

IOC委員を招いての派手な歓待、接待、遣らなかったとは言わせねえぞ。

それを棚に上げて、政治的意図を感じるだと、

『ふざけるな、バツカヤローッ!』

最初に捕まった奴が共犯者である仲間を売るようなモンじゃねえか……。

『男なら黙って墓場まで持っていけッ!』

と言った食品会社の社長が、大阪方面にいたような気がするナ。

だいたい他の候補都市も国家元首を派遣したりして、近代オリンピックの父、クーベルタン男爵の精神に反するンじゃねえの。

米国もこれほどの馬鹿野郎だとは思わなかった。

一昔前なら米国大統領が出てくれば、否応もなく米国に決まっていたはずだ。

でもそうはならず、最初に選に漏れたのが米国……。

図らずも、米国は今の置かれた立場を曝け出してしまったわけだ。

ＩＯＣ委員の脱米国の意思が強烈に感じられて良かった。

ブラジルは良い選択だったと思う。

今後、接待合戦や政治家の介入は禁止すべきだ。

二〇二〇年の招致に中国の胡錦濤さんが出てきたらどうする。

まあ、今回のことで出てくることはないでしょうけれど、オバマさんは大恥をかいたわけだからネ。

大統領を引っ張り出した人、そのときは“勝った”と思ったでしょう。

・・・でも残念でした、“お気の毒”、としか言いようがありませんナ・・・

3

―― どう考えてもおかしいよネ、変だよネ。

日本の国会議員みたいに、決定権のある一票を持ったＩＯＣ委員の資産を公開すべきだヨ。

それと各国でどんな接待を受けたか、一度調べてみるべきだ。

クーベルタン男爵が墓の中で泣いていると思う、いったい誰がこん

なに精神を歪めてしまったんだ、ってネ。

石原さんもそれを言うべきだった。

他の国と同様に、“委員に金を渡した、女を世話した、こんな土産を贈った”と言えば、説得力がある。

もちろん、自分たちが批判を受けることも覚悟の上でネ。

ところで都知事、どこかの……、神奈川の……、あつ、言っちゃった。

その知事さんみたいに途中で投げ出さないで、ちゃんと責任の所在を明らかにしてから辞めてくださいネ・・

神奈川県民の皆さん、“横浜博？”の総括とともに敵前逃亡した知事と副知事の責任をしっかりと追及してください。

- ・ ・ ・くれぐれも遣り得、逃げ得は許さないように、お願いしますヨ・

御仕舞

第二十七話 網棚から鞆が消えた

1

常磐線柏駅三番線ホーム、午前六時五分発の上野行列車、後から三両目の一番前、進行方向に向かって右側のドア、そこが窓際サラリーマン山田一郎の指定席だ。

山田は他人と争ってまで座るつもりはない、また、優先席へは全席空いていたとしてもけっして座らない。

年齢は定年間際の五十八歳数ヶ月、肉体的に一時間近く立つての通勤は、正直辛いこともある。

しかし、現役のうちには余程空いていない限りは座らない、と心に決めている。

それが彼の矜持だった。

数ヶ月前までは反対側のドアの前に立った。

しかし一ヶ月ほど前、松戸で乗り込んできた男に、思いつ切り足を踏まれ上、苦情を言ったら“邪魔だ”と胸倉を掴まれ凄まれた。

山田は平和主義者で争いごとを好まない、のではなく、実は小心者なのだ。

喧嘩は、しない、近づかない、かわらない、を座右の銘としている。

但し、喧嘩はしないには、“強い者とは”との断り書きが付く。

最近は読書、とりわけ浅田某の小説に嵌り、二日に一冊のペースで読み飛ばしている。

山田は一旦嵌ると、その作者の全作品を読破しないと気がすまない。既に鬼籍に入った小説家なら全集という手もあるが、現役の小説家ではそれもままならない。

古本は手に取る気がないので、そのための出費は馬鹿にならない。浅田某の小説は読み始めるとグイグイ引き込まれ、止まらなくなっ

てしまう。

柏駅から電車に乗って本を開き、気が付くと上野駅ということが多い、本来は日暮里駅で山手線に乗り換えるのだが……。行き先が終点なら問題はないが、そうでないとかかなり乗り過ごすことになる。

はて、なんの話だったかな……？

2

「浅田某の単行本、誰か買ってくれんかね」

「なにっ、そうゆう話ではないだろう、だと」

「あ、そうじゃ、そうじゃ、あのことを話そうとしていたのだ」

「なにっ、あのことじゃわからない、だって」

「そりゃそうじゃ。それにしても気の短いお方じゃナ、そう焦るではない、今話してやる。それは、忘れもしない十月一日のことだった。ん？ 十月一日と言えば……」

「十月一日がどうした、とナ」

「うん、十月一日と言えば……」

「十月一日と言えば、どうした？」

「くくくくっ…、九月三十日の次の日だ。痛いッ！」

「なに、帰る、だと」

「まあ待ちなさい。十月一日と言えば……、へへへへっ…十月二日の前の日、うっ、痛ってえーッ！」

山田はその日も浅田某の小説に熱中していました。

予感、というのでしょうか……、フツと気が付くと、電車は三河島駅を発したところです。

開いたページにしおりを挟み、パタリと本を閉じました。

そして車窓から見慣れた風景に目をやりながら、右手を網棚に伸ばす。

いつもの手順どおりの行動だ。

しかし手に触れたのは、上等な皮革のしなやかな手触りではなく、ステンレス独特の冷たい反応だった。

「うん？」

手を伸ばし金網の奥を探りましたが、皮の温もりは手に触れません。

「あれ？」

今度は顔を上げて、目で探りました。

「えッ！ な、ない、私の鞆がない」

山田の頭は一瞬で真っ白になりました。

中にはパスポート、現金（日本円、人民元）、銀行印などの諸々が入っている。

「待てよ、今日は最初反対側のドアに立って、こちらへ移った……」と期待を込めて反対側の網棚を見たが、やはりありません。

山田はキョロキョロと網棚を見回しましたが大切な鞆は見当たりません。

「どうしよう、どうしよう……、警察へ、否、その前に駅員に……、いやいや会社へ……、家に……、あつ、携帯電話も中だ。ええい、糞ッ！ さあ、連絡も取れない、どうする、どうする」

これからやらなければならぬ諸々の面倒な手続きが、山田の頭の中で錯綜し、混乱しました。

世界中の不幸を独りで背負わされたような、一筋の光明も見いだせない絶望感が生み出す無気力、焦燥が生み出す脱力感が交互に襲い掛かってきた。

3

山田は悲しみに満ちた目で、座席に座っている人々を見回した。と、一人の男と目が合いました。

年のころは山田と同じくらいでしょうか、疲れたサラリーマン風の男です。

しかしその男の目に精気が宿っています。

「ん？」

男はしきりに視線を後方のドアの方へ送ります、それに釣られた山田がトロンとした目をそちらに向けました。

ドアのところにはポロシャツにジーンズ姿の若い男が立っています。
「ん？」

その男は服装に似つかわしくない皮の鞆が持っていました。

「うん、俺の鞆と同じような……。あッ！」

山田はバネ仕掛けの人形のように身体を反転させて、その男に向かって走り出しました。

気が付いた男も迅速で、隣の車両へ逃げていきます。

「ど、泥棒ーッ！ ま、待てえーッ！」

山田は必死に追いかけます。

「泥棒だあーッ！ 誰かあー、捕まえてくれえーッ！」

男は一番後ろの車両まで逃げていきました。

乗客は呆気にとられた顔で追跡劇を見えています。

ようやく状況を察した乗客が立ち上がり、男の行く手を塞ぎました。

「どける、どけるーッ！」

と叫ぶ男の凄厲剣幕に、非常線はあっけなく突破されました。

異変を察知した車掌が出てきました。

「どうしました？ 喧嘩は止めてください」

状況のよく掴めていない車掌が冷静に言いました。

「ど、泥棒です、捕まえてください。私の鞆が……」

山田は息を切らしながら訴えました。

「うるせえーッ！ バカヤローッ！」

と叫んだ男の態度で、車掌も状況を把握したようです。

「待ちなさい」

と手を広げ、車掌は男の行く手を遮ります。

周りの乗客も五人、十人と立ち上がり、ギリギリと男に迫りました。
と男が、ポケットから光るモノを取り出し身構えます。

ナイフです。

4

刃渡りが三十センチはあろうかとゆうサバイバルナイフです。男は野郎、野郎と叫びながら、右に左にナイフを振るいます。これには皆がたじろぎました。

『へへへっ…、刺すぞ、刺すぞ。離れろッ!』

男の目には狂気が宿っています。

これでは誰も手が出せません。

とそのとき、ギリギリジューツとベルが響き渡りました。

そして、キキキッ、キイーッ…と車輪を軋ませ、列車に急ブレーキがかかりました。

その拍子に立っている乗客のほとんどがバランスを失い、

『ウワァーッ!』

と叫んで倒れました。

阿鼻叫喚、車内はパニックです。

山田も数人の乗客たちと一緒に五メートルほど吹っ飛びました。誰かが非常停止ボタンを押したようです。

犯人も例外ではありませんでした。

男は床に突っ伏して、必死にナイフを探しています。

転んだ拍子に投げ出してしまったのでしょう。

しかし男は、山田の鞆は離しません。

鞆の握りの部分をしっかりと握り締めています。

上に乗った乗客を掻き分け、山田はようやく起き上がりました。

そのとき既に男は、車掌と数人の乗客によって取り押さえられていました。

全員が、ハアハアハア…と肩で大きく息をしています。

山田は男に近づくと睨みつけ、その手から鞆を奪取りました。

油断でした。

山田は中国での駐在を終え日本に戻ってから二年が経過、意識も完全に日本人に戻ってしまったようです。

中国人に言わせると、盗んだ泥棒は当然悪いが、大切な荷物を網棚に載せる方はもっと悪いということになります。

中国の地下鉄やバスに網棚はありません。

誰も載せる者がいないから無いのではなく、犯罪に結びつく可能性のあるモノは最初から付けないということです。

“自分の身は自分で守る”

山田はもう一度自身に言い聞かせました。

御仕舞

第二十八話 愛犬の家出

1

秋の或る土曜日の早朝、山田一郎が惰眠を貪っていると、

『直ちゃん、直、直太郎』

と庭から犬の名を呼ぶ妻の声がする。

「朝っぱらからうるせえなあ」

と呟き一郎は布団を被った。

『直太郎ーッ！ な、直太郎が、直太郎がいない』

と叫びながら、妻がドンドンドンと雨戸を叩く。

それで一郎も飛び起き、だらしない寝巻き姿のまま表に飛び出した。

「どうしたって、直太郎がいない……」

なるほど姿がない。

その辺にウロウロしているだろうとの読みで、一郎は冷静に確認する。

鎖の結び目が腐って壊れていた。

主のいない犬小屋は無機質で、時間が止まって見える。

その静寂の空間を見ていると、一郎の脳裏を不吉な予感が過ぎた。慌てて頭を振って否定する。

「ふん、鎖を引き摺ったままだナ。どこかへ引っ掛っているだろう。その辺を探してみろよ」

『ええ、近所を探してみるわ。あなたも早く着替えて探してよ』

わかったと応えながらも、直ぐに、“直太郎がいたワ”という妻の声が聞こえてくる、はずだった。

落ち着かない気持ちで朝刊に目を落としていると、

「いないワ。グルッと見てきたけど、どこにもいない……」

と絶望に打ちひしがれた妻の声がした。

内心ガツカリしたが、

「なあに、大丈夫だ。後で俺もいつも散歩するところをグルリと見てくるよ。心配するなよ」

『警察に電話するわ。それと山田さんとこと内山さんところ、それに寺門さんところにも……』

「止めるよ。警察なんか電話するなよ、犬がいなくなっただけでサ」

『そうは言っても、身元がわからないと処分されちゃうのよ』

「な、なにッ！ く、首輪に鑑札が付いているだろう？」

『それが、この間取れちゃって……。付け直さなくちゃ、と思っではいたんだけど……』

「なに、鑑札が付いてないのか？」

『だって、このまえあなたに頼んだのに……。面倒くさそうに、後でやる』って言って、そのままでしょう』

「俺、が……」

そういえば二、三週間前に頼まれたような気がした。

2

一郎が黙って自転車に向かうと、“私が自転車を使う”と妻が言う。自転車は一台しかない。

仕方がないので、歩いて犬との散歩コースを辿ることにした。

早朝に一時間ほど直太郎と散歩をするのが、一郎の休日の習慣となっている。

週末という気持ちから、昨晚は同僚に誘われて数軒の飲み屋をハシゴした。

窓際族とは言え、週末は安堵感に包まれる。

それでつい油断して、誘われるままにハシゴをしていた。

・・・昨晚、直太郎は、いたかな……。いたような気もするし、さあ、どうだったか……。こんなことなら、もっと優しく接しておけばよ

かった。ああ、昨日の晩飲まなければ、少なくとも二軒、否、一軒だけで止めておけばナ。今朝は五時半には散歩に出られたはずだ。もしかしたら、その後でいなくなっただのかもしれない。隣の席の窓際仲間、あいつしつこいからなあ・・

と、自分の責任を棚に上げ他人の所為にしていた。既に八時を回っている。

ジヨギングする人々、数人で散歩をする人々、犬を連れた人々、秋の柔らかい日差しが包んでいた。

しかし一郎の気持ちは重い。

キヨロキヨロしながら、いつもの散歩コースを辿る。

・・犬なら臭いで追うこともできるのに・・

指の間から零れ落ちた、週末のいつときの小さな幸せに思いを馳せる。

空を見上げれば抜けるような秋晴れ、紺碧の空に白い雲がたなびいている。

しかし、一郎の気は重い。

ときどき口笛を吹いて辺りを窺うが、反応はない。

口笛を吹くと直太郎はそれまでの探索行動を一旦休止して、一郎を振り返り、少し首を捻る仕草をする。

その表情が浮かんできて、なんだかしんみりとしてくる。

・・もう会えないかも知れない・・

不吉な影が差す。

・・なあに、腹が減れば戻ってくるサ。俺が家に戻るころには、帰って来ているかも知れない・・

と自分に言い聞かせると気持ちが一瞬分楽になった。

お袋が出掛けに言った、“山の中で、鎖が絡んで動けなくなっているんじゃないかい”という言葉が気にかかる。

誰でも思い浮かぶことだが、一旦口にするとそれが現実になりそうな気がして言葉にしない。

達観か、経験のなせる業か、そんなことも年寄りは平気で口にでき

る。

その無神経さに、一郎は一瞬ムツとした。

・・・もしも、誰も近づかない山奥で鎖がなにかに絡んでしまったら……。ああ止めよう。その角を曲がると、ジャラジャラと鎖を引いた直太郎が出て来る。ほら、出て来た・・

一つの角を曲がるたびに、そんな想いが頭を過ぎる。

虚しい二時間が過ぎて、家が見えてきた。

・・もしかしたら戻って来ているかも知れない・・

一郎の足が速まる。

3

門から恐る恐る犬小屋を窺う。

・・あつ、直、直太郎、帰ってきたのか・・

虚しい幻想だった。

期待していただけに、ドツと疲れが襲ってくる。

そこへ妻も戻って来て、小屋に目をやり、一郎の表情を窺い、

『いない』

と短く言って、家に入ってしまった。

『お義母さん、警察から電話はなかった？』

という妻の問いに、一郎も耳を敬そはだてる。

『ああ、なかったよ。しょうがねえなあ』

いつもの母の言い方だ。

絶望感に失望感を塗り重ねるような嫌な言い方だ。

・・しょうがねえと言ったって、犬は一歳ぐらいの子供の頭に人間の大人並みの体力を備えた生き物だ・・

と、一郎は心の中で直太郎を庇っていた。

お年寄りの心配の仕方って、心配しているんだか、心配をかけた相手を貶しているんだか、なんだかよくわからない。

『どうしよう……、あの子、心細いだろうなあ……』

と呟くように言う。

「途中の道路に動物の死体が転がっていて、一瞬ドキッとしたけど狸だった」

一郎は安心させようと言ったつもりだったが、妻からの反応はなかった。

どうやら逆効果だったようだ。

言わずもがなのことを言って、一郎は後悔した。

これでは母と同じではないか。

『もう昼だよ』

『先に食べてください。冷蔵庫にいろいろと入っていますから……』

「俺たちも食っちゃおうぜ。午後はもう少し遠くまで探しに行ってみようよ」

『そうね。車で団地の方へ行ってみようかしら』

「俺は土手の方を探してみるよ。まさかとは思っけど、川の向こう側も探してみるよ」

二人は夕方真っ暗になるまで思い当たるところは全て探したが、結局直太郎を見つけることは出来なかった。

重い足取りで家に戻っても、期待した警察からの電話連絡はなかった。

『門を少し開けておきましょう』

「そうだな。夜中に腹を減らして戻るかもしれないから、餌も置いておいてやろうよ」

『水も替えておいてちょうだい』

「玄関の電気は点けておこう。なあに、朝になれば帰っているよ」

4

翌日の午前四時、一郎はいつも通りに目を覚まし、外の気配に耳を澄ます。

『……………』

犬小屋辺りに意識を集中しても、直太郎の存在を期待させる物音はなにも感じられなかった。

チャラツというかすかな音でも、一郎は狂喜して表に飛び出したであらう。

ゆっくりと起き出して、ポットの水を替えて電源を差し込むと、洗面、整髪といったもの手順から髭剃りを省略した。

早く表に出て確かめたい、早く探しに行きたいと気が焦ったからだ。しかし、外はまだ暗い。

そつと玄関の扉を開けて犬小屋を見た……。

外灯のわずかな明かりが、ぼんやりと小屋を浮かび上がらせている。生の気配はない、時は止まったままだ。

“いない”と呟いて、庭を見回す。

暗がりをつつとなにかかが横切つて藪に消えた。

「直？」

“ワン”という吠え声を期待して、小さく呼んでみた。

バタバタバタとエンジン音が近づいて、キキツと玄関前でオートバイが停車、郵便受けがパタンと音を発した。

一郎は朝刊を小脇にしばらく暗い庭に佇み、諦めて部屋に戻る。

インスタントコーヒーをひと匙しゃくり、愛用のカップに熱い湯を注いだ。

これも朝の手順の一環だ。

コーヒーに口を付けようとして、神棚と仏壇に手を合わせるのを忘れていることに気が付いた。

やはり直太郎のことで頭が一杯なのだろう。

「高かだか犬がいなくなったことぐらいで……」

と呟いて、一郎は苦笑した。

五時半、ようやく辺りが明るくなってきた。それを待ち侘びたように、一郎は自転車に跨ると家を飛び出した。もう一度散歩コースを辿ってみよう。

二時間ほど、思いつくまま、或いは犬の吠え声に釣られ、彷徨い歩

いた。

5

その日の午後になっても、直太郎の発見につながる連絡はなにもない。

もう探し尽くし、一郎も妻を疲れ果て、放心したように茶の間に座っていた。

『ごめんください』

玄関から声が聴こえた。

もしかしたらと期待して、二人は一斉に席を立つ。

隣の奥さんだった。

『旅行へ行っていたものですから、これつまらないものですが……』

『いつもすみません。どちらへ……』

『はい、那須の方へ、紅葉を見に……』

玄関での二人の遣り取りが聞こえてくる。

“お茶でも……” という妻の勧めを、“他所へも廻りますので……”

と断って、隣の奥さんが帰って行った。

小一時間ほどが経過し、再び玄関で隣の奥さんの声がした。

妻が買い物に出かけて不在だったので一郎が席を立つ。

「どうなさいました？」

と一郎が訊ねると、

『直ちゃんがいなくなったそうですね』

「ええ、昨日から、家出してしまって」

と苦笑交じりに応えると、

『隣の家から犬の吠え声がするんです』

「はあ、それが？」

と、一郎は怪訝な表情で訊き返す。

『隣で犬は飼っていないんです』

「えっ、隣、というと？」

『ほら私の家の隣の、鬱蒼とした木に覆われた……』

「ああ、わかります。あそこに、どなたか住んでいましたっけ？」

『ええ、住んでいますけど、付き合いはまったくありません。変わった方たちで、家とは没交渉なんです』

と複雑な笑みを浮べた。

『鈴木さんのお宅で直ちゃんがいなくなったことを聞いて、家に戻ったら、隣から犬の声がして……。直ちゃんの声と似ているような気がして、間違いかも知れませんが、一応調べてみませんか？』

「も、もちろんです。直ぐに行きます」

誰彼となく、“私の犬が迷子になりました。鎖を引き摺った柴犬を見ませんでしたか？”と訊ねると、皆がみな我がことのように同情し、心配してくれる。

“世間も捨てたものではない。高が犬の……、”と考えた自分の不見識が恥ずかしかった。

“これからは考え方を改めよう。もし犬や猫の行方不明を聞かされたら、身を入れて探してあげよう”、と深く反省した。

御仕舞

第二十九話 ダムはムダ、洒落てる場合かッ！

1

『なにッ！ 着工から三十年、四十年を経て、まだ完成していないダムがあるだと……。どこの国の話だ』

『なにッ！ 日本だと……。難工事なのか？』

『なにッ！ 特別難しい工事というわけではありません、だと……。じゃあ、なぜだ？』

『なにッ！ さあ、わかりません、だと……。計画の責任者を出せッ！』

『なにッ！ とつくに死んでます。今はあなたです、だと……。』

『なにッ！ 予算は当初の二倍に膨れた、だと……。計画の責任者を出せッ！』

『なにッ！ こつちもとつくに死んでます。今はあなたです、だと……。』

『なにッ！ そんなダムがゴロゴロあります、だと……。』

『なにッ！ 四十年かけて完成したダムに水を貯えられない、だと……。どうゆうことだ？』

『なにッ！ 地盤が弱くて、水を入れると土砂崩れを起こします、だと……。事前調査はしなかったのか？』

『なにッ！ やったはずです、だと……。はずですとは、どうゆう意味だ？』

『なにッ！ とつくに責任者は死んでます、だと……。わかった、わかった。今の責任者は私だ、と言いたいのだね』

『なにッ！ はい、だと……。ふーう、参った、参った』

・・公共工事とは、魑魅魍魎どもの金が湧いてくる財布だナ・・とゆう前原大臣の溜息が、山田一郎には聞こえた。

毎日毎日、新聞やテレビを見る度に腹が立つ。

やはり政権交代は正解だったナ。

俺の一票も役に立ったようだ。

自由民主党のやってきた悪弊がゾロゾロと出てくる。

政権交代の発端となった年金問題、公共工事に名を借りた無駄遣い。まだまだ氷山の一角だろうが、膿を全部出し切って欲しいものだ。

日本国の抱える数百兆円の借金の全部とは言わないが、少なくとも半分は役人による無駄遣いから発生しているんじゃないか。

早期退職制度、賃金・賞与のカットなどなど企業の置かれた厳しい現実を役人はわかっているのか。

ローンの破綻による家の競売、自己破産、本人の責任は論ずるまでもないが、その責任の一端は国の政策にあると、山田は考えている。

2

野党になった自民党議員のテレビでの発言には腹が立つ。

それでもまだ議席を保った者はいいが、落選して国民の所為にしたリ、民主党の悪口を言ったりするのは止めてほしいものだ。

―― 気の毒を通り越して惨めでさえある。

中には、

『民主党の掲げるマニフェストなどできるわけがない』
などと平気で発言する。

「じゃかましい、馬鹿野郎。テメエら五十年も六十年もやってきて、この日本をグチャグチャにしてしまっただろうが。先ずは総括だ、反省しろッ!」

山田がコメンテーターのオブラートに包んだ発言に本音を加えて、テレビ画面に向かって怒鳴る。

『だから、それは我々の先輩が……』

別に山田に答えたわけではない。

「じゃかましい、馬鹿野郎。テメエら、直ぐにそれだ。責任逃れだけは上手くなりやがって」

再びコメンテーターの言葉に本音を加えて山田が怒鳴る。

まあ、相手には聴こえないわけだが……。

『で、ですから、これから自民党も変わります。変えていきます』

「じゃかましい、テメエになにができる。ええ、新しい総裁は誰だ？」

ますます山田は興奮してきた。

感情移入、いつしか自分もテレビの中に入っている。

『彼も自民党を変える、と言っています』

「バッキローツ！ それこそできるわけがねえだろう。直ぐに政権を取り戻すなどと、寝言を言いやがって。国民はそれほど馬鹿じゃねえ、と、思う……、と、信じたい……が、自信はない」

山田の声が尻すばみになっていく。

『ほれみる』

「なんだと、勝ち誇った言い方するんじゃない。所詮、君たちは負け犬になったんだ。こうなったらダな、民主党の二軍としてダな、マニフェストの実現に協力しなさい。そうすれば浮かぶ瀬もある」
山田は、“そうだ、そうだ”と画面の中のコメンテーターに同意した。

『民主党のマニフェストは無責任な戯言だ。出来るわけがない』

「こら、その不細工男。まだゆつかッ！」

山田はテレビに向かって拳を振り上げた。

「不細工な面しやがって、テレビに出る顔かよ。まあ、一步下がって枯れ木も山の賑わい、テレビに出るのはヨシしよう。しかし、悪党面が悪役をやってもしょうがあんめえ。昔から、二枚目俳優が悪役をやってこそ映えるんだ」

これも山田が代弁して言った言葉だ。

コメンテーターの言葉はもう少しオブラートに包まれている。

『顔は関係ないでしょう』

不細工男がコメンテーターに反論した。

「否、ある」

山田とコメンテーター数名が同時に言い切った。
不細工男がいじけた風を装うが、かわいいわけがない。

3

ねえ、自民党の不細工の君……、君が言うように民主党のマニフェストが簡単に実現できるなんて、国民は誰も思っていないよ。

でもね、民主党政権になって日本が活気付いた気がしませんか？

これだよ、俺たちはこれが欲しかったんだ。

閉塞感からの脱却だ。

この十数年、後から後から暗い話題ばかりが出てきて、息が詰まるような日々だったじゃない。

『えッ！ 小泉さんをあれほど支持したじゃないか、だって……』

それを言われると我々国民も反論ができないナ、反省……。

『なにッ！ そのときと今の状況は同じだ、だって……』

うーん、そうかも知れない……。

でもね、やらせてみようよ。

やる前から足を引っ張るような発言ばかり、それじゃ、ますます自民党は男を下げるよ。

『えッ！ 自民党にも女はいる、だって……』

はいはい、言葉の綾でしょう。

それがいけないと言っているそばからそれじゃ、政権は遠いね。

昔の社会党は“反対の為の反対”ばかりだった。

あれでは絶対に政権は取れないよ、安心して任せられないもの……。

自民党もそうはならないようにしてくださいね。

一サラリーマン、それも一窓際サラリーマンの分際で、豪そうなことを言ってきたけど、やはり政治がしっかりしないとイケないと思います。

なにも政治家だけが、日本の行く末を憂いているわけではありませんせんよ。

名も無き小市民一人ひとりが心配しているのです。

不細工の君、二大政党制を目指して自民党を引っ張ってくださいね。

― それにしても、自民党は本当に小粒になったモンだ、それは世襲に主因があると思います。

御仕舞

第三十話 恐怖の自転車

1

定時に会社を出た一郎は、いつも通り午後七時に自宅近くの駅に着いた。

我が物顔に狭いロータリーを独占するタクシーを避けつつ横断歩道を目指す。

信号の柱に身を寄せるようにして、

・ まったく、なんとかならねえのかよ。デカイ態度でロータリーを塞ぎやがって……。東武さん、弱みでも握られてンじゃねえの・ ・ ・と呟きながら、青に変わるのを待っていた。

・ ・ ・しかし、この県道もなんとかなんねえのかよ、危なくてしょうがねえ・ ・ ・

信号待ちの人々の身体を掠めるようにして、次々に車が通り過ぎて行く。

駅前だからといってスピードを落とす車はほとんどない。

特に大型トラックが巻き起こす風は、唸りを上げるタイヤに身体が巻き込まれそうな恐怖を感じる。

・ ・ ・歩道のねえ道なんて、今時珍しいぜ。これで県道だってンだから、千葉県の恥だね。市長、しっかりしろよ・ ・ ・

以前信号待ちの女性がトラックに巻き込まれ死亡するという大事故があった。

それでなにか改善されたかといえばむしろ逆で、二つしかない横断歩道が一つに減らされた。

それにどんな意味があるのかわからない。

歩行者から見れば改悪以外のなものでもない。

・ ・ ・市長、説明しろ。そこにアホ面している市会議員でもいいぞ。こら、なんとか言ってみろ・ ・ ・

長い、長い時間待たされて、信号はようやく青に変わった。
しかし山田は、信号が変わっても直ぐには足を踏み出さない。
上海駐在で身に付けた自己防衛手段だ。

“赤で車は停まる、停まってくれる”などと楽観的に考えたり、見
ず知らずの他人の善意を信じて飛び出す中国人はいない。

右を見て、左を見て、もう一度右を見て、それからようやく一步を
踏み出す。

その日もそうした、が、

「あッ！」

と叫んで、寸でのところで身体を交わした、と思った。

だが……、

「イテエーッ！」

踏み出した右足の甲を前輪と後輪が、ガッ、ガッと轢いて通り過ぎ
た。

「バ、バカヤローッ！ 赤じゃねえか」

と怒鳴っても、その男は振り返りもせず遠ざかって行った。

・・糞ッ！ あの野郎、今度遇ったらただじゃおかねえ……

と呟いてみても後の祭り。

2

数日後の午後七時、いつも通りに山田が駅のロータリーに立つと、
横断歩道の辺りになにやら人だかりがある。

・・事故、か……？・・

しかし車は停まっていない。

ピーポー、ピーポーと救急車が近づいて来る。

片側が通行止めになっているので道路は渋滞していた。

警察官が近づいて来る救急車を手招きしている。

警察官に気づいた救急車はサイレンを止めて、駅のロータリーに停
車しようとしたがタクシーが邪魔で入れない。

それでも運転手たちはポケットと見ている。

警察官に促され数台のタクシーがバックすると、ようやくスペースが出来た。

・・まったく、ポケットとしゃがんで。駅のロータリーをデメエたちのモンだと思っていやがる・・

山田は普段の恨みをぶつけるように呟く。

隊員がベッドを押して近づくと、群がっていた人々が道を開ける。

それで道路にうつ伏せるお婆さんの姿が見えた。

腰を打って立てないようだ。

『お婆さん、どこが痛い？』

隊員が訊いた。

『ここ、こことここが痛い』

と腰と膝を指差す。

『大丈夫ですよ。直ぐに病院へ行きますからね』

『えっ、こ、困ります。家に、お爺さんに電話しないと、お爺さんは寝たきりなんです』

『でもね、お婆さん。病院で調べてもらわないと……。どなたか家族の方とか親戚の方はいないんですか？』

『息子と嫁は会社へ行っていていません。親戚は遠くって』

『とにかく病院へ行って調べてもらいましょう』

『お婆さん、私が電話してあげます。息子さんかお嫁さんの電話番号はわかりますか？』

と、若い警察官が言った。

『家に行かないと……』

『わかりました。私が家に行って、お爺さんの様子も見てきます。安心してください』

『ご親切に、息子と嫁の電話番号は冷蔵庫の扉に書いてあります。和男と書いてある方が息子の会社の番号です』

『わかりました。鈴木和男さんですね。それで、ご住所は……？』

『はい、西深……123番地です』

とお婆さんが自分の住所を継げた。

『わかりました。救急隊員の方早く病院へお連れしてください』

八十歳ぐらいだろうか、しっかりしたお婆さんだと山田は感心した。

3

救急車が再びサイレン音を響かせて遠ざかって行くと、自転車が一台立ち去ろうとした。

『あつ、奥さん、ちよつと待ってください』

『えつ、でも、私、忙しいんです。塾へ子供を迎えに行かないと……』

『お忙しいかも知れませんが、事情をお聴きしませんと。これから現場検証を行いますので、ご協力をお願いします』

『で、でも、わ、私……』

『あんたなにを言っているんだよ。お婆さんを轢いたんだよ、あんたわ……。交通事故と同じだよ』

『えつ、じ、自転車、ですよ。それにあの人、急に飛び出したんですよ』

『けつ、嘘ゆうんじゃねえよ。俺ら見てたぜ。なあ、谷口？』

『おお、信号が赤になってんのに、あんた、向こうから凄い勢いで走って来たじゃねえか』

『信号無視ですか』

中年の警察官の表情が強張った。

『……で、でも、自転車ですよ。他の人たちもドンドン行ってたし』

『……』

『あんた、自転車、自転車つて、赤なら車も自転車もねえよ』

『その通りです。もし、もしですよ、あのお婆さんになにかあったら、あなたが責任を取らなければなりません』

『ええつ、そ、そんな……、高が自転車でぶつかったぐらいで……』

『バカだね、あんた。他人に怪我をさせたら、治療費とか払うのは』

当たり前だろう」

堪らず山田が口を挟んだ。

『そ、そんな……、主、主人に電話します。弁護士も呼びます』

「あんたねえ……」

と山田が言いかけると、

『はい、後は私がお話を伺いますから、事故を目撃された方以外はどうぞお引取りください』

という警察官の言葉で野次馬はゾロゾロと引きあげて行く。

『あつ、運転手さんは残ってください』

『えっ、俺ら……』

『はい』

『で、でも、仕事がよお。なあ……』

『いえいえ、そんなにお暇は取らせません。はい、奥さんも正直に話してください。そうすれば早く済みますからね』

『こ、子供が……』

『奥さん、あなたはまだご自身のやられたことがわかりでないようです。あなたは交通事故を起こしたのですよ』

優しい口ぶりだったが、ビシッと釘をさした。

続けて、

『自転車の事故を安易に考えている人のなんと多いことが……。もし相手の方が死亡でもしたら大変なことになりますよ』

『……………』

死亡と言われて、その女性は無言でうな垂れた。

『自転車の事故だから補償が安くなる、ということはありませんからね』

『で、でも私、自転車事故の保険なんて入っていません』
と呟くように言った。

『普通はそうでしょうね。でも、補償はしなければなりません。今晚、ご主人と相談してください。さて、続けましょうか』

『……………』

『別に助言というわけじゃありませんけれど、お見舞いに行くとか、相手の方に誠意を示した方がいいですよ』

御仕舞

第三十一話 “ありがとう” と言えない大人

1

窓際サラリーマンの山田一郎は、余程のことがない限り、午後六時二分上野発の常磐線に乗る。

一本前の五時五十四分発にも乗れるのだが、帰りは座ってゆっくりと本を読みたいので、一列車やり過ごすのだ。

いつもの席を確保し、山田はホッと息をついて読みかけの単行本を取り出す。

これから四十分ほどは読書に没頭できる。

……と、松葉杖をついた若い男が、どうゆうわけか山田の方へ近づいてくる。

・・来るな。来るな。こつちへ来るんじゃないやねえ・・

と、心で念じる。

しかし願ひとは裏腹に、その男は山田が座っている席の前に立った。
・・糞ッ！ どうしていつも、俺の座っている席の前に老人や妊婦、怪我人が立つんだ。俺の顔には席を譲ります、って書いてあるのか
な・・

山田はそつと顔を撫ぜてみた。

両隣の男と女はすでに狸寝入りに入っている。

「ど、どうぞ」

と小さな声で言つて、サツと席を立ち、

「いいえ、どう、……」

と言いかけて、山田は言葉を飲み込んだ。

当然あると思つた、“ありがとう”というお礼の言葉がないのだ。

別に礼を言ってもらいたいわけじゃない。

列車を一本やり過ぎ、ようやく確保した席だからといって、未練があるわけじゃない。

どうしても座りたいわけじゃない。

・なあに、朝は絶対に座らないと決めているし、立っていること自体は苦痛でもなんでもない・

他人と奪い合ってまで座りたいと思うようになったら、会社を辞めようと考えている。

痩せても枯れても男一匹、山田一郎の矜持だった。

座った男はすぐに目を閉じた。

山田と目を合わせるのが辛いのだろう。

それにしても、大の大人が、なぜ“ありがとう”の一言を発せられないのか、不思議でならない。

何度も言うけど、恩に着せたいわけじゃない。

席を立つのも結構勇気があるんだよ。

なんといつてもタイミング、これを逃すと立てなくなる。

2

来た。

間髪を入れず、

「どうぞ」

と言って立ち上がる。

「ありがとう」

相手が礼を言って座る。

「いいえ」

と少し照れる。

辺りにほのぼのとした空気が流れる。

まあ、誰しも席を譲りたいという気持ちはあると思うけど、タイミングを逃すとても難しくなる。

来た。

「あ、う、……」

声が出ない。

相手が視線を逸らす。

立つタイミングを逃す。

目を瞑る。

ひたすら狸寝入りを決め込む。

その一角に気まずい空気が流れ、降りるまで消えることはない。

二人同時に立ってしまうと、これは難しい応用問題になる。

譲られた方もどちらに座っていいかわからない。

右側が選ばれたとしよう。

すると、左側の男は、別に女でもいいのだが、なんとも気まずいことになる。

左側の人も勇気を振り絞って起ったのだ。

肩透かし、別に悪いことをしているわけではないが、その場にしばらくなくなる。もう一度席に座る方は稀で、大概はその場から遠ざかる。心なしか、その肩は落ちているのが普通だ。

3

中には断る老人、否、高齢者もいる。

これも立場がない。

「どうぞ、……あれ？」

返事がない。

・・あれ、耳が遠いのかな？・・

それでもう一度大きな声で、“どうぞ”と言って腰を浮かしかける。

その老人、否、ご高齢の方が上から目線でジロツと睨む。

『失礼な、俺は老人ではない。舐めるな、若造』

と主張しているようだ。

まあ、どっちでもいいけどサ、それなら“私に席を譲らないでください”って書いて胸に張っておけよ。

悪いけど、どう鼻屑目に見ても、（別に鼻屑目に見る必要はないけど）唯の頑固爺だぜ。

家でも恐らくそうナンだろうね。

頑固で意地っ張りで、偶に口を開けば“最近の若い者は……”、“我々の時代は……”だろう。

意地はわかるけど、どうせなら可愛い老人になりなよ。その方が得だぜ。

「なに、我々は戦争で、どうたらこうたら、だと？」
「わかった、わかった。」

「ああん、今日の日本の繁栄は我々の、どうたらこうたら、だと？」
「はいはい、もういいよ。」

「そうやって斜に構えて、精々突っ張って生きなさい。
誰も邪魔なんかしませんテ。」

「でも、奥さんは付いて来てくれるかなあ……？」
「熟年離婚、って知っていますか？」

「えっ、とうに離縁してやった。やった……、ほんとにいい？」
「見得は張らないの、どうせ逃げられたンでしょう。」

「あんたの退職とともに、」

「はい、これ。私の判は押してあります。あなたの判はここへ押してください。退職金と年金、それに貯金は半分いただきます。えっ？ 子供たち、ですか。ご心配なく、当然了解済みですよ。お母さん、良かったね。よく今まで我慢したね、って言ってくれたわ。はい、それじゃおやすみなさい”
「とかなんとか言われたンでしょう。」

「えっ、なんで知っている、凶星じゃ、ですって？」
「あっ、こいつは愕いた。」

「へーえ、そうですか。あるンですねえ……。」
「……今から女房孝行しよう」と……」

『ああ、そうせい、そうせい。うっ、うっ、うううう……』
「泣かないの、反省しているンでしょう。」

「だったら奥さんに頭を下げて許してもらいなさい。」
「えっ、これから行くところ、ですって？」

ほんまかいな、それじゃ、頑張ってください。

「えっ、これもなにかの縁^{ケツ}じゃ、一緒にきてくれ、ですって?」
勘弁してください、自分の穴は自分で拭くしかないの、さあ、勇気を出して、“ありがとう”って言うってごらんなさい。

御仕舞

第三十二話 五月蠅い餓鬼どもと母（馬鹿）親たち

1

或る朝、日暮里駅で京浜東北線に飛び乗った。

常磐線がプラットホームへ滑り込むと、山田はドアが開くと同時に飛び出し、階段へ向かう。

早朝とはいえホームには人が多い。

携帯電話を顔の前に翳し、チンタラチンタラ歩いて奴は蹴飛ばしたくなるが、グツと堪えて、ぶつからないように避けながら、早足で歩く。

乗り継ぎの時間はあまりない。

日本のダイヤは正確だが、それでもときどき電車が遅れることもある。

常磐線、京浜東北線、どちらがわずかに遅れても、乗り継ぎ時間は短くなる。

京浜東北線に乗るには常磐線ホームの階段を上って、京浜東北線ホームの階段を下りなければならない。

山田の会社の始業は八時半、それに対して乗る列車は六時半発だから、一台や二台列車をやり過ごしてもまったく問題はない。

しかし、毎朝乗っている電車に乗れないと、とても気持ちが悪い。

松戸駅で忘れ物の確認があったので、常磐線の日暮里駅到着が少し遅れた。

「あつ、ああああ、あつ」

ドアが閉まる寸前に山田は飛び乗った。

「ふーっ、ん？」

『ペチャクチャ、ペチャクチャ』

『ピーチク、パーチク』

『オッパイ、グニグニ、ヘエヘヘッ……』

『オッパイだつて、キャ、キャツキャツ！ オシリプリプリ、キャーッ！』

こまっちゃくれた餓鬼どもが、オッパイだ、ケツだと大騒ぎしている。

話すというよりはや叫びに近い。

ガラスを金属棒で擦っているような声で、頭にキンキンと響いてくる。

隣には母親らしき連中もいた。

・・・注意するだろう・・・

と期待したが、

『まあ、奥様……グニャグニャグニャ、おっほほほ……』

『もう行かれました、あのレストラン……、とても美味しいですわあ。それに三人でたったの。万円ですもの、ふうふうふう……』

『まあ、あの大宮の一流レストランが……、あつはははは……』

こちらにも注意どころか、負けじと喧しい。

・・・じゃーしい！　ってく、この糞つたれどもが……。おっといけない、これではこいつらと同じだ・・・

周り中が迷惑そうな顔をしているが、そんなことはまったく気にしない。

山田は新聞を広げても気になって気になって、頭に入ってこない。

上野で降りるだろうと期待したが、相変わらず傍若無人に騒いでいる。

どこの馬鹿親どもだ。

――馬鹿親と書いて母親と読んでください。

餓鬼どもが五、六歳だから、馬鹿親どもは三十歳前後だろう。それにしても常識の欠片もない連中だ。

『大きな声をださないでネ、××ちゃん』

多少の遠慮はあるのか、ときどきと囁くように語り掛ける。

しかし……、

『まあ、。。。さんの奥様、お高かったンでしょう。おっほほほ……』

『そおんことございませんのよ。あつははは……』

・・おまえらの方がよっぽど五月蠅い・・

山田の怒りが沸々と頂点に達していく。

先ずは心の中でシミュレーション……。

「やかましーッ！ この糞馬鹿親ッ！ 餓鬼どももテメエたちも、ちったあ、他の客のことを考えるッ！」

と、怒りに任せて怒鳴ると、一瞬の沈黙。

だが……、

「ほらほら、怖いオジサンが怒っているわよ。はいはい、怖いから静かにしましょうね」

「嫌ねえー。怖い顔して、子供ナンだから、少しぐらい騒いでもしょうがないでしょう。ねえ、奥様」

と、敵が反撃にくるのを、

「どこが少しじゃ。それに、餓鬼どもより、テメエの方がよっぽどうるせえじゃねえか」

と切り返す。

すると、常識とか、遠慮とか、迷惑とかいった良識をどこかにかなり捨ててきた敵が、

「まあ、怖いですわねえ……。奥様、相手にしない方が良くつてよ。なにをされるかわかりませんもの……」

と蛇蝎を見るような目を向けてくる。

・・うーん、相手は手強い馬鹿親が五人、俺に勝ち目はないな・・と段々弱気になってくる。

それで作戦を変更する。

「少し静かにしてただけませんか」

と静かに語りかけ、相手の良心に訴える。

一瞬の沈黙。

・・効いたか・・

と、思ったのもつかの間、

「まあ、今誰かがなにか言いませんでした？」

「お気の所為でございましょう。おっほほほっ…」

「やかましい、気の所為じゃねえよ。皆の迷惑だから、静かにしろ
って言うてんだッ！」

いかん、いかん、感情的になってはいかん。

冷静に、冷静に、落ち着いて、落ち着いて……。

山田はここで大きく深呼吸をした。

秋葉原駅で乗客がドカドカと乗ってきた。

これだけ混んでくれば少しは静かにするだろう、との淡い期待は虚しく砕け散った。

しかし、こいつらはいったいどこまで行くつもりだ。

だいたい今日は平日だろう、なんでこの糞餓鬼どもがいるんだ。

はて、今日はなにかの記念日か……？

そうか、わかった。

インフルエンザで学級閉鎖か、それで皆でどこかへ遊びに行くつもりだな。

そうか、デイズニールランドだ。

だとすると東京駅でおさらばだな、もう少し辛抱するか……。

気の小さい山田一郎は自分なりに落しどころを見つけ、この難関を事なかれ主義で乗り切ることにした。

・・狂犬に態々手を出す馬鹿はいない、ふふふふっ……
とも考える。

争いは嫌いだし、“あつしには拘わりのねえいこととござんす”と、『木枯らし紋次郎』張りに避けて通るのが人生訓だ。

これで自分の乱れた心を治めた、否、治めたつもりだった。

が……、“あんた方、どこさ”ではなく、

『あんた方、いい加減になさい。皆の迷惑でしょう』

それほど大きな声ではないが、反論を許さない毅然とした言い方だった。

山田は思わず仰け反った。

日暮里駅から一緒に、山田の隣に立って読書に耽っていた女性だ。車内が水を打ったように静かになった。

するとその女性は子供たちの前にしゃがみ込み、

『ねえ、君たち。こういった公共の場ではネ、静かにするものよ。』

お利口さんだからわかるわね』

子供たちと同じ目線の高さで、静かに諭すように語り掛けた。そしてスツと立ちあがると、再び読書に耽りだす。

・・くうー、やってくれた。ルック・ザマー（様見ろ）だ・・

三十半ばだろうが、身体にピタリとフィットした黒いスーツ姿が良く似合っている。

スラリとした長身、ショートヘア、凛々しく引き締まった口元、キリッとした眉、化粧はあくまでも薄く、全体に清潔感が溢れている。

・・上司にしたい女性ナンバー・ワンだ・・

と山田は思った。

糞餓鬼どもと馬鹿親（母親）たちは、山田の予測通り東京駅で降りて行った。

・・あゝあ、俺が先に注意をしていればなあゝ。もしかしたら……、彼女と、むふふふっ……

御仕舞

第三十三話 ヤクザ擬き（もどき）の馬鹿

1

いるンだよねえ、そんな馬鹿がときどき……。

いつも通り、いつもの時間に、窓際サラリーマン山田一郎は日暮里駅で常磐線から京浜東北線に乗り換えた。

階段を下りて直ぐに乗れる最後尾の車両の一番前のドアが山田の乗り口だ。

そして優先席の前に立つ。

三人掛け席がすべて空いていても座らない。

それが山田一郎のプロ・サラリーマンとしての矜持だった。

「えっ、サラリーマンは皆プロだろう、だって？」

チツチツチツ……、いえいえ、とんでも八分、歩いて六十五分、最近アマチュアのサラリーマンが増えています。

なにが、なんとかビジネススクール出身じゃ、仕事が嫌で逃げようと偶々受けてみたら、受かっちゃまったくせによお。

バブルがはじけて世間の企業は派遣するのを躊躇い始めた、そんなとき、急にボンボンのオーナーが思い立った。

時流に乗って稼いだ小金はたとあるが世間の評価は二流企業、超一流とまでは望まないけれど、せめて一流の下ぐらいは目指したいと……。

まあ、己を知った望みだな。

それで藁にもすがりたいと受けてみたら、カモ、あつ、失礼、入学者が減って困っていた某有名私立大学の“多少馬鹿でもいい受講料をあげて、二流企業から取れ”という思惑と一致した。

頭のデッサン能書きだけの輩を輩出、“あつ、なるほど、輩だから輩出か”。

なにしろ元々があまり上等なオムツ、おっと、オツムではないから

応用力というものがない、唯ひたすら教わったことだけを忠実に実行しようとする。

だからどこを切ってもみんな同じだ。

まあ、どれでも同じとなれば、差をつけるのはゴマすりの上手い奴、そんな奴が出世する。

得てしてボンボンは耳障りな話を嫌う、山田の会社のボンボンもご多分に漏れずだった。

自分の女の不始末を処理してくれる人間と心地良い話しだけを持つてくるゴマすり男たちを重用するようになる。

そして、本当に会社を憂いる人間を遠ざけた。

「えっ、その結果どうなったか、ですって？」

そんなこと、考えなくてもわかるでしょう。

可哀想なのはなにも知らず、否、知らされず、いつの間にか人手に渡った会社で、新しい経営者から減俸、格下げ、早期退職を宣告される。

――ああ、無情。

いかしボンボンとその取り巻きたちはわずかに残された蜜に醗く群がり、虐げられし者たちの苦しみなど歯牙にもかけない。

それがまた、ボンボンのボンボンたる所以か……。

まあ、一族の中でマトモな男と評価されトップに立ったわけだが、糞と味噌という喩えがあるだろう、所詮この一族は糞に限りなく近い連中の集まりだ。

だからその中でマトモと言われても、高がしれているわな。

2

はて、なにを話そうとしたんだっけ？

そうそう、優先席の前に立ったら、座席に踏ん返り返って足を投げ出した馬鹿がいたんだ。

どう鼻屑目に見ても、老人、怪我人、身障者、妊婦、乳飲み子を抱

えた母親には見えない、そのオツムの中身を除いては……。満足すぎる肉体、簡単に言えばデブだ、体重百キロ以上はあるだろう。

デカイが中身の少なそうなオツム、そのカボチャ頭を覆うクルクルパー、つまりパンチパーマだ。

いまどき古いねえ…。

派手な金ぴかの服装、売れないどさ回りの演歌歌手、ごめんなさい、真面目にどさ回りをしている演歌歌手の皆さん……。

シャツはほら、映画でチンピラヤクザがよく着ているサイケデリック柄の襟がこんなデッカイやつ。

そのシャツの胸元を大きく開けて、太い金のネックレスを晒している。

おい、メッキが剥けているぞ。

袖口からはこれまた太い金のブレスレットとロレックスが除いている。

おい、こっちもメッキが剥けているぞ。

その金ぴかカボチャ頭が眉間に皺寄せて辺りを睥睨する。

本人は、渋く高倉健か鶴田浩二を気取っているつもりだろうが、なに、下駄で踏み潰したブルドックの面を横からバットで殴り飛ばしたような顔だ。

早く言えば、遅く言っても同じだが、不細工な狸面……。

まあ、怖いと言えば怖いが、面白いと言えばこの上なく面白い……。そんなのが踏ん返り返って足を組んでいれば誰も文句は言わないよね。

おっ、そうそう、靴はこれもいまどき珍しいクロコダイル、まあ、ビニールだろうけどネ。

山田は“しまった”と思ったが、いまさら他へ移動するとどんな難癖をつけられるかわからない。

それで単行本を取り出して読書するが、その男が気になって専念できない。

この野郎、早く降りてくれないかなあ、と祈りつつ活字を目で追いかけるが、活字はドンドン逃げていく。

・隣が空いたらどうしよう。否、大丈夫だ。この席はいままで途中で空いた験がない・

と、上野駅で隣のオヤジが席を立った。

山田は気づかない振りをする。

・上野なら乗降客が多い、誰かが座るだろう・

山田は視線を本からはなさない。

だが、期待に反して誰も座らない。

まあ、それはそうだろう、誰が好きこのんで火中の栗など拾うものか。

こんなとき、図々しいお婆さんが、“はい、お兄さん、ごめんなさいよ”などと言って座ってくれないものか。

トンと誰かに背を押され膝と膝がぶつかった。

・うつ、ヤバイ……・

3

「す、すみません」

と謝った拍子に金ぴか力ボチャ頭と目が合ってしまった。慌てて目を逸らしたら隣の空席に目がいった。

山田の目線を金ぴかの目線が追う。

その目に誘われるように、もう一度目があつた。と、男の目がすつと右に振られた。

「えっ？」

と山田は声を出してしまった。

『座れ』

とひと言、腹に響く低音で言った。

「あつ、へつ、ぼ、ぼく……」

焦る、背中を冷や汗が流れた。

『座れ』

と言つて、ジロツと山田を睨まれた。

「ああ、い、いえ、ぼ、ぼぼ……」

山田がドギマギしていると、男の表情に怒りが込み上げてくるのはつきりと見てとれた。

・ヤ、ヤバイ……、ああ、朝からついてないな。夢見が悪かったか、今日は仏滅か、十三日の金曜日か・

覚悟を決めて網棚に乗せた鞆に手を伸ばした。

『あら、空いてるじゃないの。はい、ごめんなさいよ』

山田の腰の辺りを掻き分け小柄なお婆さんが、“よっこらしょ”と座った。

“地獄に仏”、“渡りに船”、“急がば回れ”“馬の耳に念仏”は違うか……。

とにかく助かった。

山田と目が合ったお婆さんがニコリと微笑むと、隣の金ぴか力ボチヤ頭の顔をジロリと睨んだ。と、

チエツと小さく舌打ちをして、男はスゴスゴと足を引き姿勢を正した。

お婆さんは満足気に肯くと、静かに目を閉じた。

しかし、よくよく考えてみれば、こんな早朝の電車に、いかにも私はヤクザです、といった格好をした本物のヤクザが乗るわけではない。席を取りたいがための、或いはゆつたりと座りたいがための、小さなオツムで精一杯考えた末の虚勢なのだろう。

素人がヤクザの真似をして粹がってなんかいると、そのうち大怪我をするよ。

それにしても大の男が、なんとも情けない話ではないか。

御仕舞

第三十四話 あゝあ、付いてないなあ…

1

窓際サラリーマン山田一郎は、毎日上野駅午後六時二分発の常磐線に乗る。

一本前の五時五十四分発にも十分に乗れるが、この列車と決めている。

二、三、二、この数字の意味はわかるね。

七人掛け席はステンレスの柱で、このように区切られている。

日本の乗り物は大概そうなのだが、比較的小柄な体型が基準になっているようで、どれも席が狭い。

いつもの席に座ってホツと一息、単行本を取り出した。

しばらく安穩のときが過ぎ、発車二分前を告げる車内放送が流れた。目線を上げた山田は横目で捉えたその姿に驚愕したが、

・はははっ、あんなのが隣へ座ったら目も当てられねえな・と、他人事のように呟いた。

ドスン、ドスンと地響きを立てて、額の汗を拭いながら近づいて来る。

・来るな、来るな・

と祈ると、その祈りが通じたのか、山田の前を通り過ぎた。

・おいおい、もうすぐ十一月だぜ・

季節外れの白いスーツが余計に太った身体を大きく見せている。

・ふーう、よかった。身長百六十五、体重は百二十といったところだろう。あんなのが……、えっ!?!・

ホツとしたのも束の間、男は立ち止まるとその姿勢で考えている。

・なんだ、約束でも思い出したか。まさか、隣の席に狙いをつけたわけじゃねえだろうな。ほら、俺の身体はこんなに大きいぞ。二人で座ったら狭いぞ。ほれ、あっちの席が空いている。隣は小柄な

女性じゃないか。あれならそれほど狭くないだろう。そうそう、ほら、あっちへ行けよ・・・

男は前足に体重をかけた。

・・・そうそう、いいぞ、いいぞ。あつ、な、なんだよ・・・

男が後ろ足に体重を移行させた。

・・・ははっ・・・まさか、まさか、ええっ・・・、嘘、だろう・・・

男はデッカイケツを窄めるようにして、ゆっくりと隣の席に腰を下ろした。

最初は遠慮深げに浅く腰掛けていたが、徐々に深く尻を入れてくる。そのマシユマロのような弾力を持った巨体が山田の細身の身体に密着する。

・・・うへえ、参ったなあ。俺、他人と身体を接するのが嫌いなんだよ。若い女ならいいけどネ。へへへっ・・・

などと冗談を言っている場合ではない。

座席が軋み、山田の身体は左側の壁に押し付けられる。

・・・うつ、こら、俺を圧殺するつもりか。なんでここナンだよ。向こうに空席があるだろう。参ったな。デブ、あっちへ行け、とは言えないしなあ・・・

2

山田は単行本に意識を集中しようとするが、隣がモソモソと動くたびに、身体の密着度合いが増していく。

己の身の不運を訴えるように情けない目線をあげると、周りの乗客たちの視線が、“ああ、お気の毒さま”と語っているように見えた。・・・糞、付いてねえな・・・

頻りに汗を拭く男、すえた汗の臭いが鼻をつく。

・・・臭いなあ、風呂へ入っているのかよ、まったく。参ったなあ、このデブ、どこまで行くンだろう。北千住までなら我慢してもいいけど、松戸まではちよっと辛いな。糞ッ、次の電車に乗り換えるか

……。しかし待てよ、なんで俺が乗り換えなきゃいけないんだ。行くならこのデブだろう・・・

太っていてもいいですよ、それは個人の自由だもの。

デブだからって差別しているわけじゃない、ただその体臭と開き直ったような遠慮のない無神経さが嫌ナンです。

服装や持ち物ばかりに金をかけるンじゃなくて、体臭対策に柑橘系の上品な香のオーデコロンでもつけなさい。

でもね、あんまりしつこいのは逆効果ですよ、気をつけてください。なのに、なのに、隣の男は携帯電話を取り出し、ツクツク、ツクツクとメールを打ち出した。

・・・こら、デブ。迷惑の二乗か！・・・

と怒鳴りたくもなる。

まあ、このデブに限ったことではないが、隣でこれをやられると気になる。

しかしキーを押す音は消されているし、話をしているわけでもない。ので文句は言えない、それで余計に腹が立つ。

JRさん、並びに私鉄各社の皆さん、飛行機のように車内では携帯電話の電源は切るように指導してください、お願いします。

山田が次の列車に移ろうかどうかと悩んでいるうちに、発車ベルが鳴り出した。

それで、“ええい、ままよ”とそのまま行くことにした。

日暮里駅に到着、しかし、男は降りない。

・ 糞ッ、頼む、北千住で降りてくれ。ああ、神様、お願いします・

隣のデブの饅えた汗の臭いと携帯を打つツクツク、ツクツクという音で、どうにも本に集中できない。

“エッヘン、うるさいな”と小さく囁いてみても、そのデブは“我関せず”とまったく気にも留めない。

と、ガサゴソ、ガサゴソと喧しい音を立てながら鞆の中を探り出した。

・ ・ なにをやっているんだ。この糞デブは……
そのうちに北千住に到着した。
ドカドカと客が降りると、降りた以上の客がドヤドヤと乗り込んできた。
発車のベルに後押しされて、十五両編成の重い図体がゆっくりと動き出す。

3

ガサゴソ、ガサゴソと、デブはまだやっている。
気になって読書に身が入らない。
・ ・ おい、俺が探してやろうか。いったいなにを探しているんだ・ ・ と、騒音が止んだ。

どうやらやつと目的のものを探し当てたようだ。

・ ・ チョコバー……、ここで食うのかよ・ ・
ガブツと噛み付き、首を左右に激しく振って三分の一ほど齧り取ると、クチャクチャ、クチャクチャと咀嚼し始めた。

プーンとチョコレートの芳ばしい香りが辺りに漂い、夕飯前の空きっ腹を刺激する。

・ ・ 違う、そうじゃねえッ！ まったく、今度は迷惑の三乗かよ・ ・

・ ・ ツクツク、ツクツク……、
クチャクチャ、クチャクチャ……、
プーン……。

騒音と異臭の三重奏、山田の怒りがフツフツと沸点に近づいていく。

・ ・ ああ、もう限界だ・ ・
怒り爆弾が遂に臨界点に達した。

・ ・ 野郎、この糞デブ、豚野郎、etc……
もしも近くに山田を知っている者がいたら、起こる惨劇を予測して間違いない目を伏せたであろう。

それほど切れたときの山田は怖い存在なのだ。

読者諸兄、気をつけてください。

やがて、松戸駅への到着を知らせる車内放送が流れた。

それと歩調を合わせるように、山田は両の拳を固く握り締め腰を浮かした。

つ、ついにやるか……。

固唾を呑んで見守る作者、と、

“松戸で降りよう”

とひと言呟いた山田は立ち上がり、スタコラサッサと電車を降りていった。

安堵に胸を撫ぜ下ろす作者であつた。

御仕舞

第三十五話　くらあーッ！　顔を上げて歩け

1

早朝のＪＲ日暮里駅ホーム……。

窓際サラリーマンの山田一郎は乗り換えのために京浜東北線のホームへと急いでいた。

「モタモタしねえでとつと歩け、馬鹿野郎……」
と山田が呟く。

もちろん、前をノタノタ歩く相手には聞こえないようにだが……。なにしろ山田は気が小さく、なによりも争いごとが嫌いだっただけ。しかし、人一倍気は短い。

「おつと、危ねえ……」

と身を交わすと、正面から歩いて来た若い男がジロツと睨んだ。それで、

「あつ、ごめん」

と思わず謝り、ととと、なんで俺が謝るんだ、と後悔する。
「うっ」

階段の上り口で前がつかえて山田が立ち止まった瞬間、後ろから誰かがぶつかつた。

当然あると思った、“ごめんなさい”の一言がない。

チラツと振り返るとひ弱そう大学生風の男だったので、山田は睨みを利かせた。

目と目が合ったが、その男は視線を逸らし、無視、無視、虫。まるで電信柱でも見るような、そんな感情のない目だった。

相手が弱そうに見えたので、一瞬行こうかと思つたが、まあまで、

――山田一郎、年齢五十八歳、早朝のＪＲ日暮里駅ホームで暴力事件……云々、相手が死亡……云々、懲戒免職……云々。

との新聞記事が頭を過ぎり思い止まった。

まったく今時の餓鬼は謝りもしねえ、いったいなんなんだ、まったく……。
いい気になって、オジサンたちを舐めていると痛い目に遭うぞ。
そうなつてから泣いても知らねえぞ。
と呟いて自らを慰めた。

2

電車のホームを歩きながら、道路を歩きながら、階段を上りながら、階段を下りながら、一心不乱に携帯電話の画面を視ている。
・テレビは視るだから、携帯電話の画面も“視る”でいいのかな？・・

せめて歩いているときぐらい、しっかり正面を見て歩けよ。

電車で座ればすぐに狸寝入りを決め込むか、携帯電話の画面に見入るか、馬鹿の二つ覚えだ。

まあ、どっちにしても、老人が目の前に来ても、例えばそこが優先席だったとしても、

『寝ていて気がつきませんでした』

或いは、

『携帯の画面に集中していて気がつきませんでした』

と、席を立たない理由はつけられるわな。

それで目指す駅に着くと全員がパツと目を覚ます。

酔っ払い以外、乗り過ごした奴を見たことがない。

そんな都合のいい話があるか、外国人が不思議に思っているぞ。

それにしても日本人は、いつからこうも総白痴化したのだろうか……。

前にもいったけど、あんたら怖くないの？

そんなに他人を信用していいの？

自分の性格をよく分析してごらん。

それで、周りの奴らがあんたと同じような性格だと仮定してごらん

よ。

駅のホームから落ちたらどうなる？

階段から落ちたらどうなる？

車道に飛び出したらどうなる？

ほら、とてもじゃないけど、携帯電話の画面を視ながら歩いている場合じゃないだろう。

あんだと同じ性格異常者がウヨウヨいるんだよ。

「あんだって、俺は性格異常者じゃない、だって？」

アホかあんたは、それを判断するのは世間様だよ。

なあ、ネエちゃんたち、アンちゃんたち、携帯遊びは家でやりなよ。みつともないだろうが。

「あん、誰に対してみつともない、だって？」

ん？ 確かに、日本人全員が白痴ならみつともなくない、か……、なるほど、一理ある。

でも外国人は？

「なに、外国人はそんなに立派な人間ばかりか、だって？」

うーん、そういわれてみれば、そうとも言い切れない、なるほど、一理ある。

「なに、だいたい他人なんか関係ねえ、だって？」

なるほど、他人の目などきにしないというわけだな。

ふむふむ、なるほど……、それも一理ある。

これで三理になったな。

3

よし、わかった。

じゃあ百歩譲って、百歩譲ってだ……、さっきの話はどうなる。

「なに、さっきの話ってなんだ、だって？」

あんだと同じ、すぐに切れる奴が周りにウヨウヨいるとゆう話だよ。どうだ、怖いだろう。

「別に、だと？」

くう、おまえらには感情というものがない、否、ねえらしいな。

「なに、他人は他人、だって？」

おおそうかい、そうかい。

おまえの分身みてえな奴にホームから突き落とされて、目の前に電車が迫ってから後悔するなよ。

階段でちよいと足を引つ掛けられて、両足が地から離れた瞬間の恐怖に直面して凍り付いても始まらねえぞ。

後ろから押されて、突進してくるダンプカーの前にフラフラッと飛び出して、運転手の吃驚した顔とご対面、小便漏らしても知らねえかな。

それからなあ、それから……、ほんとに怖いのはなあ……、普段は大人しい小父さんたちが切れたときだかんす。

なにしろ戦争、……ん？

「あんた幾つだ、だと？」

五十八歳と十ヶ月と一日だ、文句あるか？

「それじゃ、戦争なんか行つてねえだろう、だって？」

馬鹿者、黙って聞け。

なにしろ戦争の、……へへっ……、話を聞いて育った年代だ。文句あつか？

「なに、ずるい、だって？」

それがどうした、大人はずるいものなのだ。

馬鹿者メ、大人を舐めるな。

わかったか、そのくらい大人はずるくて怖いものなのだ。

こら、行くな、大人の蘊蓄に富んだ話を最後まで聞きなさい。

ああ、行っちゃった。

最近の餓鬼は辛抱が足りんな。

はてさて、この先日本はどうなることやら……。

困ったモンだ。

あれ、なんの話だったかな……、はて？

御
仕
舞

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1223y/>

バカヤロー！ 小父さんたちは怒っているんだよ

2011年11月6日10時14分発行